

「言葉のルーツ」おもしろ雑学

著
エンサイクロネット



「言葉のルーツ」おもしろ雑学

エンサイクロネット

まえがき

ふだん何気なくつかっている日本語にも、さまざまな謎と不思議がひそんでいます。とくに、この本で集めた身近で簡単な言葉ほど、その謎は深いようです。

たとえば、「靴下」というごくごく日常的な言葉。靴の「中」に履くのに、なぜ「靴下」というのでしょうか。靴の下に履く人なんて、一人もないわけですが――。

また、「友達」という日本語も、考えてみると不思議な言葉です。普通、「達」という字は、「私達」「あなた達」というように、複数の人に対してつかいます。なぜ、「たった一人の友人」でも、「友達」というのでしょうか。

こういう奇妙な言葉も、けっして誤用や誤解で生まれてきたわけではなく、語源をたどるとその謎が解けてきます。そして、そこには、言葉の奥深さを感じさせる何かがあります。思いもよらない歴史やエピソードが隠されていることが多いのです。

むろん、一見、意味不明の日本語も、単なる思いつきや語呂合わせだけで生まれたものではありません。「うんとともすんともいわぬ」の「うん」「すん」にも、もともとはちゃんとした由来があり、「めりはり」の「めり」「はり」にも意味があります。そこには、鎖国時代のヨーロッパとの交流や、邦楽の歴史が関係しています。

語源をたどると、その言葉を生んだ歴史上のドラマに行きあたることが多いのですが、それはむしろ当然のことでしょう。私たちが現在つかっている日本語は、古来私たちの祖先がつかってきた言葉に、中国から漢語が加わり、さらに欧米からカタカナ言葉を取りこむことによって成立してきました。日本語は、その間の歴史が集約されたタイムカプセルともいえるのです。

ただし、歴史が長い分、語源の解明は一筋縄の仕事ではありません。語源研究は国語学の中でも遅れている分野で、一つの言葉にいろいろな説がある場合もあります。

この本では語源説を、なるべく信憑性の高い説を選びながらも、なかには“より面白い”という視点で選んだものもあります。考証に深入りすると、堅苦しい読み物になって、語源の楽しみが薄れてしまうと思うからです。

この本で、身近な言葉に隠された思いがけない語源にどんどん出会い、楽しみながら日本語に強くなってください。

二〇〇一年五月

エンサイクロネット

目次

まえがき

第一章 「慣用句」のルーツを探る

第二章 正体不明の日本語のルーツを探る

第三章 どこか怪しげな言葉のルーツを探る

第四章 身近な「熟語」のルーツを探る

第五章 「動物」がでてくる言葉の謎を解く

第六章 「数字言葉」の謎を解く

第七章 「体」の言葉の謎を解く

第八章 食べ物言葉の謎を解く

第九章 「カタカナ言葉」のルーツを探る

第一章 「慣用句」のルーツを探る

▼あなたまかせ

——この「あなた」は誰のこと？

「あなたまかせの態度が許せない」といわれたときは、自分の力でやろうとしないで、安易に他人に頼る態度を非難されている。そのため、「あなたまかせ」のあなたとは、自分以外の人間のことだと思っている人が多いようだ。

しかし、この「あなた」は、人間のことを指すのではない。じつは、「あなた」とは阿弥陀如来のことなのである。

ほうねん

鎌倉時代、浄土宗の開祖法然は「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えるだけで救われると説いた。

このシンプルな教えは、公家から武士、農民に至るまで深く浸透していったが、浄土宗でいう「あなたまかせ」とは、すべてを阿弥陀如来におまかせし、来世で極楽浄土に生まれ変わることを願うことだった。つまり、すべてを阿弥陀如来に頼るという「他力本願」のことだったのだ。

それがいまでは、「あなたまかせ」も「他力本願」という言葉も、他人に頼る無責任な態度を批判する意味でつかわれている。

▼ひっぱりダコ

——「蛸」か、「凧」か？

シドニー五輪の女子マラソンで、金メダルをとった高橋尚子選手には、帰国後、マラソン大会やイベント、講演、サイン会、テレビ出演と、あちらこちらからお呼びがかかった。そのあげく、「太りすぎ」とか「遊びすぎじゃないのか」といったバッシングまで受けた。

それにしても、五輪後の彼女の人気ぶりにはすごいものがあつた。ああいう状態を「ひっぱり

ダコ」というが、この「タコ」を空にあげる凧のことと思っている人もいるだろう。だが、蛸を

語源とする説のほうが有力だ。

蛸の干物は、つくるときに蛸の脚を八方に引っ張って干す。この形に由来して、方々から引く手あまたであることを「ひっぱりダコ」と呼ぶようになったようだ。

ただし、高橋選手のケースを見ていると、ひっぱりダコの人気者も、風向きが変わると足を引っ張られることもあるようだ。

▼喜びもひとしお

——「ひとしお」って、何のこころ？

「新郎新婦のご両親におかれましては、喜びもひとしおでしょう」

結婚披露宴でよく耳にするフレーズだが、この「ひとしお」は漢字では「一入」と書く。この書き方を見て、「何かが何かに入る」ことが語源と推理した人はなかなかスルドイ。

もともと、この言葉は、染色の仕事からきたもので、染め物を染料に浸ける回数のことをいう。つまり、布を染料に一回浸ければ「ひとしお」。二回なら「ふたしお」。何回も繰り返して浸けることを「やしお」といった。

染料に一回浸けると、色鮮やかに染まることから、大きな喜びを表す言葉につかわれるようになったという。ひとしおの「しお」は、染の「しむ」という読みが変化したものと考えられている。

▼「めりはり」がない

——どんなものがない？

「めりはりがない」といえば、ものごとの調子に効果的な強弱がなく、単調な様子のこと。逆に「めりはりがある」は、効果的なリズムがあるという意味になる。

「めりはり」は、そもそもは邦楽の世界でつかわれていた言葉だ。長唄など邦楽では、基本となる曲調よりも、調子を少し低く下げることが「減り^めり」という。一方、高音を多用し、強く歌った

り、演奏することを「張り」という。そこから、「めりはり」という言葉が生まれた。

漢字では「減り張り」と書くほか、「乙張り」とも書く。乙の字をつかうのは、邦楽では甲かんが高い音、乙が低い音を表すからである。

「めりはり」は、邦楽と縁の深い歌舞伎の世界で、演技の強弱を指す言葉につかわれるようになり、その後一般社会に広がることになった。

▼そりが合わない

——「そり」って、何のこと？

「あの人とは、そりが合わないというか」——阪神タイガースの野村監督は、かつて巨人の長嶋監督について聞かれ、そう答えたことがある。

現役時代は、「長嶋がひまわりならば、私は月見草」といったこともある。血液型は同じB型なのに、明るくて華やかな長嶋監督と、地味で陰気な野村監督とは、いろいろな面で正反対である。

はため

たしかに、傍目にも、二人はそりが合わなさそうに見えるが、こういうときにつかう「そり」

そり

は、刀の反のこと。刀の反は、カーブしている刀身の背にあたる部分のことで、刀を鞘さやにお

さめるとき、刀の反と鞘のカーブが合わなければ、うまくおさまらない。そこから、相性が悪く、しっくりいかない仲のことを「そりが合わない」というようになった。

ただし、ペナントを争う球団の監督どうしが、大の仲良しでは、見ているほうはシラけてしまう。むしろ、そりが合わないくらいの方が、観戦する楽しみは増えるというものだ。

▼身からでた錆

——この「身」は何の身？

いくさ

江戸時代、天下太平の世がつづく、武士は戦にでる機会がなくなり、刀をめったに使うことがなくなった。

それでも、誇り高い武士たちは、身分の低い者に恥をかかされたりすると、切り捨て御免といって刀を抜くことがあった。しかし、刀はちょっと手入れを怠ると、錆がでてしまう。さび「おのれ、手討ちにしてくれる」と刀を抜いてみたものの、刀が錆びていて赤っ恥をかくこともあったようだ。

つまり、身からでた錆の「身」とは、もともと刀身のことをいった。そこから、自分が原因となった失敗や困難をいうように変化した。

▼「はく」がつく

——何がつくのか？

はくしやく

昔は、伯 爵の位をもつ人を、「○○伯」と呼んだものだ。いまは、博士号をもつ人に「医博」などと「博」の字をつける。

そして、「はくがつく」といえば、人や物が一般に認められて一段と高い値打ちがつくこと。人間の場合では、地位、肩書が、その人に「はく」をつけることが多い。

ただし、この「はく」は漢字では「伯」でも「博」でもなく、「箔」と書く。貴族の位や学位とはまったく関係なく、貴金属を薄く平らに延ばしたもののことだ。蒔絵や襖絵などに施す金箔、銀箔などのことである。

まきえ ふすまえ

ただし、これらの「はく」の共通点は、とかくはがれやすいこと。高価な工芸品も、箔がはがれると一気に値段が下がってしまうものだが、人間の場合も地位や肩書を失ってしまうと、醜い地金が見えてくる人が多い。

▼口火を切る

——どんな「火」？

学級崩壊は、授業中に一人の生徒が立ち上がってウロウロしたり、突然大声をだしたりすることがきっかけで起こる。それをはずみにクラス中が大騒ぎになって、授業ができない状態になってしまうことだ。

こんなとき、騒ぎのきっかけになった子は学級崩壊の「口火を切った」ともいえる。この「口火」は、そもそもは火縄銃に関する言葉で、火縄銃は、一発ごとに縄に火をつけてズドンと撃つが、その縄に火をつけることを口火を切るといったのだ。

▼図に乗る

——この「図」は、どんな図のこと？

思いどおりにものごとが運び、つけあがるさまを「図に乗る」という。カラオケに行って、「うまい！」とほめられると、図に乗ってマイクをはなさなくなる人もいる。

ただし、もともと図に乗ることは、けっして悪いことではなかった。むしろ、「よくぞ、図に乗った」とほめられたのである。

しょうみよう

この言葉は仏教の「声明」に由来する。声明は、仏教の儀式、法要で唱える声楽の総称で、「図」はこの声明の転調の度合いを表す図表のことをいう。つまり、声明の楽譜のようなもののことになる。声明を唱えるとき、図どおりにうまくいくことを「図に乗る」といったのだ。

それがよくない意味になったのは、現代のカラオケ自慢と同じで、声明でうまく図に乗れたとき、増長する人物が多かったということだろうか。

▼辻褄が合わない

——もともとは、何の用語？

「その人とは、もう半年以上も話していないといいながら、この携帯電話の着信記録は何だ。辻^{つじ}褄^{つま}が合わないじゃないか」

といって責めているのが男性で、責められているのが女性というケースが、最近は増えているかもしれない。

男女のどちらにしろ、そんな辻褄の合わない証拠を握られては弁解もできないが、この辻褄が合わないという言葉、もとはもっぱら女性のつかう言葉だった。

さいほう

裁縫をしながら、「あら、辻が合わないわ」「褄が合わないわ、どうしましょう」と嘆いた

すそ

のである。裁縫でいう「辻」は縫い目が十字に合うところで、「褄」は着物の裾の左右が合うところのことをいう。こういう場所をうまく縫いあわせないと、仕上がりの悪い着物になった。

そこから、ものごとの道理が合わないこと、ちぐはぐなことを「辻褄が合わない」というようになったのである。

▼ハッパをかける

——このハッパは、葉っぱではない

昔はスポーツの監督やコーチが、選手に厳しい言葉をかけて、気合いを入れたものだが、最近では、ハッパをかける監督やコーチは少なくなったようだ。

ところで、「ハッパをかける」といっても、上から枯れ葉をかけて、カムフラージュすることではない。この場合の「ハッパ」は、漢字で書くと「発破」。鉱山や土木工事で、爆薬を使って岩石を爆破することである。発破をかけて固い岩を吹き飛ばし、さらに工事を進めていく。そこから、厳しい言葉で気合いを入れることを「発破をかける」というようになった。

ただし、最近の子どもは、ハッパをかけると、デリケートなハートが粉々に砕けかねない。昔に比べ、言葉のかけ方も難しくなっている。

▼「ドス」の利いた声

——短刀との関係は？

にんきよう

昔懐かしい東映任 俠映画に欠かせない小道具といえば、「ドス」である。ラストになると、主人公はドスを吞んで敵一家に単身殴りこみをかける、というのが定番。藤純子扮した緋牡丹お竜など、ドス一本で大の男をばったばったとなぎ倒したものだ。ちなみに、「ドスを吞む」とは、ふところ懐に短刀をしのばせることである。

隠語で短刀のことを「ドス」というのは、人を「脅す」ための道具だからである。そこから、暴力をにおわせて脅すことを「ドスを利きかす」というようになった。そして、そういうときにかう野太く、迫力のある声が「ドス」の利いた声である。人を脅して、こわがらせるための声が「ドス」の利いた声なのだ。

だから、いくら低音が魅力の声でも、「ドスの利いた声ね」といってはいけない。これは、ほめ言葉につかえない言葉なのだ。

▼後の祭り

——どんな地方のお祭り？

釣りでは、釣り糸がほかの竿の釣り糸とからまることを「お祭り」という。こんがらがると、ちよっとやそつこのことではほどけない。注意しておけばよかったと思っても、「後の祭り」で

ある。

手遅れ、時期が遅れて役に立たないことを「後の祭り」という。この言葉は、単に「祭りの翌日」のことをいうという説もあるが、特定の祭りを指しているという語源説もある。京都を代表するお祭り、八坂神社の祇園祭りである。

やまぼこじゅんこう

祇園祭りの見どころといえば、山鉦の巡行であり、これを前の祭りという。その後行われる「還幸」の行事では、山だけが登場し、鉦は現れない。そこで、後の祭りは前の祭りに比べるにつまらないといわれたところから、時期を逸することの意味になったともいう。

▼油を売る

——売っているのに、サボる意味になるのは？

現代で「油」といえば石油のことになるが、この言葉の油は菜種油のことである。

あんどん

江戸時代以前には、菜種油は行灯などの明かり用の燃料として、また食用の油としても、日々の暮らしに欠かせないものだった。

かめ

ます

「油を売る」という言葉は、その油を売り歩いていた油商人の商法に由来する。油を量り売りするときは、甕から客の容器に升を使って移すのだが、当時の油は「油一升金一升」といわれるく

らい高価な代物。だから、一滴たりともこぼさないように時間をかけていねいに移す必要があった。そこで、油商人の商いは悠長だということで、「油を売る」という言葉が生まれたともいわれる。

また、江戸時代、髪油を行商する商人が、婦人客を相手にあれこれ世間話に花を咲かせながら商売をしたからという説もある。

いずれにせよ、油商人の仕事ぶりに由来することはたしかなようだ。

▼打ち上げ

——何をどう打ち上げるのか？

仕事やイベントが終わると、スタッフが集まって打ち上げを行う。居酒屋で飲んだり、パーティを開いたりするわけだが、この言葉、もともとはいったい何をどう打ち上げたのだろうか。

はやし

そもそも、打ち上げという言葉は、長唄の用語で、曲の途中に太鼓のお囃子を大胆に入れて一段と調子を高め、曲調に段落をつけるテクニックのことをいった。

この太鼓を打ち上げて曲に一段落つけるという意味が、長唄とは関係のない仕事にもつかわれるようになり、仕事に一段落をつける、仕事を終えるという意味として一般に広まった。

▼やにわに

——どんな「庭」のこと？

「敵を察知した武蔵は、やにわに刀を抜いた」

こんなときにつかわれる「やにわに」は、漢字では「矢庭に」と書く。矢の庭、つまり戦場のことである。

ぐんびよう

『平家物語』には、「平氏の軍 兵 矢庭に五百余騎討たれぬ」とある。この場合の「矢庭に」は、にわかに討たれたという意味ではなく、矢の飛び交う戦場で討たれたという意味である。

ところが、同じ『平家物語』でも、「矢庭に」が「即座に」「いきなり」の意味で用いられている例が見られる。

もとは戦場を表した言葉だが、「即座に」という意味でもつかわれるようになり、やがて後者の意味が一般に広がった。

▼捨て石

——どんな「石」のこと？

業績が悪くなり、傾きかけた会社から、いち早く逃げだす社員もいる。しかし、そんなときこそ頑張りどころと懸命に働く社員もいる。

そんな人は仲間に対して、「いまは苦しくても、きっと業績は回復する。オレたちは捨て石になってもいいではないか」と説得することもあるだろう。

この場合の「捨て石」は、さしあたりは無駄にみえるが、いつか役立つと考えられるものごとや行為のことをいうが、もとは囲碁の言葉に由来する。

囲碁では、後の局面を有利にするため、相手にわざとらせる石のことを捨て石と呼ぶ。そこから、戦国時代に、戦略上、見捨てなければならぬ将兵や陣地、土地のことを基石にたとえて、こういうようになった。そこから、いろいろな場面で、捨て石という言葉がつかわれるようになった。

もっとも、会社の同僚に「オレたちは捨て石になってもいいではないか」と熱く語れたのはいまは昔の話かもしれない。このせちがらい時代、そんな話をすれば、「捨て石なんか、イヤですよ」と、あっさり断わられるのがオチかもしれない。

▼付け焼き刃

——どんな「刃」のいつ？

テスト前の一夜漬け、付け焼き刃の勉強では、どうにもならない。テストのたびにそう反省しながら、結局その繰り返しだったという人も多いだろう。

にわか仕込みの対策を「付け焼き刃」というが、この言葉、もともとは刀かたなか鍛冶の間でつかわれたものである。

日本刀を仕上げるとき、鋭い切れ味を得るためには、何回も地金つちを槌で打ち、鍛練しなければならなかった。この工程で手を抜くと、見かけはよくても、弾力不足になって、もろい刀に仕上がった。そんな刀では使えないので、鋼はがねを間に合わせて焼いて付け足した刃のことを「付け焼き刃」といったのだ。

ここから、実力のない者が、できるふりをして態度をとりつくろうさまを「付け焼き刃」というようになった。

▼埋め草

——もともと、どんな「草」のこと？

新聞には、小さな交通事故や傷害事件の記事が載っている日もあれば、載っていない日もある。

そういう事件事故は毎日起きているのに、なぜ掲載されたりされなかったりなのだろうと疑問に思う人は、同じ紙面の他の記事を見ればいい。

大きなニュースがあると、その記事が紙面を大きく使うため、交通事故などの記事はほとんど掲載されなくなる。一方、大ニュースのない日は、紙面に余裕ができるため、そういう記事も掲載されるのだ。大ニュースのない日、余った紙面は小さな事件事故の記事で埋めているのだ。

こんな小さな記事のことを「埋め草」というが、もともと埋め草とは城の堀を埋めるための草のことをいった。昔、敵の城を攻撃するとき、草を放り込んで堀を埋めたのである。

これが転じて、欠けた部分や空いたところを補うものという意味でつかわれるようになり、新聞社や雑誌社で余ったスペースを埋める記事のことを、こう呼ぶようになった。

▼釘をさす

——どんな「釘」のこと？

「あいつ、本当に大丈夫かな。ちょっと釘をさしておかなきゃ」というようにつかわれる「釘をさす」は、鎌倉時代に生まれた建築用語。

それまでの建築物は、材木に穴を開け、そこに他の材木をはめる方式でつくられていた。正倉あぜくら

院の校倉づくりは、その建築技術の代表例で、築後千年の歳月を経ても元の姿をたもってい

る。

この工法だと、好天がつづいたときは木材が乾燥して縮まり、材木と材木の間にゆとりができ木材に負担をかけない。また、雨が降ると、材木が適度に湿気を吸って、ズレがそれ以上大きくなならない。雨が多く、湿度の高い日本の気候を計算して考案された工法だった。

ところが、鎌倉時代になると、昔ながらの工法にくわえ、念のために釘でも止めるようになった。これが「釘をさす」の語源で、やがて念入りに警告しておくことを、そういうようになったのである。

ただし、釘を使うと、釘のさびが木材を傷め、釘を打った場所から建物が傷む原因ともなった。人間関係でも、あんまり厳しく釘をさすと、そこから関係がこわれかねない。

▼お払い箱

——どんな「箱」のこと？

「お払い箱になる」は、いまふうにいうとリストラされること。解雇されることや必要のないものが捨てられることをいう。しかし、このお払い箱、もともとは「御祓箱」と書き、ひじょうにありがたい箱だった。

だんな

昔、伊勢神宮から檀那と呼ばれる有力な信者たちに毎年配られていた箱が、「御祓箱」であ

おし

こよみ

る。神社に所属する御師と呼ばれる人たちが全国をまわって配り、その箱のなかにはお札、暦や薬などが入っていたという。

ただし、ありがたい箱ではあるのだが、毎年新しい箱が配られるため、年がかわると古い箱は用済みになる。そこで、古い箱は不要なものを入れるために使われることがあった。そこから、御祓箱に入れるという意味で、「お払い箱になる」という言葉が生まれた。

▼油が切れる

——この「油」は、どんな油？

オリンピックなどの国際スポーツ大会で、中国の選手が登場すると、客席から「チャーヨー、チャーヨー」の大合唱が起きる。漢字で書くと、「加油」。中国語で「ガンバレ」という意味である。油を加えるでガンバレとはいいて妙だが、日本語には逆に「油が切れる」という言葉がある。

「油が切れる」というと、ガソリンが切れて、動けなくなるクルマをイメージする人が多いだろうが、この言葉は人間がガソリンを使う前から存在していた。この油は、石油のことではないの

だ。

「油が切れる」の油は、動物性の脂のこと。「脂ののった魚」などというときの脂のことだ。いまでは、脂肪のつきすぎのほうの問題だが、満足に食べられなかった昔の人にとっては、活動力の源でもある脂が切れるほうがよほど大きな問題だった。

▼縦割り

——何をどう割ること？

電線を地中に埋めて、街の景観をすっきりさせようという意見がある。欧米では当たり前の考え方だが、日本でこの計画が進まないのは、縦割り行政が原因だといわれる。

かんかつ

電線を管轄するのが経済産業省（旧通商産業省）なら、埋める道路の管轄は国土交通省（旧建設省）。お互いの権限と省益がからんで、いまだ電線の埋設は遅々としてすすまない。

このように、管轄する省庁が複数あって業務がいつこうに進まないのが、「縦割り行政」の弊害だが、もともと「縦割り」という言葉はお役所の専売特許ではなかった。

最初に、縦に割られたのは、じつは武士の頭だった。ときは室町時代、合戦で脳天からまっすぐに斬り下げることをいった。

日本のお役所にも、頭を縦割りにするくらいの衝撃を与えないと、いまや世界的な物笑いのタネになっている縦割り行政はなくならないかもしれない。

▼遠くて近きは男女の仲

——誰がつくった言葉？

「遠くて近きは男女の仲」といわれれば、真面目が洋服を着たような人でも、思いあたる話の一つや二つはあるはず。それだけ、いいえて妙な言葉である。

しんげん

モーパッサンかチェーホフあたり、どこか外国の箴言のような言葉だが、じつは、この言葉の作者は清少納言である。彼女は『枕草子』の中で、「遠くて近きもの、極楽。舟の道。男女の中（仲）」と書いている。さすが、するどい。

ちなみに、清少納言自身は、いい恋愛はできずに一生を終えたといわれる。あまりの賢さに男性に敬遠されたともいわれるが、おそらく彼女が宮廷にあって切ない想いを寄せた男性は、一人や二人ではなかっただろう。

清少納言が実感したのは「近くて遠きは男女の仲」だったかもしれない。

▼芝居がはねる

——どんなものが「はねる」のか？

「芝居が終わる」といっても間違いではないが、通は「芝居がはねる」という。

では、芝居小屋で何がはねるのかといえ、むしろ筵である。

昔の芝居小屋は、文字どおり小屋であって、いまよりもずっと簡単なつくりの建物だった。周りを筵で囲っただけの小屋であり、その中にござを敷いて観客を詰め込んでいた。そして、芝居が終わると、囲いの筵をはねあげる。そうして、客を外へ出したのである。この習慣から、芝居や寄席が終わることを「はねる」というようになった。

いまでも、年輩の人には「芝居がはねたら、そばでも食って帰るか」という人が少なくない。

▼なしのつぶて

——「なし」とは何のこと？

昔は、何通もラブレターを書いたのに返事がないときなどに、「なしのつぶて」といった。いまなら、せっせとメールを送っているのに、返事がないときにつかえばいいだろう。

いずれにしろ、アプローチをしても返事がないことを「なしのつぶて」という。念のためだが、この「なし」は、果物の梨のことではなく、「無し」。一方、つぶては「礫」である。つま

り、飛んでくる「小石もない」という意味である。

なぜ、小石がないことが問題なのかといえ、これには二つの説がある。

いくさ

一つは、昔の戦では、投石も重要な武器だったが、いくら攻撃しても相手が抗戦してこない。この拍子抜けした様子から、「なしのつぶて」という言葉が生まれたのだという説。

もう一つは、恋人が投げる小石という説、といえ、ピンとくる人もいるかもしれない。夜中に男性が恋人の家へ行く。玄関からは入れないとき、彼女の部屋の窓に小石をぶつける。その合図で、彼女が窓を開けて忍び込ませるとするのは、若い恋人どうしではあることだろう。

ところが、小石を窓にぶつけても返事がない。それを「なしのつぶて」と呼んだともいう。

▼ゴリ押し

——「ゴリ」ってどんなもの？

ムリやり押すことを「ゴリ押し」という。会議で通りそうにない意見や提案を無理に承諾させるのも、ゴリ押し。満員電車に乗るとき、後ろからムリやり押すのも、ゴリ押しである。

単に、ゴリゴリ押すからゴリ押しという説もあるが、このゴリとは魚の「鮓」だという説もある。

いしづし

鮠は淡水にすむ小魚で、別名「石伏」とも呼ばれ、水底の石の間にじっとしていることが多い。

捕り方は、筵を川底に敷いて、その上に小石を載せて置く。そして、一人が筵の上流側を持ち上げて待ち、もう一人が下流から棒で川底をつつきながら、鮠を追い上げる。すると、鮠は、筵の上に置いた小石の間に隠れるので、筵で小石ごとすくいあげるといふ漁法だ。

この漁法を「鮠押し」といい、そこから無理押しすることを「ゴリ押し」というようになったという。

▼にべもない

——「にべ」って何のひん?

「丁重にお願いしたのに、にべもない返事だった」

というようにつかわれる「にべもない」の「にべ」は、現在では愛想やお世辞という意味でつかわれている。

しかし、もともとは「にべ」というのは魚の名前で、昔はその魚の浮袋が接着剤の原料として使われていた。ニベニカワと呼ばれ、かなりの粘着力をもつ接着剤だった。

そこから、「にべもない」というのは、粘着力がないこと、やがて味もそっけもないという意味が生まれ、愛想もお世辞もないという意味でつかわれるようになったのである。

しんじゆうてんのあみじま

近松門左衛門の『心中 天網島』にも、

むかし かか

「つれあひ五左衛門殿はにべもない昔人、鼻の甥子に倒され、娘を捨てた」とつかわれている。

▼斜に構える

——もともと、どんな世界の言葉？

次の総理大臣は誰がいいかという議論の最中に、「総理大臣なんて、誰がなっても同じだろう」という。いまは、国民の多くがそう思っているかもしれないが、普通そういう意見は斜に構えた意見といわれる。

ものごとに正面から対処しないで、皮肉やからかいの態度で臨むことを「斜に構える」というが、この言葉はもともと剣術の世界でつかわれていたものだ。剣術では、互いに正面を向きあつて、まっすぐに構えるのが正攻法とされる。それに対して、剣先を相手に向けしないで、斜めに傾けることを「斜に構える」といった。

この構え方は、剣道では邪道とされ、そこからこの言葉は、ものごとを斜めに見るという意味となって一般に広まった。

▼折り紙つき

——「折り紙」って、どんな紙？

定評があること、保証つきであることを「折り紙つき」という。折り紙といえば、鶴や風船を折って遊ぶ色紙のことをイメージする人も多いだろう。ところが、この場合の「折り紙」はもつと由緒正しい紙のことである。

ほうしよし

昔は、公式の文書、進物用、鑑定書などには、「奉書紙」という紙を用いた。奉書紙は、もともとは上意を下の者に伝えるために使われた最上質の和紙のこと。それを二つに折って、鑑定用に用いたものが「折り紙」だ。

ほんあみ

とくに、江戸時代、刀剣鑑定の本家、本阿弥家が、二つ折りにした奉書紙を刀の鑑定書に用いたところから、「折り紙」「折り紙つき」という言葉が一般に広まった。たとえば、折り紙つきの刀は折紙太刀と呼ばれた。

そこから、信頼できるもの、人柄などにも、この言葉がつかわれるようになった。

【コラム】

「オッス」「お休みなさい」「さようなら」「ありがとう」

——挨拶言葉のルーツ

最近では、女の子でも「オッス」と声をかけるようになった。

彼女たちは何時に出会っても「オッス」といつているが、もとは「おはようございます」が「おはようッス」となって、「オッス」にまで縮まったといわれる。

はがくれ

「押忍」と漢字をあてるのは、武士道の『葉隠』に由来する。「押し」は順境、「忍び」は逆境に耐えることを表し、どんなときでも己を磨くことを意味している。

「お休みなさい」は、「ごゆるりとお休みなさいませ」が短くなった言葉。夏目漱石の『草枕』にも、「床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい、言葉を述べて、出て行った」とある。「ごゆるりとお休み」といいあううちに、ごゆるりが取れて「お休みなさい」となった。

さらに、「さようなら」もとの言葉が縮められている。昔は、「左様ならば、お別れしました。」が正しいいい方だった。それが、最初の「左様なら」だけで、別れの挨拶として独立した。

まれ

これらに対し、「ありがとう」は読みが変化した言葉である。昔の人は、世にも希なことがあると、神仏に対して「有り難し」と手を合わせた。それが、他人から好意を受けたときにもつかわれるようになって、「ありがとう」という言葉が生まれた。

第二章 正体不明の日本語のルーツを探る

▼開け！ ゴマ

——なぜ、ゴマでないと開かない？

「開け！ ゴマ」といえば、ご存じのように、『アラビアンナイト』の中の有名な一話「アリババと四十人の盗賊」に登場する言葉。

どうくつ

「開け！ ゴマ」とおまじないを唱えると、宝のある洞窟の扉が開くのだが、なぜゴマがでてくるのだろうか。実際、この物語では、「開け！ 麦」などと別の言葉を叫んでも、いっこうに扉は開かない。

ゴマになった根拠ははっきりしないが、ゴマという食べ物物の効用と関係していると考えるのが自然だ。ゴマには豊富な栄養があるだけでなく、栽培の簡単な植物でもある。『アラビアンナイト』が成立したアラビア地方でも、有用な植物として広く栽培されていた。そんな豊かさをもたらしてくれるゴマのありがたさが、「開け！ ゴマ」というセリフを生んだと考えられる。

また、ゴマを炒^いると、実がパチツとはじける。そのパチツと開く景気よさから、「開け！ ゴマ」という言葉になったという説もある。

▼うんともすんともいわぬ

——「うん」「すん」って何のこと？

友達にeメールをだしたのに、その後何の音沙汰もない。おとさた「あの人は、うんともすんともいってこない」などとボヤくことになる。

この「うんともすんとも」という言葉、単に「ハイ」という意味の「うん」に語呂合わせをしたものにもみえるが、そうではない。この言葉のルーツには、もっと歴史的なものがある。

「うんともすんとも」のルーツを探ると、江戸時代に流行した「うんすんカルタ」に行き着く。これは、室町時代にポルトガルから伝わったカルタが日本化したもので、花札のようなやり方で遊ばれた。ちなみに、ポルトガル語では「うん」は「一」を表し、「すん」は「最高」を表す。

このうんすんカルタは一時的には大流行したのだが、すぐにすたれてしまい、誰も遊ばなくなってしまった。そこから「うんともすんともいわぬ」という言葉が生まれた。

——ミーちゃん、ハーちゃんって誰のこと？

最近は、映画、音楽、歌舞伎、あるいはワインなど、さまざまな分野に女性の“通”が増えてきた。これでは「ミーハー」という言葉も、なかなかつかいにくくなりそうだ。

「ミーハー」というのは、「ミーちゃん、ハーちゃん」の略である。この「ミーちゃん、ハーちゃん」は、もとは「みよちゃん、はなちゃん」のこと。昔の女性の名前には、「みよ」「はな」という名前が多かったため、「ミーちゃん、ハーちゃん」は女性を総称する代名詞のようなものだった。

そして、「女にはたいした見識があるはずもない」という当時の男たちの思い込みがあって、「ミーハー」は「流行に飛びつく考えの浅い人たち」という意味になったのだ。

▼へなちょこ

——どこからきた言葉？

酒の席で酔いにまかせてしゃべっていると、思わぬことを思いついたりすることがある。「へなちょこ」という言葉も、そんな酒の席から生まれた言葉である。

未熟な人間をからかうとき、「へなちよこ」と呼んだりするが、この言葉は、もともとは酒を飲む猪口のことを指した。「へな」という黒い粘土でできた猪口があり、あまり出来のいいものではなかった。

明治時代、ある新聞記者がこの猪口で酒を飲んでいたとき、酒を注いでも焼きの甘い猪口が酒を吸ってしまう。そこで、「このへなちよこめ!」とけなした。これが悪口として広がって、粗末なものをけなす言葉、未熟者をからかう言葉になったという。

▼ポンコツ

——いいえて妙だが?

古くなった機械が動かなくなったとき、叩くと動きはじめることがある。そんな機械を「ポンコツ」というが、「ポンコツ」という言葉のルーツにも「叩く」ことが関係している。

ポンコツは一説によると、「げんこつ」のなまりだという。

げんこつ

明治時代、日本人は拳骨をふるいながらいろいろなモノを解体していたが、この「げんこつ」という言葉を西洋人が聞き間違えた。

西洋人は「ポンコツ」と聞き取り、それがいつしか中古品や廃品のことをいうようになったという。

また、機械などを叩いて壊すときには、「ポン」とか「コツン」という音がする。その音から、「ポンコツ」という言葉が生まれたという説もある。

いずれにせよ、叩かれて廃品になっていくようなものがポンコツというわけである。

▼つつけんどん

——元祖「つつけんどんな店」とは？

「つつけんどん」な店というと、お客に愛想がなく、邪険にさえするような店のこと。さすがに最近、そうした店はあまり見かけなくなったが、昔の人から見れば、現代のセルフサービスの店など、十分「つつけんどん」な店に思えるかもしれない。

「つつけんどん」という言葉のルーツは、江戸時代の「けんどんそば」にさかのぼる。そのそばは「けんどん」という器に盛られていたため、この名がついたが、それまでのそば屋とは様子が少々違っていた。店の人は給仕もしてくれなければ、おかわりもなかった。いまでいうセルフサービスのような店で、お客と店員が会話をするような雰囲気はなかった。そのため、けんどんそばの店には愛想がないという話になり、「つつけんどん」が愛想のないさまを指すようになった。

もっとも現代では、セルフサービスのハンバーガー店などでは、むしろスマイルは売り物になっている。

▼ふんだん

——漢字ではどう書く？

ひらがなで書いている言葉が、そのルーツをたどっていくと漢語だったというケースはよくある。「ふんだん」も、その一つである。

ものやお金があり余っている様子のことを「ふんだんにある」というが、これを漢字で書くと「不断にある」となる。「不断」は「途切れずにつづく」という意味で、これが転じて「ふんだん」となったのである。

「不断」は他にも転じていって、江戸時代には「ふんだく」という言葉もあった。これまた、ものが十分に余っているさまをいう言葉だった。

▼どーもどーも

——どんな「どうも」から？

「どーもどーも」というのは、いまやサラリーマンにとっても便利な挨拶言葉。ハワイの「アロハ」と同じで、「おはよう」にも「こんにちは」にもなる。これさえいっていれば、どんな状況でも挨拶になる便利な言葉だ。

この「どーも」は省略言葉で、「どうもありがとう」や「どうもすみません」を省略したものである。いつも「どうもありがとう」と丁寧に挨拶をしていたのでは、まだるっこしいし面倒だ。そこで、頭の「どうも」だけが残って、あとが省略されたのだ。

だから、「どーもどーも」は軽い挨拶としてつかえても、あらたまった場面ではおかしいことになる。

「どうも」という言葉には、ほかにもいろいろ使用法があり、「どうも明日は雨らしい」というときには推量の意味があり、意見を求められたとき、「どうもね」と答えると、否定的な意味になる。

▼ちゅうちゅうたこかいな

——単なる語呂合わせ？ それとも意味はある？

子どものころ、数を数えるのに「ちゅうちゅうたこかいな」という言葉をつかったことがあるだろう。おはじきなどを数えるとき、二、四、六、八、十と二個ずつ数えながら、この言葉を唱

とお

えると語呂がいいが、単なる語呂合わせだけで生まれた言葉ではない。

すごろく

もとは、平安時代、貴族たちの間で流行した双六からきている言葉だ。当時、サイコロを二

じゅうに

ばくと

つふり、サイコロの目がともに「二」だったとき、「重二」といった。これが、後に博徒の世
界でつかわれるうち、「ちゅうに」となった。

そして、二の次の偶数である四と四を足せば八になり、「八」といえば八本足のタコというこ
とで、「ちゅうちゅうたこかいな」という言葉が生まれたようだ。

▼ちんぷんかんぷん

——どこからきた言葉？

若者がインターネットやパソコン用語をペラペラしゃべると、電腦窓際族のオジサンたちには
何のことやらさっぱりわからず、「ちんぷんかんぷん」ということになる。

この「ちんぷんかんぷん」は漢字で書くこともでき、「珍糞漢糞」とか「陳紛漢紛」といった
文字をあてはめる。江戸時代、儒学者は漢語をつかってさまざまな教養を語ったが、庶民には何
をいっているのかさっぱりわからなかった。ちょうど、現代のオジサンがIT用語をわからない
のと同じだが、江戸の庶民は教養をひけらかす儒学者をひやかし、「珍」や「糞」など適当な漢
字を並べて、わけがわからないことを「ちんぷんかんぷん」と呼ぶようになったのだ。

「ちんぷんかんぷん」という言葉には、江戸庶民の抵抗が込められていたわけで、現代のオジサンも負けてはいられないだろう。インターネットやパソコン用語を^{やゆ}擲揄するくらい元気でいてほしい。

▼あかんべえ

——何かのおまじないか？

「あかんべえ」は、誰しも子どものころにやったことがあるはず。人をバカにするとき、「いやだ」という意思を示すときに、下まぶたを指で下げてみせる。

このとき、「あかんべえ」というが、これは適当なおまじないの言葉ではない。最初は「赤い目」とっていたものが、「あかんべえ」となまったものだ。

「あかんべえ」をするとき、下まぶたを下げると、目の赤い色の部分が相手に見える。そこから、「赤い目」というようになり、それが変化したのだ。

地域によっては「あかべ」「あかんめ」ともいうが、いずれも「赤い目」がルーツであることに変わりはない。

▼ブス

——何を食べると、そうなる？

相手の顔の悪口をいうとき、「おかめ」「下駄」「馬面」など、何かにたとえてけなすことがある。「ブス」といういい方も、その一つである。

この「ブス」は、漢字では「附子」と書き、植物のトリカブトの根のこと。この根には猛毒が含まれる。殺人事件にも使われる、あのトリカブトである。

このトリカブトの根を誤って食べようものなら、猛毒に苦しむことになる。七転八倒するばかりでなく、顔はゆがみ、目は飛び出たようになり、別人のように凄まじい顔になることもある。

すさ

そこから、「ブス」は恐ろしい面相の代名詞になり、やがて女のコのご面相をからかう言葉になっていったのだ。

▼しゃらくさい

——「しゃらくさい」って何のこと？

チャンスに恵まれて、若くして大金を手にする人がいる。そんな人は、洋服や時計などにこつてゴージャスな身なりをするものだが、そんな若者を見て「しゃらくさい」と思うオジサンは少なくないだろう。たしかに、こんな場合には「しゃらくさい」という言葉がぴったりだ。

「しゃらくさい」というと、いまでは生意気なことを指すが、江戸時代には身分不相応なおしゃれをすることを指した。「しゃらくさい」の「しゃら」は「洒落」であり、それは何代もつづいた裕福な家に生まれて初めて身につくこと。にわか成り金がそんな形だけを真似ても、どこか俗っぽく、「しゃらくさい」と鼻をつままれたのである。

また、この「しゃらくさい」という言葉は、江戸時代の謎の浮世絵師である東 洲 斎 写 楽の「写楽」から取ったという説もある。あるいは、写楽のほうがこの「しゃらくさい」から名をもらったという説もあり定かではない。

▼ちゃんぽん

——どんな音だったのか？

ビールを飲みながら、日本酒の杯も空けるなど、いろいろな種類の酒を飲むことを「ちゃんぽん」に飲むという。

この「ちゃんぽん」は、もともとは歌舞伎や能楽でつかわれた言葉。歌舞伎や能楽のお囃子はやしには鉦や鼓を使うが、このとき鉦を打つと「チャン」という音がし、鼓を打つと「ポン」という音がする。

鉦の「チャン」は庶民的で景気のいい音である一方、鼓の「ポン」は風雅で貴族的な音といえる。ここから、種類の異なったものを混ぜあわせることを「ちゃんぽん」というようになった。長崎名物の料理「ちゃんぽん」も、いろいろな具が混ぜられるところから、この名前がついた。

▼チョン切る

——「チョン」って何のこと？

長引く不況の中、サラリーマンはいつ我が身を襲うかもしれないリストラに怯おびえている。自分のクビがチョン切られるのかとヒヤヒヤしているわけだが、これは、その場面での自分の役割が終わっただけだと思ったほうがいいだろう。

「チョン切る」という言葉は、もともと舞台の幕切れを表す言葉。昔は芝居が終わるとき、拍子木をチョンチョンと叩いて、そのことを知らせた。チョンチョンと打ちながら、最後にひと呼吸をおいて、チョンと叩く。これで幕切れとなるところから、チョンにはおしまいの意味が生まれた。それに「切る」がついて、「チョン切る」となったのだ。

サラリーマンの場合、クビをチョン切られても、一つの職場での役割が終わっただけのこと。人生という舞台そのものが、終わるわけではない。

▼ざつくばらん

——どこからきた言葉？

気さくでものごとを隠し立てしない人のことを、「ざつくばらんな人」という。この「ざつくばらん」は、いまは人の態度や性格を表すときにつかう言葉だが、その語源をたどると、人のかつこう

恰好を表した言葉だった。

「ざつくばらん」は、江戸時代には「ざっくりばり」といわれ、髪の毛が乱れている様子のことだった。髪の毛が乱れているようなくだけた様子が「ざっくりばり」であり、それがしだいに人間の態度を表す「ざつくばらん」になった。

そういえば、「ざつくばらんな人」には、ともすれば服装のいいかげんな人が多いようでもある。

▼そんじょそくら

——どのくらいまでのことを指す？

店で買い物をしていると、店員が「これは、そんじょそくらの店では売っていないお宝ですよ」などということがある。

「そんじょそこら」とはそこら辺という意味だが、どのくらいまでがそこら辺になるかは、いささかアバウトである。

もともと、「そんじょ」というのは、じょう語源からして相当アバウトな言葉といえる。

「そんじょ」は、もともとは「その定」と書き、具体的に名前を挙げたりせず、不特定の人や場所を表すときにつかった言葉。それが、いつしか「そんじょ」に変わり、そこにやはりアバウトな表現である「そこら」がくっついて、いまの形になった。

聞くほうは何となく納得してしまうため、つかう側にとって便利な言葉といえるだろう。

▼ギザギザ

——本来は漢字？ それとも英語？

「ギザギザ」は、漢字で「刻刻」とか「段段」と書くこともあるが、これは当て字。この言葉のルーツは、英語にある。

「ギザギザ」のルーツになった英語は、「ギャザー (gather)」。「ギャザー」は、改めていうまでもなく洋裁で布地を縫い縮めて寄せたヒダのことで、たとえばギャザースカートはこのヒダを胴回りに寄せたスカートのことだ。

この「ギヤザー」という言葉が日本に入ってきたのは、日本で硬貨をつくりはじめたときのこと。硬貨の縁にギザギザをつけることになったのだが、これを表現する便利な言葉が当時の日本語にはなかった。そこで英語の「ギヤザー」をつかって、硬貨の縁のギザギザを「ギヤザ」と名づけた。それが、いつしか「ギザギザ」となって広まっていったのである。

▼ちよっかいをだす

——もともと、誰の得意ワザ？

「ちよっかいをだす」というと、横合いから口や手をだすことだが、元祖ちよっかいをだしたのは、猫である。

「ちよっかいをだす」というのは、もともと猫が前足でモノをかき寄せる様子のことをいった。それが方言の中に残り、猫がじゃれるさま、あるいは猫の手のことを「ちよっかい」と呼んでいる地方もある。

やがて、この「ちよっかい」が、人間にもつかわれるようになった。猫が前足でソロリとモノをかき寄せる姿が、人間が横合いから手出しをする姿を思わせたのである。

猫の「ちよっかい」に文句をいう人はあまりいないが、人間の「ちよっかい」には、あちこちからブーイングがくるのが異なる点である。

▼なあなあ

——どこからきた言葉？

お互い損のないところで、なれあいでは決着をつけることを「なあなあ」の決着という。「なあなあ」は外国にはない日本的な解決法といわれるが、たしかにこの言葉も日本の伝統芸能からでてきたものである。

「なあなあ」のルーツをたどると、日本の古典芸能である歌舞伎に行き着く。歌舞伎では、一人の役者が「……なあ」と相手に呼びかけると、これを受けて相手の役者が「……なあ」と呼び返すシーンがある。

この「……なあ」という呼びかけをしたとき、歌舞伎役者はしばらく沈黙をおく。沈黙の間、表情をつくり、これで相手にいいたいことを伝えようとするのだ。つまりは、無言のうちに言葉を掛けあっているわけだ。

そこが歌舞伎の心理表現の奥深さにもなるのだが、この「なあなあ」が政治の世界などでつかわれると、いたって評判の悪いものになる。やはり、「なあなあ」は古典芸能の世界だけでとめておいたほうがよさそうだ。

▼けちよんけちよん

——もとは方言だったってホント？

最近「ぼっけーきょうてえー」とか「かばちたれ」といった方言が、全国ブランドになっている。「ぼっけーきょうてえー」は、岡山の言葉で大変恐ろしい様子をいい、「かばちたれ」は広島弁で文句を言うことを表す。いずれも小説やマンガのタイトルとなって、全国的に知られるようになった。

方言が全国区になったケースは、むろんほかにもある。「けちよんけちよん」も、その一つだ。

「けちよんけちよん」は、相手を徹底的にやりこめる様子をいうが、もとは和歌山県地方の方言。和歌山県日高郡の方言に「けちよん」という言葉があり、これは「ひじょうに」という意味。この「けちよん」がつかわれる地域が広がるうちに、「けちよんけちよん」となり、相手をひじょうに痛めつけるときにつかわれるようになった。

▼むやみやたら

——「やたら」って何のこと？

バブルのころというと、銀行は土地さえあれば、お金を盛大に貸しつけた。その野放図な「むやみやたら」な融資がバブル崩壊後の大きな痛手となった。ただし、もともとの「むやみやたら」は、そんな生臭いものではない。

「むやみ」は結果を考えない様子をいい、「やたら」はむちゃくちゃなさまをいうが、この「やたら」は「夜多羅拍子」という雅楽のリズムに由来するという説が有力だ。

この拍子は、雅楽にはめずらしい早いリズムで、聞く人によってはせわしない感じがしたようだ。そのため、筋が通らない、むちゃくちゃな様子のことを「やたら」というようになったという。

というわけで、昔の「むやみやたら」は、現代よりはかなり風雅なものだったようだ。

▼のるかそるか

——どうすること？

イチかバチかの賭けや冒険をするとき、「のるかそるか」という。この語感から、何かに乗ることができなにかを問うているように感じる人もいるだろうが、それは違う。

「のるかそるか」は、「伸るか反るか」と書く。何が伸びるか、反るか（曲がるか）というと、これは矢をつくるとき竹である。

矢をつくる職人は、「これは」と思った竹を切りだして矢竹にする。このとき、型の中に入れ

て乾燥させるのだが、問題はその後。型から取りだした矢竹がすこしでも反っていると、矢に

は使えない。まっすぐなものではないと、狙ったところに飛ばないのだ。^{ねら}

そんなわけで、矢をつくる職人が矢竹を型から取りだすときは、「伸びるか反るか」を祈るような気持ちで取りだしたものだ。その「伸びるか反るか」が、「のるかそるか」となったのである。

▼ほうほうの体

——「ほうほう」って何のこと？

戦場で大敗北を喫して逃げていくときなど、「ほうほうの体で逃げていく」といった表現をす^{てい}

る。命からがら辛うじて逃げのびるわけで、そこから馬や乗り物を飛ばして逃げる様子を想像しがちだが、これはこの言葉のもともとの意味とはまったく違う。

「ほうほうの体」は、昔は「這ふ這ふの体」と書いた。つまり、這うような恰好で体がかがめて逃げることを、こういったのである。圧倒的に優勢な敵に囲まれ、見つからないようにするためには、体を縮めて這うようにして逃げるしかない。そこから「這ふ這ふの体」という言葉が生まれたのだ。

はため

このように這って逃げる姿は、傍目から見ればさんざんな姿である。そこで、さんざんな目にあって退散することを「ほうほうの体」というようになった。

▼おせっかい

——「お節介」は間違い？

頼まれてもないのに人の世話を焼こうとすると、「おせっかいな人」などといやな顔をされたりする。

この「おせっかい」、漢字では「お節介」と書く。

ワープロの変換もそうになっているが、これは当て字に近い。「おせっかい」は、もともと「お切匙」とか「お狭匙」と書いたのである。

「切匙」にしろ「狭匙」にしろ、意味するところは同じで、昔の炊事道具のことを表している。すり鉢などの内側に着いたものをかき落とすための道具で、ご飯用のしゃもじを縦に半分に切ったような形をしていた。

この「せっかい」ですり鉢の内側のモノをかき落としていくとき、ときどき困ったことが起きた。

「せっかい」が、すり鉢の溝に詰まったクズまで削りとってしまうからだ。これは余計なことであり、そこからよぶんな世話を焼くことを「おせっかい」というようになったのである。

【コラム】

「バタクさい」「きなくさい」「うさんくさい」「しゃらくさい」

——どんな「臭い」のやつ？

日本人離れた顔のことを「バタクさい顔」という。この場合の「バタ」は、パンにつけるバターのこと。戦後、欧米文化がドツと入ってきたころ、欧米風の彫りの深い顔はバターを思いださせる顔として、こう呼ばれるようになった。

バターをぬる前にパンを焼きすぎると、きなくさい臭いがするが、きなくさいの「きな」は、もともと「衣」のこと。布や紙、木材などの植物性のものが燃え、やがて火事が起こりそうな臭いのことをいった。

同様に「くさい」がつく言葉でも、その語源の説からしてうさんくさいのが、「うさんくさい」である。

ウサン

コウライ

「うさんくさい」については、胡盞という抹茶茶碗が語源という説がある。江戸時代、胡盞は高価な高麗の焼き物ともいわれたが、それがたしかな話ではなかった。そこから、疑わしいことを「うさんくさい」というようになったというが、この他にもいろいろとうさんくさい語源説がある。

「しやらくさい」にも、すでに四四頁で紹介した以外に語源説がまだある。遊女たちが「伽羅」きやらという高価な香をたきこめていたところから、「伽羅くさい」という言葉が生まれ、それが変化したともいわれている。また、洒落者にはこしやくな人物が多かったところから、「洒落くさい」てんかが転訛したともいう。

第三章 どこか怪しげな言葉のルーツを探る

▼こじつける

——「こじ」って何のこと？

語源を調べていると、「こじつけ」としか思えない説にもよく出会う。たとえば、「ごまかす」という言葉の語源。一説には、江戸時代に「胡麻^{ごま}胴乱」という菓子があり、見かけは大きく立派な菓子だったが、中身は空洞ですかさじだったという。そこで、「胡麻菓子」がごまかすとなったらしい。

しかし、ごまかすという言葉には、このほかにも数種の語源説があって、由来ははっきりしない。少なくとも、この「胡麻菓子」説は、こじつけのようである。

それに比べれば、この「こじつける」という言葉の語源は、こじつけではなく、かなりはっきりしている。「故事つける」あるいは「古事つける」から生まれたと考えられる。

昔も、知識や学問を悪用して、適当な故事をつかつては、黒を白といいくるめるような人がいたようである。

▼「ご託を並べる」

——「ご託」って何のこと？

相手がクドクドと理屈を並べたり、弁解するときには、「ご託を並べるな」といいたくなるものだ。だが、そんなとき、尊敬もしていない相手に向かって「ご託を並べる」という言葉をつかうのは、ちよつと考えものだ。「ご託」という言葉のルーツをたどると、むしろ避けたほうがいいことがわかる。

たくせん

「ご託」は、「ご託宣」を省略した言葉。「ご託宣」とは、神様のお告げのことなのだ。

では、本来ありがたい言葉であるはずの「ご託宣」なのに、なぜ「ご託を並べる」はうつつうしい意味合いをもつようになったのだろうか？

へきえき

これは、神主などの口を経て「ご託宣」が告げられるとき、長々としたものになることが多いからだ。その長さに辟易したところから、「ご託を並べる」は自分勝手に長々としやべるさまをいうようになったのである。

▼「こけんにかかわる」

——「こけん」って何のこと？

日本人は土地に対する執着が強い国民であり、日本経済は土地本位制などともいわれる。

日本人が古来、土地の所有権を重視してきたのはたしかで、それは言葉にも表れている。この「こけんにかかわる」という言葉も、その一つだ。

面目にかかわることを「こけんにかかわる」というが、この「こけん」は「沽券」と書き、その昔、土地や家屋を売買するとき、売り主から買い主に渡した売り渡し証文のことをいった。

さすが土地本位制の国といわれるだけに、土地や家屋についての証文が、いっしか人間の面目や品位を表すようになったというわけである。

▼おめおめ

——「おめ」って何のこと？

恥を恥とも思わず、図々しい様子を「おめおめと」と表現する。「いまごろ、おめおめと現れおって」といわれれば、恥知らずといわれているのと同じことである。

こういう副詞には、「よくよく」「なかなか」「ながなが」など、同じ音の言葉を並べたものが多い。「おめおめ」も、その仲間で「おめ」が二つ重なってできた言葉である。

昔は、気後れしたり、ひるむことを「怖む^お」といった。そこから、この言葉を二つ重ねた「おめおめし」という形容詞が生まれ、昔はよくつかわれていた。

さらに、そこから「おめおめ」という副詞が派生して、これだけが現代に残ったわけである。おめおめではないが……。

▼上っ調子

——どんな調子のこと？

会っているときは調子がいいことをいうのに、いざ実際の仕事となると、まったく約束を守らないという人がときどきいる。そんな「上っ調子」の輩とはつきあいたくないものだ。やから

ただし、もともと「上っ調子」はそんなにひどいものではない。

うわちようし

「上っ調子」は、もともと「上調子」といって、三味線の演奏でつかわれた言葉である。ときわず きよもと

常磐津や清元などの伴奏で、三味線を合奏するとき、他の三味線よりも高い音域の旋律を担いろいろ

当する三味線がある。それによって、合奏に変化をつけ、彩りを添えようというのが、こういう三味線のことを「上調子」という。

この「上調子」の三味線が加わると、演奏に華やきがでると感じる人がいる一方で、軽薄で落ちつきのない演奏と受け取る人もいる。そんなことから、表面だけ調子のいいさまを「上っ調子」というようになったのだ。

▼さじを投げる

——誰が「さじ」を投げたのか？

受験生が問題集を解いているとき、難問にあたると頭を抱えることになる。そして、さんざん考えてもわからないとなると、さじを投げることになる。この問題は解けないと見切りをつけたわけだ。

この「さじを投げる」は、もともとは医療の世界から生まれた言葉。昔の医者は患者を治療するとき、薬の量をさじで測って調合した。そして、患者に助かる見込みがなく、手のほどこしやうがなくなったときは、もう投薬してもムダである。投薬してもムダなら、さじで薬の量を測っても意味がない。医者は「さじを投げる」ことになったのだ。

▼げんをかつぐ

——「げん」の意外な意味とは？

普通の言葉を逆さまにして、隠語としてつかうことがある。たとえば、ミュージシャンの世界では、ジャズを「ズージャ」、おんなのことを「ナオン」などという。

こういった逆さ言葉は、昔から博徒などの世界でつかわれ、たとえば「場所」のことを「ショバ」という。その中から一般社会でもつかわれる言葉も生まれたのだが、「げんをかつぐ」もその一つ。

「げんをかつぐ」は、吉凶を気にすることであるため、この「げん」を「れいげん靈験」の「験」だと思っている人もいるようだが、本来はそうではない。もとは「縁起」のことである。

「えんぎ」を逆さまにすると、「ぎえん」になる。江戸時代、大阪や京都で「えんぎ」をひっくり返して「ぎえん」「ぎえんをかつぐ」といいはじめたのだ。それが発音しやすいように縮まり、「げんをかつぐ」という言葉になって全国に広まった。

▼糸を引く

——何のための糸？

「糸を引く」という言葉には、二つの意味がある。最初にどちらの意味をイメージするかで、出身地がわかるかもしれない。

まず、食べ物が粘り気を増してくることを「糸を引く」という。納豆などをかきまぜると、どんどん糸を引くわけで、昔の女房言葉では、納豆のことを「糸」と呼んだくらいだ。この意味をイメージするのは、東日本出身の納豆好きの人かもしれない。

一方、裏から人を操ることも「糸を引く」というが、こちらの意味にとるのは、あまり納豆を食べない地域の人かもしれない。

こちらの糸は、納豆とは関係なく、操り人形を操る糸である。操り人形を動かすときは、身体や手足などの各部分に糸をつけ、それを引いたりして人形を動かす。そこから、人を裏から操ることを「糸を引く」というようになったのだ。

▼根回し

——最初に根回ししたのは、どんな職業の人？

日本のビジネスでは、「根回し」が必要である。会議の前など、事前に関係者の了解を得てものごとをスムーズに運ぼうというわけだが、最初に根回しを行ったのはビジネスマンではない。

「根回し」は、もとは植物栽培に従事する人たちの言葉だった。大きな樹木を移植するときは、その一、二年前から、移植する樹木の周りをかく掘って、樹木の根の先を切り詰めておく。これが本来の「根回し」で、この作業によって樹木の細い根が発達し、うまく移植できるのだ。

「根回し」はこれに由来するが、大木の「根回し」には一、二年かかるように、ビジネスの根回しもまた時間と手間を食うもののようにだ。

▼「げてももの」

——「げて」って何のこと？

「げてももの食い」というと、ハチの子やカエルなど、風変わりな食材を好んで食べる人たちのことをいったり、「げてももの」というと、ちょっと下品で風変わりなものを指したりするが、その昔はすこし意味が違った。

「げてももの」は「下手物」と書いて、大衆向けの値段の安い物という意味だった。とくに、工芸品の世界でよくつかわれた言葉で、「下手物」の反対が「じょうてももの上手物」。 「上手物」は、精密で出来がよく値段も張る作品のことだった。

その「上手物」に比べれば、たしかに「下手物」は質的に劣るが、それはそれで立派な大衆向けの商品であり、おかしな代物、気味の悪い代物という意味ではなかった。

▼しかとする

——「しかと」の語源は花札？ それとも方言？

若者の間でつかわれる「シカトする」という言葉は、「無視する」という意味。昔は、隠語めいた言葉だったが、いじめが増えるに比例してか、この言葉も一般的につかわれるようになって

きた。

もみじ

この言葉の出所は、一説には博徒の世界だといわれる。花札に「紅葉に鹿」という札があるが、この札に描かれた鹿の頭がパイとソップを向いている。その何かを無視したような姿から、無視することを「鹿頭する」というようになったという。

ただ、この花札説には異論もあって、福岡地方の「しかと」という方言からきているという説もある。福岡地方では、「しかと」とは「たいしたことがない」という意味で、「しかともない食事」などにつかわれる。また、「しかつ」という方言もあって、これは否定的な「あまり」という意味で、「しかつおもしろくない」などにつかわれる。

この福岡方言に由来するという説にも、「しかと」しがたいものがある。

▼おさがり

——もともとは、どこから下がってきたもの？

兄や姉のいる人なら、子どものころ「おさがり」を着せられた経験は、一度や二度ならずあるだろう。おさがりというと、なんとなく軽く扱われているようで、あまり気分のよいものではないが、もともとの意味を知れば、少しは気分が晴れるかもしれない。

もともとの「おさがり」は、神様にお供えしたものを取り下げたものを指した言葉だからだ。

お祭りなどのとき、神様が鎮座する場所には、お神酒やご飯など、さまざまなものを供える。そういうお供えものは、お祭りが終わると取り下げられることになるが、この取り下げたお神酒やご飯などを「おさがり」と呼んだのだ。もともとは神様に供えられた、ありがたいものを指す言葉なのである。

兄や姉のおさがりをもらって不満げな顔をしている子どもには、おさがりとは、そもそもどういうものかを説明すれば、少しは機嫌がなおるかも。

▼野太い

——「野」が「太い」って何のこと？

のぶと

図々しい態度や、声が太いことを「野太い」と形容する。「太い」という言葉には、頼もしいとか図々しいという意味を感じるが、では「野」はいったいどこからきた言葉だろうか。

ここでつかわれている「野」は当て字で、本来は「箆」という字をつかう。「箆」は矢の幹のやがら

ことをいう矢柄のことで、「野太い」とはもともと「箆が太い」という意味なのだ。

太い箆を用いるには、弓の弦を引く強い力が必要になる。そこで、太い箆を扱えるようなたくましい腕をもった男、強い男という意味で、「箆太い」←「野太い」という言葉がつかわれるよ

うになったのである。

▼抱きあわせ

——最初に「抱きあわせ」られたものは？

ゲームソフトなどで、入手困難な人気商品と不人気商品を一緒にして売るといいう話をよく聞く。メーカーや小売店が人気ソフトをだしにして、不人気商品の在庫を減らそうというわけだ。こういう売り方を「抱きあわせ商法」というが、この「抱きあわせ」、いったいいつのころからはじまったものだろうか。

抱きあわせの歴史は古く、江戸時代にはすでにつかわれていた。当時、名工のつくった刀には、それを証明する鑑定書がついた。鑑定書がつくことで、その刀の値打ちも高まったのだが、
さぎそれを悪用して詐欺を行う悪徳商人もいた。

ナマクラ刀に立派な鑑定書をつけて、さも名刀のように見せかけ、お客に高い値で売ったのだ。当時は、これを「抱きあわせ」といったのである。すなわち鑑定書は本物だが、刀は偽物というインチキ商法を「抱きあわせ」と呼んでいたのだが、これがいつしか刀以外にも用いられるようになっていった。

やがて、良いものと悪いもの、売れ筋商品と不人気商品をセットにして売る商法を指すようになったのである。

▼財布の紐をゆるめる

——どんな「紐」のこと？

ふだんは締めり屋のおばあさんも、孫におもちやをねだられると、つい財布の紐をゆるめてしまふものだ。ゆるんでいるのは、財布以上におばあさんの顔だったりするが、よく考えると財布にはゆるめる紐なんてついていない。いったいなぜ、「紐」という言葉がでてくるのだろうか。

この言葉、現在の形の財布やガマ口を想像しては、紐の意味はわからない。ここでいう財布はもっと昔のタイプのもののこと。昔の財布は布製の袋で二つ折りにして中身がでないようにして使っていた。ただし、二つ折りにしただけでは、すぐに開いてしまうので、口の部分についている紐をグルグル巻きつけて、開かないようにするものだった。

すると、財布からお金をだすときは、その紐をゆるめなければならない。そこから、買う予定のない買い物をしたときや、つい買いすぎたときなどに「財布の紐をゆるめる」というようになったのだ。

▼つま弾き

——「つま」って何のこと？

みんなから除け者扱いされることを、「つま弾きはじにされる」という。「つま弾き」という言葉を聞くと、親指で抑えていた人差し指を弾きだすようなしぐさをイメージする人もいるだろう。いかにも「あっちに行け」と、誰かを除け者にする動作のようだが、この「つま弾き」という言葉のルーツは、もっと奥深く、平安時代に流行した密教呪術じゅじゅつに由来するものなのだ。

密教にはさまざまな呪術があるが、「つま弾き」もその一つだった。正式には「弾指」といい、やり方はいまのつま弾きとは少し違う。こぶしを強く握った状態から人差し指を立て（弾き）、親指の腹に中指をあてるというものだ。

この「弾指」をしたいほど、すなわち自分に近づけたくないほど縁起の悪い人、いやな人という意味で「つま弾き」という言葉が生まれた。

▼けしかける

——「けし」って何のこと？

同僚が厳しい上司に文句をいおうかどうか迷っている。こんなとき、

「それは、ぜひいうべきだ」

などということを「けしかける」という。

相手をそそのかして何かをさせるときにつかう言葉だが、実生活で人をけしかけることが好きな（？）人でも、その語源を知っている人は少ないだろう。

「けしかける」は「けし」と「かける」からなる言葉で、この「けし」は犬に何かを命令するときに、昔よくつかわれた言葉だ。

たとえば、犬に鳥を捕まえさせたり、誰かに咬^かみつかせたりしたい。そんなとき、「やれ！」とか「いけ！」という代わりに、「けし！」といったのである。

そこから、犬に掛け声をかけることを「けしかける」というようになり、これが人間に対してもつかわれるようになったのである。

▼あ راを探す

——「あ ら」って何のこと？

人のあ راを探すのがうまい人がいるものだ。みんながホメているときでも、「でもね、あの人が……」と何かしら欠点や弱みを探して、いちやもんをつける。障子の棧^{さん}にあるホコリを探す

姑のようなが、こういう人たちが探しだす「あら」とは、そもそも何のことだろう。

ここでつかわれる「あら」は、魚や肉を料理したあとに残る、わずかに身がついている骨のこと。もとは「あら骨」といったが、略して「あら」といわれるようになった。「魚のあら」「あら汁」などの、あの「あら」である。

すなわち「あら」とは、いいところがほとんど残っていない、役に立たないもののことになる。そこから、人の欠点を「あら」と呼ぶようになり、そういう点を鵜の目鷹の目う たかで探すことを「あらを探す」というようになったのだ。

もっとも、もともとの意味の「あら」は、少しは食べられる部分も残っているわけで、これを探すのはけっして悪いことではない。

▼いびる

——いじめることを、なぜ「いびる」という？

「嫁いびり」「後輩いびり」など、強い者が弱い者をいじめることを「いびる」という。昔は、姑からネチネチいびられた嫁がたまりかねて家をでたという話をよく聞いたものだ。

つぼね

最近では、会社でお局様にいびられて、新入社員が退職してしまうことが多いようだが、これも「いびる」の語源を知れば、さもありなんという話である。

「いびる」は、もともとは煙を「いぶす」という言葉から生まれたもの。穴蔵の前で火を焚いたで、中にいる狐や狸をいぶしだす。煙でいぶされた狐や狸が、いたたまれなくなつて穴からでてくるように、ある人をいじめてその場にいたたまれなくすることを「いびる」というようになったのである。

「いびり」には、もともと追いだすという目的があるわけである。

▼足もとをみる

——誰の足もとを誰がみた？

「足もと」という言葉は、多くのことわざ、慣用句につかわれている。

「足もとに火がつく」といえば、危険が身に迫っていることであり、「足もとから鳥が立つ」は、意外なことが起きるという意味になる。「足もとへも寄りつけぬ」といえば、相手が比べものにならないほど優れていることをいう。日本語に強くなるには、まず、辞書を片時も手放さず「足もとを固める」必要がありそうである。

さて、この項の本題は「足もとをみる」である。人の弱みにつけこむことをこう表現するわけ

だが、最初に人の足もとをみたのは駕籠屋で、みられたのはその客たちだった。
かごや

昔の旅は歩きが基本で、ときには疲労、病氣、空腹で動けなくなることもあった。そんなところへ空駕籠がやってきては、客の弱った足もとをみながら、駕籠代をふっかけた。それでも、疲れきった旅人は、駕籠に乗らざるをえない。普通の代金の二倍も三倍もの大金を支払って、ようやく宿場にたどりついたというわけである。

▼勉強する

——なぜ安くすることを「勉強」という？

につぼんばし

東京・秋葉原、大阪・日本橋などの電器街は、OA機器や家電製品の安売りで有名だ。これらの商店街では、うまく交渉すれば、値段が安くなることでも知られている。客が「向こうの店のほうが安いよ」と迫れば、店員は「じゃあ、もう少し勉強して……」といいながら、電卓をたたいて負けた値段を見せてくれる。

電器街に限らず、売人が値段を安くするとき「勉強する」というが、これはなぜだかご存じだろうか。

売人にとっては、“お客様は神様”であり、できるだけ喜んで買ってもらいたい。といって、あまり安くしたのでは利益がでず、売にならない。商品の仕入れ、売り方を勉強し、その

ギリギリの値段を考えだすのが繁盛の極意である。すなわち、商品の値段をより安くするのは、
商売人にとっては「勉強」の成果といえる。

そこから、「勉強します」という言葉がでてきたのである。

▼しゃかりき

——どれくらいの力がでるのか？

ものごとに全力で取り組むとき、「しゃかりき」になるという。火事場のバカ力という言葉もあるように、人間必死になれば思いのほか力がでるものだが、この「しゃかりき」という語源をたどると、人間「しゃかりき」になったときには、自分の想像以上の大きな力がでも不思議ではない、とうなずける。

なにしろ、「しゃかりき」とは「釈迦」の「力」のことなのである。

むろん、釈迦は仏教の開祖であり、さまざまな修行を重ねて悟りを開き、苦しんでいる人々を救い、大宗教の祖となった。

そのお釈迦様の偉大な力にあやかっ、一生懸命に取り組むところから「しゃかりき」という言葉が生まれたわけだ。本当の意味で「しゃかりき」になれば、奇跡を起こすことも不可能ではないということだろう。

▼ かったるい

——何がたるいのか？

「かったるいなあ」とは、いまは体や気分がだるいこと。だが、語源的には、もっと限定的なだるさのことをいった。

「かったるい」は「かいなだるい」が転じた言葉で、この「かいな」は「腕」のこと。力仕事などをした後、腕が何となくだるいことが、もとの「かったるい」だったのだ。それがいつしか、体全体がだるい、気分が晴れない、退屈、面倒というような意味になった。

昔の人は力仕事をした後、かったるくなったりわけだが、いまの若者はすることがないとき、かったるさを感じるようだ。

▼ 看板で——す

——閉店のことをこういうのは？

酒場でだらだら飲んでいると、店の人から、

「あー、そろそろ看板なんですが」

といわれることになる。

時計を見ればとくに午前様で、たしかにもう閉店の時間になっている。そんなとき、「閉店」のことを「看板」というのは、なぜだろうか。

「看板でーす」は、もともとは「もう看板をしまいます」という意味。いまでは、閉店時に外の明かりやネオンを消しても、店の看板は外にだっしっぱなしというケースも多い。

だが、昔の店は、閉店するときに、店の前にだしていた小さな看板を店の中へしまったものだった。

それが「看板をしまう」であり、閉店を意味したのである。

いまは、看板をしまう店もあればだっしっぱなしの店もあるが、いずれにせよ昔の名残で「看板でーす」が閉店を意味するのである。

▼ふりの客

——フリーの客ではない

いちげん

東京や京都などの有名料亭は、いわゆる「一見さんお断わり」が多い。紹介や予約のない客は断わってしまう。そういう馴染みのない客のことを「ふりの客」ともいうが、これは「フリーの客」のことではない。

「ふりの客」は、もともと遊郭などでつかわれた言葉。馴染みでもなく、約束もないのに、評判の高い遊女を目当てにこのこやってくる客のことを「ふりの客」といったのである。

遊女がそういう野暮な客を嫌うことを「ふり」といったため、そこから「ふりの客」というようになったという説が有力だ。この遊里独特の言葉が、いつしか料理屋や旅館などでもつかわれることになったのだ。

▼カサにかかる

——「カサ」とは何か？

勝負事では、相手が弱みを見せたとき、そこで「カサにかかって」攻撃することが勝利の秘^ひ訣^{けつ}といわれる。優勢に乗じて一気に攻めかかることを「カサにかかる」というが、これはいたいどんな「カサ」のことだろうか。

この「かさ」は傘でも笠でもなく、「嵩」のこと。「嵩」はモノの大きさや分量を表す言葉で、「水嵩が上がる」などとかう。自分が優勢な状態にあるときは、いろいろ打つ手があって「嵩」の豊富な状態といえる。その「嵩」を背景に攻めることを「カサにかかる」というわけだ。

同じ「カサ」でも、人の威光を「カサに着て」攻めるのとは、まったく違う。こちらのカサは「笠に着る」と書く。

▼たとえ火の中、水の底

——この言葉のルーツは？

口説き文句には、古来いろいろなものがある。「あなたのためなら、たとえ火の中、水の底」という言葉は、かつて定番的な口説き文句だった。

このいささかオーバーなセリフ、じつは長い歴史に裏打ちされた言葉である。そのルーツは、たいらのこれもり

源平の合戦を描いた『平家物語』だともいわれる。『平家物語』では、平 維盛という武将が妻に対して説得をするとき、「火の中水の底」という言葉をつかっているのだ。

さらに、もっと古くからあるという説もある。日本最古の歌集である『万葉集』の中で、安あ倍へのいらつめ女郎という女性が詠んだ歌に、女性が男性へ覚悟の思いを伝える比喻として「火にも水に

も」という言葉がつかわれているのだ。

いま、このセリフを口説き文句につかえば、大げさすぎて滑稽こっけいな感じさえするが、このような長い歴史に耐えてきた言葉なのだ。

▼成敗する

——もともとそんなに怖い言葉だったの？

「おのれ、成敗してくれるわ」といえば、時代劇でおなじみのセリフ。手討ちにするという意味だが、本来はそんな暴力的な言葉ではなかった。

ごせいはいしきもく

「成敗」のルーツをたどると、鎌倉時代につくられた「御成敗式目」にたどりつく。武家の法律であるこの「御成敗式目」の「成敗」には、「善を成して悪を敗る」という意味がある。法律であるだけに、「悪を裁く」ことがもともとの「成敗」の意味だったのだ。

ただ、この世の中、法律で裁きさえすれば、悪はなくなるというほど甘いものではない。テレビドラマの『水戸黄門』にでてくる助さん格さんではないが、悪を暴力でこらしめることも必要だ。そんなところから、「成敗」には「こらしめる」「手討ちにする」という意味が生じてきたのだ。

▼エッチ

——いったい何の略語？

「エッチ」というと、昭和の終わりにはいささかダサイ言葉だったが、平成に入って「エッチする」と動詞化されて、再びよくつかわれるようになった。

この「エッチ」という言葉は、隠語として大正時代からつかわれていたようだ。ただし、昔の「エッチ」は、いまとは微妙に意味が違って、セックスではなく、変態的な行為のことを意味していた。「変態」をローマ字に直すと、その頭文字は「H」。そこから、変態的な行為を意味する隠語として「エッチ」がつかわれたのだ。

その「エッチ」の意味が昭和・平成を経て変化し、いまでは単にセックスという意味になっている。たしかに、昔の日本人が変態的行為と感じていたことを、いまは女子高生でもセックスの一部として楽しんでいるわけだが。

▼やばい

——「やば」って何のいふ？

危険に遭遇したとき、失敗をしたとき、「これは、やばい！」とあわてることになる。最初、
「やばい！」とあわてたのは泥棒たちである。

もともと「やば」には具合が悪いという意味があり、かつて刑務所に厄介になっている盗人などが、刑務所の看守をこう呼んでいた。

そのクセがシャバにでも抜けず、刑事や警官に対しても「やば」と呼ぶようになり、やがて形容詞化して、捕まりそうになることを「やばい」というようになったのだ。

そんな盗人たちの隠語がいまでは全国に広まっているのだから、隠語のパワーもなかなかである。

▼タイマン

——じつは、古代中国の言葉!?

暴走族や不良少年のケンカで、一対一で闘うことを「タイマンをはる」という。この「タイマン」、一対一で男が対するところから「対マン」なのかと思っている人もいるようだが、そうではない。この「タイマン」という言葉のルーツは、意外なくらいに古いのだ。

話は、中国の古代にまでさかのぼる。古代中国では「対懣」という言葉がつかわれていた。お互いが向かいあって いきどお 懣（いら）ることを「対懣」といったのである。

この言葉はやがて日本に伝わったが、一般的にはほとんどつかわれることなく、不良の一対一のケンカを意味するようになった。

暴走族や不良少年は、じつは大変にむずかしい漢語をつかっていることになる。

▼ダサイ

——田舎者はなぜ、そう呼ばれる

都会の人が「ダサイ」というとき、ターゲットにされやすいのが、どこか田舎臭い代物である。いなか
あかぬ

垢抜けない服を着ている人を見て、「あの人、ダッサい」といった調子でつかわれるが、都会人には「野暮ったいもの」「田舎臭いもの」という図式があるようだ。

地方に暮らす人にとっては愉快ではないだろうが、「ダサイ」のルーツをたどると、この言葉はまさに「田舎臭いもの」そのものを意味している。

「田舎」を「いなか」と読まず、隠語めかして読むとどうなるか。「だしゃ」と読むこともでき、これに「い」をつけて形容詞化すれば、「だしゃい」となる。この「だしゃい」が「ダサイ」になったといわれる。

▼ため口

——「ため」って何のこと？

敬語や丁寧語を抜きにして、仲間どうしで対等な口をきくことを「ため口^{ぐち}」という。この「ため口」、本来の意味をたどると、対等な仲間に対しては避けたほうがいいかもしれない。本来は、目下の人間に対してつかう言葉だからだ。

もともと「ため口」という言葉がつかわれていたのは、江戸時代の大坂。大坂では「お駄賃^{でつち}」のことを「ため」といって、商店の番頭たちはお使いにだす丁稚たちに「ため」を渡していた。この「ため」をもらうような、下働きをする人に対する言葉づかいが「ため口」だったのである。

というわけで、もともとの「ため口」は、目下の者を相手にする言葉であり、ひどくぞんざいな言葉づかいだった。それが、仲間どうしの普通の言葉づかいに意味を広げてきたのである。

【コラム】

「曲者」「たわけ者」「くわせ者」「よた者」

——どんな「者」のこと？

お調子者、はぐれ者というように「何々者」と呼ばれたら、たいていイメージが悪くなる。

たとえば、「曲者」はもとは心の曲がった者という意味。くせもの素直さがなく、意地悪や悪意をもつ人のことをいった。

「癖者」と書くこともあるが、この「癖」も個性という意味ではなく、困った性癖のこと。いずれにしろ、「クセ者」とは、少々変わっていて素直さに欠ける人のことをいう。

「たわけ者」を漢字で書くと、「田分者」。これは、先祖伝来の田畑を複数の子どもたちに分ける人のことをいった。

多くの子どもに分けていくと、結局、一人分の面積が狭くなり、収穫が減って生活に困る。つまり、長子相続に反することをする者を「たわけ者」と呼んで、バカにしたのである。

また、「くわせ者」は、食べたくないものまでむりやり食べさせることに由来する。一見誠実そうで、じつは詐欺師のような人物を「くわせ者」という。

「よた者」は、江戸初期から愚かな者、気のきかぬ者の代名詞として用いられていた。もともと、狂歌や落語などで「与太郎」とつかわれ、そこから「与太者」と変化した。

でたらめなことをいったり、ふざけたことをいうことを意味する「与太をとばす」という言葉もここから生まれた。

第四章 身近な「熟語」のルーツを探る

▼友達

——一人しかいなくても「達」というのは？

たった一人の友達でも「友達」といってよいのだろうか。一人では「達」ではないような気がするのだが、語源的には一人でも「友達」でOKだ。

「達」というのは、いまは複数の集団を表すときにつかう言葉だが、昔はそれだけではなく、相手に敬意を払うときにも「達」をつけた。かつて上流貴族の子弟のことを「公達」と呼んだが、この場合も一人でも「公達」と呼ばれ、この「達」は尊称になる。

「友達」の「達」も同じことで、友人に敬意を払っていれば、一人でも「友達」と呼んでいいわけだ。いまでは、そんな語源は忘れられて、親しくしている友人なら、みな「友達」と呼んでいいわけだが。

▼靴下

——靴の中にあるのに、なぜ「下」になる？

「下」といえば「上」の反対、上下関係を表す文字だ。たとえば「目下」といえば、地位や年齢が下である人を表す。

ただし、この「下」という言葉が、いつも上下関係を指すとはかぎらない。たとえば「靴下」である。靴下は、靴の中に履くものだから「靴中」のほうがぴたりきそうだが、なぜか「靴下」という。

この場合の「下」には「内側」という意味がある。靴の内側に履くものだから、「靴下」となったわけだ。

「内側」という意味の「下」は、ほかでもつかわれている。たとえば「下着」、体の上下関係でいえば、シャツは上半身に着けているから「上着」となりそうだが、そうならないのはこの「下」が内側を意味しているから。衣服の内側に着るモノだから、「下着」と呼ばれるのである。

▼出張

——もともとはどうへ「でる」ことか？

ひと昔まえまで、出張はサラリーマンにとって楽しみの一つだった。夜になると接待の一つもしたつづみあり、その土地の名物料理に舌鼓を打つといった話があったものだが、それもいまは昔の話。

経費節減で出張費は削られ、日帰り出張が当たり前になって、出張は体力的に辛いだけの仕事になってしまった。

しかし、「出張」とは、もともとそういうものだったといえる。「出張」で行く場所は、本来遊び場などではなく、「戦場」だったからである。「出張」はもともと戦陣用語で、戦うために相手の領地にまで出張^でっていくことだった。戦国時代の武将、侍にとって、「出張」はもっとも危険な戦いであり、命を張ったものだったのだ。

そんなわけだから、楽しい「出張」など、もともとあり得ないのだ。

▼秘書

——「秘」められているのは、どんなもの？

「秘書」は、社長秘書、女性秘書などのように用いられ、いまでは人間の職業、仕事を指す言葉だが、昔はそうではなかった。「秘書」は、文字のとおり、秘められた書物のことだったのである。

古代中国では、「秘書」は宮中の蔵書のことを指した。平安時代の日本でも同じようにつかわれ、簡単には人に見せない秘密の本のことだった。

それが変化してきたのは、明治時代の中ごろから。国内に企業が増えて、英語の「セクレタリ― (secretary)」を日本語に訳そうとしたが、適当な言葉がなかった。最初は「書記」と訳していたのだが、もう一つしっくりこない。そこで、再発見されたのが「秘書」という言葉だった。まず銀行などでつかわれはじめ、それが定着していった。

▼知事

——もともとは、どんな職業のこと？

最近では、田中康夫長野県知事をはじめとして、各都道府県に新しいタイプの知事が増えている。これまでの知事というと、官僚出身でどこかエラそうな人が多かったが、最近の知事はずいぶん頭が低いようだ。田中知事など、自らを長野県民のための奉仕係のように語る。

しかし、この田中知事の姿勢は、本来の「知事」に近い姿ともいえる。もともと、「知事」とは雑用係のようなものだったのだ。「知事」はもとは仏教語で、昔の中国では、仏教のお寺の雑事や庶務をつかさどる人を呼んでいたのだ。

それが、宋の時代になって、中国国内の地方長官の官名としてつかわれるようになった。その後、日本に入ってきて、都道府県の首長を「知事」というようになったのだ。

もとはといえば「おゝい、知事」と呼ばれるような雑用係のこと。そんなにエラい人ではなかったのである。

▼脚本

——シナリオにどんな「脚」がある？

映画や演劇のシナリオは「脚本」ともいわれるが、これは考えてみれば不思議な言葉だ。「本」は台本の本としても、この「脚」はいったい何の脚のことなのだろうか。

この言葉のルーツは、中国にある。もともと日本には「脚本」という言葉はなく、「台本」という言葉がつかわれていた。それが変わったのは、中国から「脚色」という言葉が入ってきてからのことだ。

中国で「脚色」といえば、もとは個人の履歴書のことをいった。いまでもありがちなことだが、この「脚色」に自分の履歴を書くときは、自分を売り込むため、事実に色づけし、美化していく人もいた。そこから、ほかの場面でもつかわれるようになり、元や明の時代になると、「脚色」は演劇で俳優の役柄や筋書きを書いたものを意味するようになっていた。

この意味の「脚色」が日本に伝わり、「台本」と結びついて「脚本」という言葉が生まれた。

▼赤字

——なぜ、損失のことをこう呼ぶ？

いま、日本では国と地方の財政赤字から生じた借金残高がGDPの一・三倍にも膨らみ、大きな問題になっている。民間企業にも赤字会社がどんどん増えている。

「赤字」という言葉を目にすることがそれだけ増えているわけだが、もちろん赤字といえば、収支決算で収入より支出が多くなること。昔は、帳簿に記帳するとき、マイナス額は赤インキで目立つように書いた。そこから、マイナス額のことを「赤字」と呼ぶようになったのだ。

GDP比でいうと太平洋戦争末期の水準にまで拡大したわが国の借金残高。その大変さを国民に理解してもらうためには、新聞は赤い活字でも使って報道したほうがいいかもしれない。

▼為替

——一万円札の顔が名づけ親

海外旅行にでかけると、まず気になるのが為替レートである。このときばかりは円安は歓迎でないが、この「為替」という言葉をつくったのは、「いかにも」といえる人物である。

現在、一万円札の顔になっている福沢諭吉が、英語の「マネー・オーダー（money-order）」を「為替」と訳したのである。

ただ、現在の意味の「為替」は福沢諭吉が名づけ親だが、昔からこの「為替」という言葉があった。「為替」とは、本来「取り替わす」という意味であり、日本では「かわし」と読まれ、米

や銭などの納入・取り引きにつかわれていた。その後、手形や小切手を現金に替えたり、あるいは円をドルにするなど、国際通貨交換のこともこう呼ぶようになった。

▼銀行

——「金」ではなく「銀」になったのは？

時代が変化していくうち、名前が実態とそぐわないものになることがあるが、「銀行」という言葉もその一つといえるかもしれない。

明治時代の初め、英語の「バンク (bank)」に相当するものを日本でつくろうとしたとき、どんな名前にするかが相談された。「金行」「両替所」といった名前も候補に挙がったが、結局「銀行」という言葉が選ばれた。

お金を扱う場所なのに、「金」ではなく「銀」となったのは、当時の日本が「銀本位制」をとっていたからだ。つまり、金よりも銀が基本となる通貨だったわけで、おもに銀を取り扱う場所だから「銀行」となったわけだ。

もちろん、いまでは銀は基本となる通貨ではない。そうすると不良債権問題解決以前に「銀行」という名前自体を考え直さなければならぬのかもしれない。

▼経済

——どこからきた言葉？

アメリカのレーガノミックス、イギリスのサッチャリズムの成功以降、マクロ経済の運営では市場主義が主流となって、近ごろの経済の本を読むと、よく「経済のことは市場がいちばんよく知っている」などと書いてある。政府は規制をできるかぎり緩和し、自由な市場経済を縛らないほうがいいというのだ。

だがこれは、「経済」という言葉のもともとの意味からすれば、ちょっと違うといえるかもしれない。

「経済」とは、もともと中国古典にある「経国済民」の「国」と「民」を省略して生まれた言葉で、当初の意味は「国をよく治めて、人民を助ける」という意味だった。つまり、政治が国家をしっかりと統治することが、もともとの「経済」の意味なのである。

近代になって、英語の「エコノミー (economy)」を「経済」と訳したわけだが、この「エコノミー」にも、もともとは「家のきまり」といった意味がある。市場原理主義、市場にすべてをまかせることは、英語の「経済」ともまた異なるわけである。

▼印税

——税金ではないのに、「税」の字がつくのは？

「税」といえば、所得税、住民税、消費税など、国や自治体に取り上げられるものばかりが思い浮かぶが、なかには例外もあって、「印税」は、本を著した著者の収入を意味する。

では、税金でもないのに「印税」と呼ぶのはなぜか。出版社にとっては「税金」のようなものなので、この名がついたという。

その昔、本が発行されるときには、著者が一冊一冊、本の奥付部分にハンコを押したものだ。それを「検印」といって、検印の数に応じて出版社は著者にお金を支払ったのである。この「検印」に基づいて著者に支払うお金のことを「税金」にたとえたのが、東京朝日新聞の編集長だった小宮山桂介という人物。彼が「印税」という言葉を造語したと伝えられている。

著者にとっては、こんな「税金」なら多いほうがいいわけだが、ただし本が売れて印税収入が増えると、所得税をがっぽりもっていかれることになる。

▼演説

——本当は誰がするものなのか？

最近、政治家でも演説のうまい人が少なくなってきた。ましてや、一般人が人前で演説をするとなると、しどろもどろなものになりがちだ。

これは、この言葉のルーツをたどれば、しかたがないことかもしれない。もともとの「演説」とは、一般人がするものではなかったのだ。

「演説」とは、本来は釈迦がする説法のことをいった。そこには、「よく説明をする」という意味もあったのだが、江戸時代に入って意味が変わってきた。英語の「スピーチ (speech)」にあたるオランダ語の「レーデ (rede)」を日本語に訳すとき、「演説」があてはめられたのである。

以後、お釈迦様にかぎらず、人前で話をするを「演説」というようになったのだ。

▼概念

——こう訳したのは、どんな人？

広告代理店の営業マンがよくつかう言葉の一つに「コンセプト」がある。「こんなコンセプトでは、いかがでしょう」などと、クライアントにプレゼンテーションするわけだ。

このコンセプトを日本語にしたのが、「概念」という言葉。もともとは、むしろ広告業界用ではなく、事物をとらえたり、表現するときの思考内容を指す哲学用語として造語された。

にしあまね

この言葉をつくったのは、明治時代の哲学者西 周。西は「コンセプト」を最初「念」と訳していたのだが、どうもしっくりこない。「包含理会」などという言葉をつかったりもしたが、やがて「概念」という言葉に行きついた。

さんたん

明治を代表する哲学者西周が苦心惨憺のすえに生みだした「概念」という訳語。現代の広告マンが営業用につかうには、やはり重すぎるかも。

▼文学

——その昔は、何のことだった？

いまの日本では、アメリカ生まれのビジネス用語やコンピュータ関連用語が次から次へと入ってきては、カタカナのままですわかれられている。

しかし、明治時代の日本は違った。当時も諸外国からどんどん外来語が入ってきていたが、インテリたちが知恵の限りを絞って、カタカナ言葉を日本語に直したのである。

その一つに「リタラチャ (literature)」がある。

これには、当初「文章」とか「文章科」という訳語があてはめられたが、どうもいま一つぴつ

たりこない。やがて、菊池大麓きくちだいろうくという人物が「文学」という言葉をあてはめたのだ。

それ以前、日本では「文学」というと、古代律令制の中で経書を教授する役職のことを意味し、なかば忘れられた言葉になっていた。その言葉を明治時代になって、「リタラチャ」の訳に再利用したのである。

▼水素・酸素

——この名訳をひねりだした人物は？

水素、酸素といえば、化学の授業でどんなに居眠りをしていた人でも、頭に残っている言葉だろう。化学の時間では「水素と酸素が結合して水ができる」といったことを習うが、この水素・酸素という言葉はどこからきたものだろうか。

英語では、水素は「ハイドロジェン (hydrogen)」、酸素は「オキシジェン (oxygen)」という。このハイドロジェン、オキシジェンを「水素」「酸素」という言葉に訳したのは、江戸時代

うだがわようあん

代の宇田川 榕庵という蘭学者だった。日本史が好きだった人は、この人物の名前を記憶しているかもしれない。彼は日本の化学の父ともいえる人物で、イギリスのヘンリーが著した『化学

せいみかいそう

入門』を『舎密開宗』という題名で訳したとき、ハイドロジェン、オキシジェンに「水素」「酸素」という言葉をあてはめた。

これがじつにぴったりの名訳であり、現代でもつかわれているというわけだ。

▼処女膜

——誰がつくった言葉？

最近は「処女」という言葉に重みがなくなって、むしろ「処女膜」とはさっさとおさらばした
いという女のコが少くないようだ。

もともと、日本には、この「処女膜」という言葉はなかった。それが江戸時代に突然現れたの
すぎたげんぱく まえのりようたく

は、杉田玄白、前野良沢がオランダの医学書『ターヘル・アナトミア』を『解体新書』と
して翻訳したときである。当時の日本には「処女膜」にあたる言葉がなかったため、彼らが造語
したのだ。

当時、男性経験のない女性は「おとめ」と呼ばれ、これに「処女」という漢字をあてていた。
杉田玄白らは、これに「膜」をつけたわけである。

▼野球

——ベースボールをこう訳したのは誰？

しゅうきゅう

いまだきサッカーのことを「蹴球」という人は少ないが、ベースボールは「野球」と呼ば
れている。この違いには、訳し方のうまい・へたが関係しているかもしれない。明治時代、ベー
スボールが日本に入ってきたころは、「塁球」とか「基球」など、いろいろな呼ばれ方をしてい
た。そんななか、ある人が「野球」という訳語を思いついたのである。

明治の俳人・正岡子規である。子規は青年時代、ベースボールに熱中し、「野球」という言葉をつくった。彼がさまざまな場面でつかい、紹介することで、この言葉は定着していったといわれる。

もっとも、この正岡子規説には異論もあって、子規の友人だった一高野球部のマネージャーだった人物が、「野球」という言葉を造語したともいわれる。

いずれにせよ、子規が「野球」という言葉を広めたことに変わりはない。アメリカ生まれのベ이스ボールというスポーツは、日本で、じつにいい広告マンに恵まれたといえそうだ。

▼助手席

——運転席の隣りの席をこういうのは？

自動車の運転席の隣りのシートを「助手席」というが、現在、助手席に座っている人は「助手」の役目をよく果たしているとはいえないだろう。運転者が一生懸命運転しているとき、助手席の者は居眠りをしていたりするわけで、本当に助手らしい働きをしているのは、長距離のトラックの助手くらいなもの。それなのに、「助手席」と呼ぶのは、昔の車事情と関係してくる。

戦前、日本国内にまだ車がめずらしかったころ、自家用車をもつ人は少なく、車といえばタクシーのことを指すことが多かった。当時のタクシーは車高が高く、乗るのにひと苦労した。おまけに、当時の婦人は着物を着ていたから、一人ではなかなか車に乗ることができない。そこで、

乗るときの介添え役として、「助手」が必要だったのである。当時の車の「助手席」には、そうした助手が座っていたわけである。

やがて、車は急速に進化し、助手は必要なくなったが、「助手席」という言葉だけがいまも残っているというわけだ。

▼老後

——いま老人なのに、「老後」というのは？

急速に高齢化する日本にあって「老後」への関心は高いが、この「老後」という言葉、あらためてながめてみると奇妙な言葉にも思える。

いま、老人なのに、なぜ「老後」というのだろうか。

この場合の「老後」とは、老いてから後の人生のこと。老境に入ってから後の人生という意味になる。

ただし、何歳からが「老後」なのかというと、寿命が長くなるにつれ、しだいに延びてきている。昔は定年を迎える五十五歳以上、ちょっと前は厚生年金がもらえた六十歳以上になると、そう呼ばれることが多かったが、いまは六十五歳以上の人につかわれることが多くなっている。

▼生前

——「生きている前」って何のこと？

知人が死んだときなど、故人の思い出話にふけることがある。「生前は、いつもおだやかな笑顔で……」といった調子だが、この「生前」という言葉にも疑問の点がある。

文字どおりにとらえると、「生前」というと生まれる前のことであり、まだ母親の胎内にいるころのことのようにも思える。死ぬ前、生きている間のことを指すなら、「死前」とか「生中」としたほうが正しそうだ。

それを「生前」と呼ぶのは、「前」という漢字には「過去」という意味もあるため。すなわち「生前」とは「（故人が）生きていたときである過去」という意味になる。

さらに、死んでから後のことである「死後」との比較から考えてもいい。「死」の反対は「生」であり、「後」の反対は「前」である。

となると、当然「死後」の反対語は「生前」となるわけだ。

▼反物

——和服地のことをさういふのは？

和服の布地を「反物」と呼ぶが、これは布地が反そっているからではない。こう呼ぶ理由は、布地の長さに関係がある。

「反物」は厳密にいうと、大人用の着物一着分の織物のことで、この大人用の着物一着分の量が一反なのである。一反は、ふつう布では幅九寸（三四・一センチ）、鯨尺（一尺は約三七・九センチ、丈は一尺の一〇倍）では長さ二丈六尺または二丈八尺の大きさだ。

このように「反」（六尺を一間、六間を一段とする距離の単位とは別）という長さの単位を基準とするとところから、和服の布地は「反物」と呼ばれるようになった。

▼丹前

——綿入れのことをこう呼ぶのは？

「丹前」とは綿の入った着物のことで、冬場の温泉旅館などによく置いてある。江戸時代、この丹前スタイルの衣服を着て有名だったのが、勝山という遊女である。

そのころ、江戸には湯女風呂という銭湯があり、そこでは遊女が客をもてなしていた。中でも有名だったのが、神田の堀丹後守の屋敷の前にあった湯女風呂で、“丹”後守の“前”にあ

るということから「丹前風呂」と呼ばれていた。そして勝山という遊女がこの丹前風呂の売れっ子であったところから、彼女が着ていた綿入れの着物が、いつしか「丹前」と呼ばれるようになったのだ。

今日でいうなら、風俗嬢が勤めている地名が、その風俗嬢のファッション・スタイルを表すようになったと思えばいいだろう。

▼惑星

——地球や火星のどこが惑っている？

地球や火星をはじめとして、恒星の周りをグルグルと回っている星を「惑星」と呼ぶ。太陽系では、水星、金星、土星、木星なども「惑星」だが、これらの星をよく観察すると、「惑星」と呼ばれる理由がわかってくる。こうした「惑星」には、一つの共通点があるのだ。

これらの惑星は、日によって明るさが変化したり、動き方が変化する。恒星である太陽のように、地球から見ると同じテンポで東から西へ移動したりしない。ループ状に動いたり、ときには動きが止まってしまうこともある。どこか惑うような動き方から、「惑星」と呼ばれるようになったのだ。

ただし現実には、惑星は太陽の周囲を規則的に回っているわけで、惑うような動き方をするわけではない。地球から見たとき、惑うような動きに見えるだけのことだ。地球自体も動いているため、そう見えるのである。

▼石油

——液体なのに、なぜ「石」？

「石油」は、ドロドロとした黒い液体であるのに、「石」という文字がつかわれている。これには、石油が利用されるまでのエネルギー史が関係している。

石油は、もともとは「石炭油」を短縮したもの。人類は石油を利用するまで、おもに石炭をエネルギー源としていた。その石炭を液化したものが、「石炭油」だった。

そして十九世紀中ごろ、人類はついにいまでいう石油をエネルギー源として利用することに成功する。このとき、いまでいう石油も「石炭油」と呼ばれたが、時が経つにつれ「石油」と呼ばれるようになった。

▼遊山

——この山は、どんな山？

ゆさん

行楽にでかけたり、外出して遊ぶことを「遊山」という。文字どおり、紅葉狩りなど、山で遊ぶという意味にもつかわれている。すでに江戸時代には、そういう意味でつかわれ、遊山茶屋、遊山船、遊山宿などという言葉もあった。

ところが、さらにさかのぼると、「遊山」は誰もが気軽にできるものではなかった。また、楽しいものでもなかった。

さん

やま

きんりゆうさんせんそうじ

この「山」は、山のことではなく、たとえば金 龍 山 浅草寺というように、寺院の名前につく「山号」のことだったのだ。だから、遊山とは、山で遊ぶことではなく、寺にでかけるという意味だったのだ。

とくに、僧侶の世界で、他山へでかけて、他の寺で修行する意味でつかわれた。また、寺院での修行を終えた僧侶が、山に籠もって悟りを開くよう目指すことも意味した。

▼地道

——どんな「道」のこと？

遊んでばかりいる子どもに、親が「すこしは地道に暮らしてみろ」と説教しても、なかなか通じるものではない。それは「地道」に生きることがけっこう大変なことだからだが、これはその

語源を見てもよくわかる。

「地道」はもとは馬術の言葉で、馬を走らせるときには三種類の乗り方がある。速歩である「かけ」、駆け足である「のり」、並足である「地道」だ。この「地道」はもっとも基本的な乗り方であって、安全であり、疲れにくい。この「地道」をこなせないことには、その上のレベルには行けない。「地道」はこの馬術の言葉から、手堅く着実にものごとを進めることを意味するようになった。

とはいえ、素人にとっては、「地道」で走らせるだけでもずいぶん大変なことになる。それなりの努力と心構えがないことには、「地道」に生きることもまたむずかしい。

▼腹心

——心は腹にあるのか？

ふくしん

「彼は、私の腹心だ」といえば、深く信頼できる部下のこと。会社の社長でいえば、子飼いの重役、社長室長あたり、政治家でいえば、筆頭秘書、金庫番がそれにあたる。

この場合の「心」は、心臓がある場所というところから「胸」という意味になる。だから、腹心とは、腹と胸ということで、身体を中心となる大切なところという意味になる。そこから、心

の奥底という意味も生じ、「腹心を布く^し」といえは「自分の心の奥底を打ち明ける」という意味になる。

自分の身体のように大事な存在であり、また心の奥底を明かせる存在ということで、信頼できる人物を「腹心」と呼ぶようになった。

▼天王山

——ほんとうは低い山なのに……

標高わずか二七〇メートル。里山といってもいい低山のなかで、もっとも有名なものは、この山だろう。

てんのうざん

プロ野球などでも優勝にかかわるような大事な試合のことを「天王山」というが、これは京おとくに おおやまざき都府の南部、乙訓郡大山崎町に実在する山である。

ようしやう

天王山は、南方から京都へ入ってくる道を押さえる要衝にある。そのため、昔から京の都周辺の戦略拠点とされ、とくに一五八二年（天正十年）、豊臣秀吉と明智光秀が戦った山崎の戦いでは勝敗を分ける要地になった。毛利攻めから取ってかえした豊臣側が、先に天王山を押さえた

ことが、明智軍を撃ち破る勝因の一つになったという。そこから勝敗を決するような分岐点のことを「天王山」というようになった。

てんもくざん

なお、同じような意味で「天目山」という言葉もある。こちらは山梨県に実在する山で、織田信長が武田勝頼を攻めたとき、勝頼がこの山で自刃したことから、天下分け目の戦い、または進退がきわまるという意味でつかわれる。言葉としては、それほどポピュラーではないが、標高は一三八〇メートルと天王山を圧倒している。

▼上品・下品

——もともとの意味は？

「あの人は上品だ」「下品だ」など、人間の品性の評価について「上品」「下品」という言葉をつかう。「上品」といわれるとうれしくなり、「下品だ」といわれると腹が立ってくるものだが、もともとの意味を知れば、そんなに腹も立たないかもしれない。

「上品」「下品」はもとは仏教用語で、それぞれ「じょうぼん」「げぼん」と読む。仏教では、

極楽往生するにあたって人間をランク分けするが、最上位にあるのが「上品」であり、もちろん

ちゅうぼん

りんおう

極楽浄土が約束されている。つぎは「中品」で「輪王の位を得て、いろいろな楽しみが得られる」という。

そして最後が「下品」となるが、それでも浄土には行けるのである。浄土に行くことができるのだから、「下品」といわれてもそう目くじらを立てる必要はないだろう。

▼大衆

——どこからきた言葉？

映画『男はつらいよ』にでてくるフーテンの寅さんは、ときどき隣りのタコ社長経営の印刷工場の労働者諸君に向かって演説をぶつ。その内容は、「君たちのような“大衆”は学問がないからダメだ」といったものだが、これでは寅さんのほうが学問のない人といわれてもしかたがないだろう。

「大衆」は、その昔は仏教の世界でつかわれた言葉。仏教を学び、信者全般を「大衆」といったのである。さらに、天台宗の寺院では、学僧の中でも役職につかない僧のことを「大衆」と呼んでいた。

そういう学僧は、学問はあっても役職をもたないために、社会的な力がない。そんなところから、寅さんがバカにするような「大衆」のイメージができたともいえるが、本来の「大衆」はけっして愚かでなかったわけだ。

【コラム】

「だらしない」「はしたない」「ふがいない」「つつがない」

——いったい、何がないのか？

「だらしない」の「だらし」は、「しだら」の倒語。しだらの語源はサンスクリット語の「ストラ」で、秩序や規律を意味する。つまり、「だらしない」とは、秩序や規律のない状態のことになる。

しきていさんば うきよどこ

式亭三馬の『浮世床』には、「なんのだらしもねへくせに」の注釈として、「しだらがないトいふ事を『だらし』がない、『きせる』を『せるき』などいふたぐひ、下俗の方言也」と説明されている。

「はしたない」は、『源氏物語』にも「はしたなし」という形で登場し、漢字で書けば「端なし」。もともと、どっちつかずで半端な状態や気持ちを指すが、現在は、みっともない、つつしみがない、無礼だという意味でつかわれている。

「ふがいない」の語源は、「言ふ甲斐なし」。江戸時代の狂言に「おのれはふがいないやつよ」とあるように、やはり古くからつかわれてきた。意味は、いくじがないとか、役に立たないということ、いまも昔もあまり変わらない。

逆に、「無いからよい」という意味になる言葉としては、「つつがない」がある。「つつが」はダニの一種で、昔はこれに刺されると高熱をだし、死亡率も高かった。そこから無病息災であることを「つつがない」というようになった。

第五章 「動物」がでてくる言葉の謎を解く

▼どこの馬の骨だかわからない

——なぜ、「馬の骨」にたとえられる？

ちょっと前までは、娘が「お父さん、結婚したい人がいるの」と切りだせば、「えっ、ワシは何も聞いてないぞ。そんな、どこの馬の骨だかわからないようなヤツに娘をやれるかッ！」と怒りだすのが、ふつうのオヤジだった。

この「どこの馬の骨だかわからない」という言葉、なぜ唐突に「馬の骨」がでてくるのだろうか。

この言い回しは、中国から伝わったもの。その昔、中国では、役に立たないものの代表を「けいろく一に鶏肋、ろっこつ二に馬骨」といった。鶏肋はニワトリの肋骨のことで、小さすぎて役に立たない。逆

に、馬の骨は何の役にも立たないうえ、処分に困るほど大きくて邪魔なものだ。

このことから、誰にも必要とされず、邪魔になるもののことを「馬の骨」というようになった。

▼豚に真珠

——「豚」が選ばれた理由は？

女性から何度も「ねえ、あの真珠の指輪買ってえ」とねだられると、つい男性は心の中で「豚に真珠」といつてやりたいと思ったりする。

むろん、もともとの意味は、値打ちのわからない者に宝物をやっても無駄だという意味。この

ふくいん

言葉の出典は『新約聖書』マタイによる福音書で、

「聖なるものを犬にやるな。また、真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向き直ってあなたがたに咬みついてくるであろう」

と書かれている。

聖書では、豚は不浄の動物とされ、食用とすることも禁じられていた。この場合も、暗愚の動物の代表として登場させられている。あんぐ

もっとも、最近の女性に「豚に真珠」などと悪態をつけば、本当に咬みつかれかねないので用心。

▼鳥居

——この「鳥」はどんな鳥？

地図で神社を示す記号は、鳥居の形をしている。それくらい神社に鳥居はつきものだが、ではそこに「居る」のはどんな鳥なのだろうか。

神社だけに、鳩に決まっているだろうという声も聞こえてきそうだが、じつはこの鳥は鳩ではない。鳥居は、もともとニワトリのとまり木をシンボル化したものだ。

昔の人は、わざわざいのもととなる悪霊は、夜にやってきて夜明けとともに去っていくと信じていた。そして、夜明けとともに「コケコッコー」と叫ぶニワトリには、その悪霊を追っ払い、明るい朝の光を呼び起こす力があると考えていた。

そこで、神様の先導役として、ニワトリのとまり木を神社の入り口に立てるようになったのである。

▼タコ部屋

——なぜ、「タコ」なのか？

劣悪な環境で、しかもそこから抜けだせないような場所のことを「タコ部屋」という。これは、タコ壺に入ったタコが、窮屈なはずなのに二度とでてこれないことから、こう呼ばれるようになった。この言葉が生まれたのは、明治時代の北海道である。

からふと

当時、北海道や樺太では、炭鉱や開拓の労働者が劣悪な条件で働かされていた。その労働は過酷であり、住環境は劣悪、食事も満足に与えられなかった。もちろん、賃金は雀の涙である。だが、彼らは厳しい監視の中、そこを抜けだすこともできなかった。

そこから、こういった非人間的な環境で働かされる場所のことを「タコ部屋」というようになった。

▼犬も歩けば「棒」にあたる

——なぜ、犬は「棒」にあたった？

いろはガルタで有名な「犬も歩けば棒にあたる」。その意味を「犬だって歩かなければ、チャンスに恵まれない」と思っている人は多いだろう。無駄と思えるような行動でも、やってみると思いがけないことに会おうと解釈すれば、この場合の「棒」は「好機」「幸運」という意味になる。

たしかに、最近では、そういう意味につかわれることが多いのだが、もともとの意味は違う。昔は、犬も歩けば、犬嫌いの人から棒で殴られるという意味だったのだ。つまり、この「棒」は犬を殴るための棒であり、災い、不幸なことを意味していたのだ。

言葉の意味もいまとは違い、犬も棒で殴られると、だんだん学習してそういう人にはむやみに近づかなくなる。そこから、「何事も経験」「かわいい子には旅をさせろ」というような意味でつかわれていた。

昔は、野良犬が多く、また狂犬病も流行していたため、犬を放し飼いにしておくと、棒などで追っ払われることが多いという事情があった。現代のように、犬に首輪をつけて飼われる時代になって、言葉の意味も変化した。

▼土龍

——「龍」とはどんな関係がある？

漢字で「もぐら」をどう書くか、知っている人のほうが少ないだろう。すぐに書ける人は、なかなかの漢字博士に違いない。

もぐら

漢字で「土龍」と書くといえば、驚く人もいるだろう。「土」に関係するのは納得できても、「龍」とどう関係するのかピンとこないからだ。

ピンとこないのも当たり前で、中国で「土龍」と書けば、みみずのことになる。日本の先祖たちが、どこでどう間違えたかは定かではないが、もぐらを「土龍」と書くようになったのは、土

の中でもぐらが掘って進んだ穴の曲がりくねり方が、龍の長い体に似ているからという説もある。

ちなみに、もぐらという名前は、もぐらの古名「うごろもち」が転じて、もぐらとなったといわれる。少なくとも、土にもぐるから、もぐらとなったのではないようだ。

▼麻雀

——「雀」とはどんな関係がある？

マーじゃん

麻雀という言葉に、なぜ「雀」という文字がつかわれているのか、と聞けば、徹マン明けのボーツとした頭に、雀のさえずりが聞こえてきた光景を思いだす人もいるだろう。

しかし、雀と徹夜マーじゃんには、何の関係もない。この関係については、次の二つの有力な説がある。

パイ

一つは、麻雀牌をかき回す音が、雀のさえずりに似ているというもの。そして、もう一つの説は、役をそろえて上がるとき、そろえた牌の形が雀が翼を広げた形に似ているからという説である。

はんでん

なお、麻雀の「麻」は、もともとは斑点の意味。たとえば、麻婆豆腐は、もともとあばた面のお婆さんがつくった料理だから、こう書く。麻雀の麻は、牌の裏側の模様を指している。

▼蛇口

——水道と「蛇」との関係は？

水道の蛇口を、なぜ「蛇口」と呼ぶのだろうか、という疑問に対して、「あの水の出口が、蛇の口に似ているからだよ」と考える人もいるだろう。「いや、あの形はどう見ても蛇の口には見えない」とこだわる人もいるだろう。

この場合、後者の人のほうが正しい。そもそも、蛇口と呼ばれたのは、水道口を蛇の口に見立てたからではない。昔は、水のでる場所に、龍の顔形に似せた彫刻がほどこされていることがあったのだ。

もくひ

明治三十一年、東京で全面的な上水道設備の改良工事が行われ、それまでの木樋が鉄管や鉛管に換えられた。だが、工事費や水道料金が高かったので、専用栓を引くより、何軒かで使う共同栓が普及した。

この共同栓の形が、龍の顔から水がでるような仕組みになっていた。そこから、「龍口」ではおそれおおいこともあって、「蛇口」と呼ばれるようになったのである。

だから、いまの水道の蛇口を見て、蛇の口を連想できなくても、もったもなのである。

▼猿轡

——「猿」がでてくる理由は？

人質などが声を立てないよう、手拭いなどを口にかませてくくりつけることを「猿轡をかます」という。しかし、人間を縛るのに、なぜ猿がでてくるのだろうか。

それは、唐突な話のようだが、猿と馬に深い関係があることに由来するという。馬と猿は相性なごがよく、猿を厩うまやの近くにつないでおくと、猿のしぐさに馬の気持ちも和むのか、暴れ馬もしげんにおとなしくなったという。そこから、猿を厩の神とする地域もあり、また厩で馬をつなぐ木は「猿木」と呼ばれてきた。

一方、轡は、ご存じのように、馬の口にとりつける金具のこと。手綱たづなをつけて、馬の動きをコントロールするために使う道具だ。

この猿轡という言葉は、そういう馬と縁の深い言葉が、二つ結びついて生まれたようだ。

▼蛇の道は蛇

じゃへび

——蛇と蛇の違いは？

英語にも、「泥棒のことは泥棒がもつともよく知る」ということわざがある。いわば、その日本版が「蛇の道は蛇」である。ただし、多少ニュアンスが違うのは、日本版には、仲間うちのこととは「下っ端」でもよく知っているという意味が加わることである。

昔は、蛇とへびは、^{じゃ}区別されていた。蛇とは、^{じゃ}人間すら吞み込んでしまうような大きなへび、うわばみ、おろちのことである。

一方、へびはくちなわなどの小さなへびを指した。

そこから、人間にとって怖い大蛇の通り道などは、同類の小さなへびがよく知っているというところから、この言葉が生まれたのである。

▼トドのつまり

——トドって何のなまこ？

トドといえば、アシカを巨大化したような海獣を思いだす人が多いだろう。しかし、この「トドのつまり」という言葉とは関係ない。このトドは、やはり海にいる生き物だが、体長四メートル

ルにもなる海獣のトドに比べれば、はるかに小さな魚の名前だ。

このトドは、ボラが成長したときの名前である。ボラは、ご存じのように、日本近海にも多数生息している魚で、成長するにつれて名前が変わる「出世魚」だ。幼魚のときはオボコと呼ばれ、成長するにつれてスバシリ、イナ、ボラと名前を変える。さらに大きくなると、最大八〇センチにもなり、最後には「トド」と呼ばれるようになる。

終わりにはトドと呼ばれるところから、「トドのつまり」という言葉が生まれたわけだ。昔はいまよりもさらにボラの数が多かったのか、言葉としてもポピュラーで、「とど」というだけで「結局」「ついに」という意味があった。

▼尻切れトンボ

——トンボは尻が切れたらどうなる？

「あらあ、また尻切れトンボ？」

子どものころ、母親から、そういわれた経験のある人もいるだろう。ものごとを中途半端でやめたり、中断することを「尻切れトンボ」というが、大人になっても、奥さんからそういわれている人もいるかもしれない。

この言葉がつかわれるようになったのは、尻の切れたトンボが交尾できなくなるからではない。トンボは、シッポが切れると、飛べなくなってしまう。死ぬともちろん何もできなく

なるところから、昔の人は途中でやめてしまうことを「尻切れトンボ」と呼ぶようになったのだ。

尻切れトンボになるのは、人間にとっては単に中途半端でやめることだが、トンボには生死にかかわることなのだ。

▼腐っても鯛

——鯛は腐っても食べられるのか？

「腐っても鯛」という言葉を比喩的表現と思っている人が多いだろう。たしかに鯛はおめでたいときに使う魚であり、値段も張るが、いくらなんでも腐ったら食べられないと思う人のほうが常識的だ。

ところが、鯛は本当に少々なら腐っていても食べられる魚なのだ。文字どおり、腐っても食べられるところから、「腐っても鯛」といわれるようになったのである。

もともと、鯛の体は、内細胞の外膜がとても頑丈にできている。だから、少々の細菌が取りついても、なかなか腐敗が進行しない。さらに、肉質中に水分が少ないため、この点でも腐りにくい。そのため、鯛は少々いたんでいても、ていねいに水洗いすれば、さすがに刺身は無理でも、焼き物、煮物としては十分食べられる。そんなところから、この言葉が生まれたのだ。

ちなみに、鯛は日本でこそ魚の王様だが、欧米では「貪欲な魚」としてイメージがよくない。徹底した肉食主義の魚であり、エビ、カイ、タコなどを襲って貪欲に食べまくるからだという。

▼きつねの嫁入り

——どうして「きつね」がでてくる？

太陽はでているのに、雨が降ることを「きつねの嫁入り」という。なぜ、日照り雨のことをいうのに、きつねがでてくるのだろうか。

この日照り雨ときつねには、直接の関係はない。もともと「きつねの嫁入り」という異様な光景を指す言葉があって、日照り雨も異様な天気ということで、そう呼ばれるようになったのだ。

そもそも、「きつねの嫁入り」とは、闇の夜、山野に点々と連なってあらわれる^{りんか}燐火のことをいった。

昔の嫁入りは、夜、^{たいまつ}松明をかざして行列したので、遠くからは火が点々と連なっているように見えた。しかし、どこにも婚礼の予定はないのに、山野に点々と火が連なると、きつねが^ば化か

しているとして、「きつねの嫁入り」というようになったのである。

そして、この言葉が、やはり不思議な現象である日照り雨を指す言葉としてもつかわれるようになった。

▼鳶職

——鳥の「鳶」とはどんな関係がある？

とびしよく

建築物の足場を組むなど、建築、土木の高所工事に従事する技能者のことを「鳶職」というが、その名前は彼らに欠かせない道具名に由来する。

かぎ

とびぐち

彼らは、鉄製の鉤を先端につけた長い棒を使って仕事をするが、その先端の鉤は鳥の鳶のくちばしに形がよく似ている。そこから、その道具を「鳶口」といい、それを使う職業のことを「鳶職」というようになったのである。

えんしょう

江戸時代の鳶職は、その技術を生かして消火活動にも活躍した。鳶口を使って、火元や風下の家を破壊、解体して延焼を防いだのである。

▼トリ

——最後にでてくる歌手をこう呼ぶのは？

最近のNHK紅白歌合戦をめぐる話題といえ、小林幸子・美川憲一の衣装対決、そして誰が「トリ」をとるかである。歌手にとって、一年をしめくくる紅白でトリをとり、最後に歌うことは大きな名誉になる。

この「トリ」は、もともとは寄席でつかわれていた言葉だ。寄席で最後に口演する真打ちのことをこう呼んでいたのが、芸能界全体でつかわれるようになった。

はなしか

昔、噺家たちは一門ごとにグループをつくり、その単位ごとに寄席で口演していた。そのとき、口演する寄席を確保し、口演料にありつけるのは、人気のある噺家のいる一門だった。そこで、人気のある噺家が寄席を取ることから、「取り」と呼ばれるようになった。

むろん、そういう人気のある噺家は、最後に登場することになる。そこから、最後にでる噺家や歌手のことをこう呼ぶようになった。

▼めじろ押し

——地名の目白、鳥のメジロ？

東京の目白といえば、日本を代表する文教地区の一つ。学習院大学、日本女子大などの有名大学、その付属校などがめじろ押しで、受験シーズンには、受験生とその父兄でめじろ押しとなる。しかし、この言葉とは関係がない。

この「めじろ」は、鳥のほうのメジロである。メジロは、体長六センチほどのスズメより少し小さい鳥で、ツーツーチと鳴く声が美しい。並んで樹木にとまって、身体をくつつけあう習性がある。そこから、人や物が一カ所に集まって混雑することを「めじろ押し」というようになった。

昔は、いまでいう押しくらまんじゅうのような子どもの遊びのことも、「めじろ押し」と呼んだ。

▼閑古鳥が鳴いている

——「閑古鳥」って、どんな鳥のこと？

最近は、流行のサイクルが非常に早くなっている。たとえば、あれだけ若い人たちにぎわっていた携帯電話ショップやゲームセンターが、いまではガラガラのこともある。

かんことり

客がほとんどこないことを「閑古鳥が鳴く」というが、この閑古鳥とはカッコウのことである。

日本では、昔からカッコウの鳴き声は寂しいものとされてきた。そこで、人気がなく、さびれた様子をこう表現するようになった。

▼月とスッポン

——なぜ、「月」と「スッポン」を比べることになった？

月とスッポンほど違う——よくつかわれる表現だが、考えてみると、なぜ月とスッポンを比較するのだろうか。

きたむらのぶよ

きゆうしようらん

その答えは、徳川時代の末期、国学者の喜多村信節という人が書いた『嬉遊笑覧』という本の中にある。

それによると、日本の京阪地方ではスッポンのことを「マル」と呼んでいた。つまり、丸いという点では、月とスッポンはよく似ているのだが、実際には天と地のように大きな違いがある。そこから、かけ離れているもののたとえとして、月とスッポンがつかわれるようになったという。

ただし、別の説もあり、スッポンとはもともとは動物のスッポンではなく、朱で塗った丸いお盆「朱盆」のことだったという。最初は「月とシュボン」といって、同じく丸いものでも、大きな違いがあるといわれていたのが、しだいに「月とスッポン」に変化したという説だ。

しんぴようせい

この二説の信憑性には、月とスッポンほどの差はないようである。

▼雀百まで踊りを忘れず

——「雀」はどんな踊りを踊る？

「雀百まで踊りを忘れず」といえば、人間いくつになっても、幼いころの習慣は改まりにくい、子どものころに覚えたことは忘れないという意味である。

そう聞いて、「なるほど、雀は踊っているものね」という人は、観察眼と詩的センスに恵まれた人かもしれない。

雀の歩き方には特徴があつて、両足をそろえてぴょんぴょんと跳んで歩く。その様子は、踊っているように見えなくもない。

こおど

その歩き方から、「雀の雀躍り」とか、「雀、小躍りして喜ぶ」という言葉も生まれたのだが、いくつになっても、雀の歩き方は変わらない。そこから、「雀百まで踊りを忘れず」という言葉が生まれたのである。

ただし、昔は、踊りを習いに行くことは道楽であり、ぜいたくで呑気なこととされた。そのため、このことわざには、子どものころから道楽を覚えると、死ぬまで道楽を忘れられないというニュアンスが含まれていた。

▼着たきり雀

——どこからきた言葉？

元バレーボール選手の大林素子さんは、若いころ、デートにもジャージ姿で行ったという。オリンピックをめざそうという選手にとって、休日は一年間にわずか数日くらいなもの。学校や職場以外は、コートと寮の往復で、毎日をジャージだけで過ごしている人は、彼女以外にも少ない。

毎日同じ服を着ている人のことを「着たきり雀」というが、その語源は多くの人がピンとくるのではないだろうか。

この言葉のオリジナルは「舌切り雀」。この言葉とかけたダジャレで「着たきり雀」というようになったのだ。

着たきり雀と呼ばれようが、細かいことを気にしない選手には、きっと大試合に強い人が多いのだろう。

▼へのカッパ

——どこからきた言葉？

簡単にできることを「へのカッパ」という。漢字で書くと、「屁の河童」になるが、「屁」や「河童」は後からあてられた文字だ。

この言葉は、もともと「コッパのヒ」といわれていた。漢字で書くと、「木っ端の火」。木っ端は、まきに比べれば簡単に火がつく。そこから、朝飯前の簡単な仕事、作業という意味が生まれた。

それが、年月を経るうちになまって、「河童の屁」といわれるようになり、さらにひっくりかえって「屁の河童」となったようだ。

たしかに、「木っ端の火」というより、「河童の屁」というほうがいいやすくもあり、ユーモラスでもある。



鰐

——魚じゃないのに、魚偏になった理由は？

ワニという漢字には、魚偏がつかわれている。

ワニは爬虫類のはずなのに魚偏というのは、もう一つ納得がいかない人もいるだろう。と思ったら、大昔の中国人は、ワニのことを魚の仲間だと思いついていたようだ。

その昔、中国の揚子江には、体長一、二メートルのワニがすんでいた。だが、当時は、生物の分類が大ざっぱで、とにかく水の中にいれば魚だと、魚偏にしてしまったようなのだ。

「でも、ワニには足もあるのに——と笑ってはいけない。蛙くらい身近な動物なら魚偏はつけなかったのだろうが、たまにしか見ないワニでは、魚と思い込んでも無理はなかったのではないだろうか。

▼「又エ」のような態度

——どんな動物のこと？

態度がはっきりしないことを「又エ的な態度」という。又エは伝説上の動物で、漢字では

このえ

みなもとのよりまさ ししんでん

「鵠」と書く。近衛天皇の時代、源 頼政が紫宸殿の屋根の上から射落とし、退治したと伝えられる。

又エは、頭はサル、胴体はタヌキ、手足はトラ、尾はヘビのような怪物で、そこから正体不明の態度や人のことを「又エのような」と形容するようになった。

なお、又エの鳴き声は、鳥のトラツグミに似ていたという。そこから、トラツグミのことを別名又エというが、こちらの又エは可愛い小鳥である。

▼千鳥足

——どんな歩き方のこと？

ちどりあし

酔った人がよろめきながら歩くさまのことを千鳥足という。じっさい、鳥の千鳥は歩くのが苦手だ。千鳥は、小鳥にしては脚が長いうえ、前指が三本で、支えとなる後ろ指がなく、歩く姿が安定しない。そこから、酔っぱらいの歩き方にたとえられることになった。

【コラム】

「善玉」「悪玉」「親玉」「お年玉」「くす玉」

——どんな「玉」のこと？

くさぞうし

「善玉」「悪玉」という言葉は、江戸時代の草双紙に由来する。

草双紙は絵入りの読み物で、登場人物の顔を丸くして、その中に「善」や「悪」の字を書いていた。誰にでも一目でわかるようにしてあったわけで、その言葉が一般に広まった。「上玉」「替玉」も、それにならって後につくられた言葉である。

じゆず

「親玉」は数珠からきた言葉。数珠に一つだけ混じっている大きな玉を「親玉」、あるいは「母珠」といい、小さいのを「子珠」と呼ぶ。親玉が、小さい玉を引き連れているようにも見えることから、悪い仲間の頭を「親玉」と呼ぶようになった。

かしら

お正月の「お年玉」は、もともと神様へのお供え物だった。それが、親戚や近所で餅や米を贈るようになり、やがて大人から子どもへの贈り物へと変わった。

おうぎ

はなまち

といっても、江戸時代のお年玉は、凧やコマ、扇などが中心だった。お金を贈るのは花街の習慣で、一般の家庭に広がるのは戦後のことである。

また、運動会や式典などで割られる「くす玉」は中国生まれ。「薬玉」と書き、もともとは
たんご

端午の節句に飾りとして用いられ、邪気を払い、寿命を延ばすと信じられていた。八六九年成
しよくにほんこうき

立の『続 日本後紀』にもでてくる、ここに挙げた「玉」の中ではもっとも古い「玉」だ。

第六章 「数字言葉」の謎を解く

▼五十歩百歩

——この言葉を生んだエピソードは？

「五十歩百歩」が「大差ない」「結局、同じである」という意味であること、それが中国故事に由来することを知っている人は多いだろう。

だが、具体的にどんなエピソードだったかといえは、「あれは、たしか……」と口ごもる人は少なくないだろう。

紀元前約四〇〇年、中国の戦国時代、各国とも軍備を増強するために重税を課して、民衆を苦しめていた。そのころ、「民衆を苦しめる政治はいけない」と説いていた孟子に、ある国王が「私は、先生の教えに従い、民衆を大事にしていることは隣国以上だと思っているが、ちっともよい国にならない。どうしたわけだろう」とたずねた。

すると、孟子は戦争を例にとり、「戦いの最中、戦場から逃げだした者がいます。ある者は五〇歩走って踏みとどまり、ある者は一〇〇歩逃げました。前者が後者を卑怯者といったらどうでしょうか」と話した。

その国王は、「それはおかしい。五〇歩でも一〇〇歩でも逃げたことに変わりない」と答えたので、孟子は「それがわかりなら、隣国の政治と比較することじたい間違いであることがわかりでしょう」と、暗に隣国の悪政と大差ないことを戒めたという故事が、この言葉を生んだ。

▼ピカ一

——どんな遊びからでた言葉？

若い人の間で「ピカ一」といえば、いまはキンキ・キッズの堂本光一のことだが、この言葉、もともとは花札からきている。

花札には「光り物」と呼ばれる二〇点ものの札が五枚ある。一月の松に鶴、三月の桜に幔まん幕まく、八月のススキと満月、十一月の小野道風と柳、十二月の桐と鳳凰である。
おののとうふう ほうおう

配られた七枚の札の中に、この光り物が一枚だけあり、あとの六枚がカスとき、「ピカ一」という役になった。これが元になって、その他大勢の中で一つだけ傑出したもののことを「ピカ一」と呼ぶようになったのである。

ちなみに、光り物の五枚を全部集めると、「五光ごこう」という大きな役になる。

▼二枚目

——一枚目は、どんな顔か？

二枚目といえば色男、三枚目はおもしろい人のことをいう。では、一枚目は、どんな人のことがござんじだろうか。

もともと、二枚目、三枚目という言葉は、歌舞伎の世界に由来する。昔の歌舞伎では、興行の際、一座の幹部俳優八人を絵姿の看板にして、劇場の前に並べたものだった。その二番目に張りだされたのが、いわゆる「二枚目」。二枚目には、色男役の絵姿が並べられることが多かったのだ。世間でも色男のことを二枚目と呼ぶようになった。

また、「三枚目」に並べられたのは、道化のような役の俳優が多かった。それで、おもしろい人のことを三枚目と呼ぶようになったのである。

かきだし

そして一枚目には、「書出」といって、もっとも人気のある看板役者が並んだ。つまり、一枚目は、色男でも道化でもなく、もっとも実力のある人気俳優の定位置だったのだが、一般的な言葉にはならなかった。

ちなみに、「二枚目半」というのは、歌舞伎用語ではなく、ずっと後になってから俗につかわれるようになった言葉である。

▼半紙

——何の半分か？

習字に使う紙のことを「半紙^{はんし}」という。半紙というからには、何かの半分であるはずである。

じつは、あの半紙の倍の大きさの紙を「全紙」という。ふつう、紙は全紙のサイズで製造され、それを半分に切ったものが半紙になる。現在、半紙のサイズは、縦二四〇二六センチ、横三二〇三五センチが標準とされている。

習字では、半紙を縦長の形におき、上のほうに文鎮^{ぶんちん}をおく。だから、長いほうが縦で、短いほうが横とされているだろうが、じっさいはそうではない。もとの全紙に戻すと、半紙の長いほうが横で、短いほうが縦になる。

全紙の標準サイズがおおむね定まったのは平安時代のことだが、紙は長いあいだ貴重品であり、半紙が一般に使われるようになったのは、江戸時代のことだった。最初は包み紙などに用いられ、現在のように習字に使うようになったのは、明治以降のことである。

▼いちかばちか

——どこからきた言葉？

「いちかばちか」という言葉が博打ばくちからきていることは、多くの人が見当がつくだろう。じっさい、江戸時代の博打場で生まれた言葉といわれる。

ただし、その正確な語源ははっきりしない。

一説には、サイコロを使った丁半バクチに由来し、「丁」と「半」の文字のそれぞれ上の部分を取って、「一」か「八」か。そこから、「いちかばちか」というようになったという。

もう一つの説は、「一か罰か」に由来するという。サイコロの一がでるかどうかを賭けたトバクで、一がでるかしくじるかを「一か罰か」といった。これが転じて、「いちかばちか」というようになったという。

いちかばちかで決めるわけにもいかず、どちらが真説かははっきりしない。

▼三拍子そろう

——もともとの「三拍子」とは？

野球では、イチローのような選手を、三拍子そろった好選手という。走ってよし、打ってよし、守ってよしという選手のことだが、高いレベルで三拍子そろう選手はそうはいない。

昔の豪傑選手には、野球の三拍子の他に、飲む、打つ、買うも加えた六拍子そろった選手もいたようだが、この「三拍子がそろう」という言葉、もとは邦楽からきたものである。

いまでは「拍子」といえばリズムという意味になるが、昔は楽器そのもののことを意味した。たとえば、小鼓、大鼓、笛のように、三種の楽器を組みあわせれば三拍子といった。そして、これらの三つの楽器の奏でる音がピタリと合えば、すばらしい演奏になった。

ここから、三つの必要な条件がそろったり、すべての条件がそろうことを「三拍子そろう」というようになったのである。

▼二の腕

——一の腕はあるのか？

二の腕というのは、ヒジから肩までの間。二の腕というのなら、一の腕はあるのだろうか。

答えは「ない」。正確にいえば、一の腕と呼んでもいい部分はあるのだが、そうは呼んでいない、ということになる。

二の腕とは、手首から数えて二番目の腕という意味で、ヒジから肩までの間を指すというわけだ。すると、手首からヒジまでが「一の腕」となりそうなものだが、そういう言葉がつかわれたことはない。

なお、昔は、正式な場所、神聖な場所で肌をあらわにすることは禁忌きんぎにふれた。とくに、女性そでが人前で肌を露出することはタブーだった。水仕事をするときでも、着物の袖を少しまくるくらい。それも、手首の上を少しだすだけで、ヒジに近い部分は露出しなかった。ましてや、ヒジから肩までの間、二の腕を人目にさらすことはまずなかった。

▼八百屋

——八〇〇種類も野菜を置いてないが？

八百屋は、なぜ八百屋というのだろうか。

きわめて素朴な疑問だが、即答できる人は少ないだろう。もちろん、八〇〇種類もの野菜や果物を売るからではない。どんなに大きな八百屋でも、八〇〇種類もの商品は扱っていない。

江戸時代、八百屋という言葉は、必ずしも青果商のことを意味しなかった。井原西鶴の『好色五人女』に登場する「八百屋お七」の実家も、じつは乾物商だった。

もともと、八百屋の「八」には分けるという意味があり、「百」は親指の形、「屋」は商店を表す。

つまり、八百屋とは「親指を立てて、物を分けさばく店」ということで、いまでいう市場を意味し、そこから転じて商店全般を指すことが多かったのである。

そういえば、現代でも、都会の八百屋は、他の食品や日用品も扱うスーパーマーケットに転身することが多い。スーパーマーケットとなったとたん、「八百政」などという屋号を捨ててしま
うが、スーパーマーケットのほうが本来の意味の八百屋に近いといえる。

▼一〇〇万ドルの夜景

——なぜ、「一〇〇万ドル」なのか？

港町神戸、六甲山から見えるような美しい夜景のことを「一〇〇万ドルの夜景」という。

多くの人は、この一〇〇万ドルという言葉は、単なる宣伝文句であり、特別の意味はないと思
っているだろう。だが、こと神戸に関していえば、この一〇〇万ドルにはちゃんとした根拠があ
った。

一九五三年（昭和二十八）、当時の電力会社の副社長が、神戸の夜景がなぜ一〇〇万ドルなの
か、次のように解説している。

彼の説明によると、当時、大阪、尼崎、芦屋、神戸の電灯の数は、全部で四九六万七〇〇
個。その電気代は一カ月で四億二九〇〇万円だった。

当時、一ドルが三六〇円の時代なので、ドルに換算すると、一〇〇万ドル強になる。つまり、
神戸の夜景が一〇〇万ドルなのは、「電気代ですねん」と説明したのである。

なお、タイのバンコクでは、高層ビル群から眺める夜景を「二〇〇万バーツの夜景」と宣伝していた。現在の為替レートでは、一〇〇万ドルの夜景は約一億二〇〇〇万円。一〇〇万バーツは、わずかに約三〇〇万円だ。タイのほうは、かなり謙虚な宣伝文句だったといえる。

▼胸突き八丁

——富士登山の最後の「八丁」めから

「受験勉強も、いまが胸突き八丁」といえば、冬休みのころになるだろう。いよいよセンター試験、私大受験、国公立二次試験に向けて、ラストスパートをかけるときである。

気分的にもピリピリしているため、解けない問題があると、「本番は大丈夫なのか」と受験生諸君は不安になってくる。まさしく、胸が突き上げられるように苦しくなるわけだ。

この言葉、もともとは富士山へ登る人たちの間でつかわれた。

ふもと

いまのように、クルマで途中まで登ることができなかった時代、麓から登っていくと、頂上までもうひと息の最後の八丁（約八七二メートル）が、ひじょうに苦しかったのだという。

疲労のうえ、空気が薄くなって息もできなくなるほど苦しくなるので、最後の八丁の頑張りどころを「胸突き八丁」と呼ぶようになったのだ。

ここから転じて、ものごとの大詰めのもっとも苦しい局面のことをこう呼ぶようになった。

そこを越えると、晴れやかで最高の気分が味わえる。受験生のみなさん、どうか最後まで頑張ってください。

▼八宝菜

——八種類の野菜が使ってたっけ？

中華料理に八宝菜という料理がある。日本人好みのメニューの一つだが、この料理には八種類の野菜が使っているのだろうか？　といって、野菜の数を数えても、あまり意味がない。この「八」という数字は、野菜の数とは関係ない。

昔から、中国では「八」という字がおめでたい数字とされてきた。むろん、「宝」も縁起のいい文字であり、八宝菜はおめでたい漢字を組みあわせて名づけられた料理の名前なのである。

この料理には、次のようなエピソードも残されている。清の時代、せいたいこう宮廷職員の間で大変おいし

い料理がひそかに食べられていた。その噂を聞いて、味見した西太后もとても感激して、その料理名をたずねた。ところが、その料理は、余った野菜などを使ったまかない料理であり、名前などついていなかった。そのことを西太后に告げると、「数々の宝を集めてつくったようにおいしい料理だから、『八宝菜』と呼ばばいい」といって、この名がついたという。

できすぎた話だが、中国では「八宝菜」という名は、それくらいおめでたい名前なのである。

▼駆けつけ三杯

——なぜ、「三杯」なのか？

今時は酒席に遅れていくと、「では、一気」とグラスやジョッキで一気飲みをさせられそうだが、昔は遅参したときは「駆けつけ三杯」に決まっていた。

三杯といってもグラスではなく、オチヨコで三杯だが、その背景には酒席での次のようなしきたりがあった。

さかな

酒の席では、まずお膳に杯、銚子、酒の肴をのせて客にだした。これが一の膳で、客はその肴で酒を三杯飲んだ。

飲み終わったら一の膳をさげ、同じように杯、銚子、酒の肴をのせて、二の膳をだした。さら

しきさんこん

に同じように、三の膳をだすのが一般的な作法で、これを「式三献」といった。酒をすすめるときに、「まず、一献いかが」というのも、このしきたりの名残である。

さて、酒席に遅れてくれば、一の膳で飲む酒三杯を飲んでいないことになる。その遅れを取り戻すため、「まず、三杯」ということで、「駆けつけ三杯」と呼ばれるようになったのである。

▼人を呪わば穴二つ

——この「穴」は、どんな穴？

昔は、誰かを怨^{うら}んでいる人に注意するとき、「人を呪わば穴二つだから、怨むのはやめなさい」といったものだ。最近あまり聞かなくなった言葉だが、この言葉、かなり深い意味を含んでいる。

まず、この穴が、何を意味するかといえば、墓穴である。人を呪い殺そうとすると、墓穴が二つ必要になると警告しているのだ。

一つ目の墓穴は、呪い殺した相手のもの。そして、もう一つは、自分が葬られるための墓穴である。つまり、他人に危害をくわえれば、結局相手の身内から復讐されるなど、自分の身にも害が及んでくるという意味だ。

そこで、墓穴が二つ必要になるわけである。

▼一合目、二合目

——山の高さは、なぜこの単位？

一合、二合といえ、ふつうは酒や米などを計る単位としてつかう。ところが、山の高さについて、同じように一合目、二合目といういい方をする。

その理由については、次の二つの説がある。

一つは、米などの穀物を盛り上げると、山の形に似てくる。そこで、麓から頂上までを一升しょうとして、それを一〇等分すると、一合目、二合目となるという説である。

もう一つは、その昔、夜間に山へ登った人々は、明かりの油が一合なくなるたびに休みをとった。そこから、休みをとる場所を目安に一合目、二合目というようになったという説。

一合目、二合目あたりから休んでいては、なかなか頂上までたどりつけないとも思えるが、かといって前者の説にもたしかな根拠はない。

▼三度笠

——どんなことが「三度」あった？

木枯し紋次郎をはじめ、渡世人には「三度笠」がつきものである。

すげ

三度笠は、菅の葉で編んだ笠、菅笠の一種で、顔を深くおおうところに特徴がある。そこから

おおぶか

別名「大深」とも呼ばれ、人相を隠せるところから、凶状持ち、お尋ね者たちに“愛用”され、やがて渡世人のトレードマークになっていった。

ただし、もともと三度笠を用いていた人たちは、れっきとした正業にしていた。毎月、定期に三度出発し、江戸と京都・大阪を八日間で往復した「三度飛脚」がかぶっていたところから、この名前になった。

▼海千山千

——この「千」につく単位は？

どうやら、「千」の字がつく人を、あまり信用しないほうがいいようである。まず、「千三せんみつ屋や」といえば、千に三つほどしか本当のことをいわない人のこと。つまり、大変な嘘つき、ほらふきのことである。

また、ひじょうにしたたかな人物のことは、「海千山千」という。この千につく単位は「年」である。海に千年、山に千年も生きているという意味だ。

合わせて二千年も生きることになったのは、蛇である。中国には、蛇のような下等な生き物でも、海に千年、山に千年も住んでいると、やがては龍になるといいういたえがあった。

そこから、経験が豊かで、その世界の主のような人物のことをこう表現するようになったのだ。同じ意味で、「海千河千」という言葉もある。

▼万歳

——いつごろから、つかわれはじめた？

にっちもさっちもいかないこと、または野球で飛球を取り損なって頭を越されることを「バンザイ」という。ともに「お手上げ」になるからである。

日本人が両手を挙げて「バンザイ」と叫ぶようになったのは、そんなに古いことではない。明治時代も半ばになってからのことである。

明治憲法を発布するにあたって、天皇陛下を二重橋でお迎えするさい、国民が唱和するのに適した言葉はないかと、東大でいろいろ研究された。そのとき、掘り起こされたのが、この「万歳」という言葉だったのだ。

「万歳」の由緒は古く、中国古代の斉の時代、天子の長寿を祝うときにつかわれた言葉と伝えられる。日本では、桓武天皇が平安遷都したとき、「万歳と称して」祝ったというのが、記録として残っている。ただし、そのときは「バンゼイ」と発音されていた。

だが、明治の日本では、「バンゼイ」では叫ぶときに力がこもらないと、「バンザイ」と読むことにした。以後、日本人は、「バンザイ」と叫ぶようになったのである。

▼三下

——なぜ、下っぱのことをこういう？

さんした

「何おう、この三下野郎!」。いまでは、時代劇か落語くらいでしかつかわれなくなった言葉だが、三下とは相手を見下げていう言葉である。

あんまり上品な言葉ではなく、もともとは賭博用語。花札やサイコロで行うカブという遊びに由来する。

カブというのは、二枚の花札を引くか、二個のサイコロを振り、合計が九に近いほど強いという博打である。したがって、合計して二や三では、ほとんど勝ち目がない。つまり、三より下の数では勝ち目がないという意味で、「三下」という言葉が生まれた。これが、相手を見下して、バカにする言葉としてつかわれるようになったのである。

ただし、いまでは、その意味を知る人は少なくなった。「この三下め!」と吐き捨てても、相手は何も感じないかもしれない。

▼一枚噛む

——噛んでいるものは、何?

「一億使っても、まだ二億」というのは、ジャンボ宝くじの宣伝文句だが、少しでも夢をもちたいと、職場の仲間などで、宝くじをまとめ買いすることがある。

そんなとき、年輩社員の中には「よし、一枚噛んでおくか」と、仲間に入る人もいる。若い社員には、「何を噛んでおくんだ？」と首をひねる人もいるだろうが、もともとこの「一枚」は商品取引などの最少単位のことをいった。

つまり、「一枚噛んでおく」とは、最少単位でも、取引きをしておこうという意味。それが転じて、現在ではおもに、一応は仲間に入っておくという意味でつかわれている。

▼千代紙

——「千代」って何のこと？

江戸の名産に「千代紙」がある。和紙に麻の葉や鹿子模様などをきれいに色刷りした紙のことである。かのこ

この紙は、江戸時代から女性に愛用されていたが、この名前、お千代ちゃんという女性の名前にちなんだのではない。江戸城の別名に由来する。

千代紙は、江戸時代、いまも東京・台東区にある「いせ辰」で考案されたが、いせ辰はこの和紙を江戸城に納めていた。

江戸城は別名を千代田城ともいい、いせ辰ではお城に出入りできるのは大変な名誉だということで、城名にちなんで「千代紙」と名づけたのである。

【コラム】

「おつな味」「醍醐味」「けれん味」

——どんな「味」のこと？

「味」のつく言葉には、なかなか味のあるものが多い。たとえば、日本酒をキュツと飲んだときにいう「おつな味」もその一つだろう。

この「おつ」は乙と書き、もともとは邦楽の音階の一つ。甲高い音を「甲^{かん}」と呼んだのに対し、「乙」は一段階低い渋めの音のことだった。そこから、深い味わい、趣きのあることを「乙な」というようになった。

だいごみ

「醍醐味」も味のある言葉だが、そもそも「醍醐」とは乳製品のこと。牛乳を煮詰め、一晩おいて固めたものを再び長時間煮る。すると、クリーム状になり、さらに一晩おくと、黄色い液体が分離する。これが醍醐という食品で、栄養豊富であり、肺結核や卒中の薬でもあった。

いまでは、「醍醐味を味わう」といえば、そのものの真髄を味わうことである。

また、「けれん味がない」という言葉もよくつかわれるが、この「けれん」は、もともとは歌舞伎界の言葉。宙乗りや水芸など本道からはずれ、一般ウケする芸のことをいった。

「けれん味がない」は、そういう「けれん」がないことであり、現在はスポーツなどで、小賢こざかしい技巧に走ることのないプレーのことなどを「けれん味がないプレー」などといってつかう。

また、誠実な人柄で、ごまかしやはったりのないことにもつかう。

第七章 「体」の言葉の謎を解く

▼親のすねをかじる

——なぜ、「すね」でなければならない？

「親のすね かじる息子の 齒の白さ」。江戸時代の川柳である。自活できず、親のおかげで暮らしている者が、かえって身ぎれいにして遊んでいることを皮肉ったものだ。

では、自活できない子どもがかじるのは、なぜ「すね」なのだろうか。その答えは、「すね一本、腕一本」という古い言葉にある。この場合のすねは歩き回る足をさし、腕は仕事をする腕を意味する。腕とすねは、働いて金を稼ぐいちばんの元手ということだ。

親が懸命に働いても、子どもが使ってしまったら、親はさらにすねを削って懸命に働かなければならない。ここから、江戸時代の半ばごろ、「親のすねをかじる」という言葉が生まれた。

▼あばた

——これでも、見かけによらない外来語

「あばたもえくぼ」という言葉は知っていても、この「あばた」という言葉が外来語だということを知っている人は少ないだろう。

ほうそう

その昔は疱瘡にかかる人が多く、顔にその跡が残ることは珍しくなかった。あばたは、もとこの疱瘡の跡のことをいい、語源はかさぶたを意味する「アルブダ」（サンスクリット語）といわれる。

江戸時代より前、あばたはイモ、ジャンコ、ミツチャなどと呼ばれていた。江戸時代になってから、あばたという言葉が僧侶の間で隠語的につかわれはじめ、一般に広まったと考えられている。

念のためだが、「あばたもえくぼ」は、惚れているときは相手の欠点も長所に見えるという意味。

▼癌

——なぜ、腫瘍のことを「ガン」という？

悪性腫瘍の「ガン」を漢字で書けるだろうか。あまり覚えてくれない文字だが、「癌」と書く。江戸時代の医学書には「乳岩」という書き方も登場し、「癌」の語源は岩だと考えられていた。癌のなかでも、乳癌はとりわけ固いしこりになるため、それが岩を連想させたようだ。癌と

いう字は、岩という意味の「磊」に、ヤマイダレをつけたものである。

もう一つの説として、「蟹」に由来するというものもある。英語の「cancer」は、カニという意味のギリシア語 (karkinos) に由来する。腫瘍とその周辺のリンパ節の腫れた様子がカニの姿に似ているためだが、日本語の癌も、カニ←ガニ←ガンと変化したのではないかという人もいる。

▼そばかす

——食べる「そば」とは、どんな関係？

そばかすは、顔の皮膚にできる褐色の小さな斑点。その語源は、そば かす「蕎麦の滓」である。

そばの実を粉にするとき、そばのかすが残る。年頃の女の子の顔にできる褐色の斑点は、そばのかすに似ているというので、こう呼ばれるようになった。

当然、「蕎麦の滓」といわれるくらいで、顔にできるそばかすは、年頃の女の子にとって長らく大きな悩みの種だった。

そのイメージが一変したのは、一九七〇年代あたりから。外国人女優、モデルには、けっこうそばかすの人が多く、それがチャームポイントにもなっている。最近では、昔ほど気にする人は少なくなってきた。

▼おつむ

——頭のことをこう呼ぶのは？

源頼朝は、頭がずいぶん大きかったといわれる。

それで、江戸時代、頼朝の頭蓋骨を展示するという催しがあった。ところが、飾られていた頭蓋骨が思ったより小さいので、見物人の一人が「頼朝公の頭は、もっと大きかったはず」とたずねると、主催者は「これは、頼朝公幼少のころのもの」といった——という落し話がある。

頼朝が幕府を開いた鎌倉時代、頭のことを「つぶり」ともいった。「粒」と同じ語源で、丸くて小さいものを「つぶり」と呼び、とくに宮中の女性が子どもの頭のことをこう呼んだ。

この「つぶり」が、やがて「つむり」となり、接頭語の「お」がついて「おつむり」。この宮中言葉が「おつむ」に略されて、一般庶民に広まった。

▼木で鼻をくくる

——どうやれば、木でくくれる？

木で鼻をくくる——これを実演できる人は、おそらくいないだろう。

木製の洗濯バサミで、鼻をつまんでみせる人はいるかもしれない。そうすると、ツンとすましたような顔になる。しかし、そうしたところで、「木で鼻をくくる」の本来の意味とは、ほど遠い。

もともとは「木で鼻をこくる」といい、「こくる」というのは強くこするという意味だ。

風邪をひいたときなど、鼻水がでる。ふつうはちり紙で鼻をかむが、商家では、丁稚が鼻水をたらしていても、ちり紙を使わせないところがあつた。紙は貴重品であり、丁稚ごときに使わせるのはもったいなかったからである。

その代わりに、木の棒で鼻水をこすらせた。そこから、冷淡な態度をとることを「木で鼻をこくる」というようになった。

ただし、「こくる」という言葉がつかわれなくなり、「くくる」に変化した。そのため、本来の意味がわからなくなってしまったわけである。

▼へっぴり腰

——もともと、どんな「腰」のこと？

不安定な吊り橋を渡るようなとき、お尻が後ろに引けて前かがみになる。そんなときの腰つきを「へっぴり腰」という。

これは、文字どおり、屁をひる腰つきに似ていることから。かっこう悪くて、他人に見せられないという点でも共通している。

そもそも、何をするときにも、本腰を入れて取り組むことが大切であり、とくに江戸時代の人たちは、腰を入れ、腰の構えをしっかりとしなければ、何事も上達しないと考えていた。

お尻を後ろに引いたへっぴり腰では、途中で腰くだけになりやすい。スポーツの世界では、少し前まで「そんなへっぴり腰じゃ、何をやってもダメだ」と怒鳴る監督やコーチがいたものだが、いまではそんな厳しい指導者も少なくなってしまった。子どもたちを壊れ物のように扱い、コーチのほうがへっぴり腰で指導している。

▼鼻薬

——賄賂と鼻の関係は？

はなぐすり

「鼻薬」というと、花粉症の時期を思いだす人も多いだろう。

いまや花粉症は日本人の国民病といえ、その時期には一〇〇〇万人単位の人が鼻薬を使うことになる。

花粉症は現代病であり、その原因は、戦後、大量の花粉を飛ばすアメリカスギが植林されたことが関係しているともいわれる。

戦前はもちろん、つい最近まで花粉症という病気は、ほとんど話題にのぼることもなかったのである。

しかし、昔の人も、ときどき鼻薬を使うことがあった。賄賂としてである。「鼻薬を嗅^かがせる」といえば、賄賂を渡すことを意味する。

ではなぜ、鼻の薬がそんな意味になったのだろうか。

もともと、子どもが鼻を鳴らして泣くとき、子どもをなだめるために与えた駄菓子のことを「鼻薬」と呼んだ。そこから、相手の気をひき、手なづけるための金銭、贈り物のことを鼻薬というようになったのだ。

▼鼻にかける

——これは、誰の「鼻」のこと？

「鼻にかける」という言葉は、日本で生まれたものではない。隣りの国、中国から、百年余り前に伝わったものである。

十九世紀初めまで世界的な大国だった中国が、アヘン戦争に敗れたのは一八四二年のこと。以後、中国には西洋人がドツと押し寄せ、戦争に勝った西洋人たちは、中国に対して不平等な通商条約を押しつけ、いろいろと無理難題を吹っかけ、尊大な態度で振る舞いはじめる。

そんななか、高慢な西洋人の振る舞いを我慢するしかない中国人の間では、「西洋人Ⅱ鼻の高い人Ⅱ高慢」というイメージが広がっていった。ここから、「鼻にかける」という言葉が生まれた。

じゅうりん

いわば、西欧列強に蹂躪された当時の中国での流行語だったわけだが、しだいに慣用句として定着し、日本へも伝わってきたのである。

▼喉仏

——どこがどう「仏」に見える？

のどぼとけ

男の子の喉 仏は、声変わりを終えたころ、グツと前に突きだしてくる。喉仏の医学上の名称は「甲状軟骨」。だが、骨がやわらかいのは子どもころだけで、年齢を重ねるとしだいに硬くなってくる。

これを「喉仏」というのは、その形が仏様が座っているように見えるからである。火葬場で故人の喉仏を拾った経験のある人は、よくわかりだろう。

ちなみに、西洋では、喉仏のことを「アダムのりんご」と呼ぶ。エデンの園で、アダムとイヴは、禁断の実のりんごを食べているところを神様に見つかってしまった。アダムはあわててりんごを呑み込んだが、それがのどにつかえて喉仏になったという。

一方、イヴが呑み込んだりんごは、のどを通ったものの、胸でつかえた。それが、二つに割れて豊かなバストになったそうだ。

▼骨抜き

——何の「骨」を抜くのか？

「骨抜き」という言葉を聞くと、政治家や官僚をイメージする人がいるかもしれない。新しい法律や制度をつくっても、肝心なこと、大切なことが抜け落ちてしまっていることが多い。つまり、骨抜きにされているのである。

この骨抜きという言葉、もともとは魚料理に由来する。

その昔、一種のパフォーマンスとして、座敷に料理人を呼び、客の前で包丁さばきを披露させることがあった。このとき、マナイタの上の魚から、あざやかに背骨を抜き去るところが、一つの見せ場だった。

そして、骨を抜かれると、新鮮な魚の身もだらりとする。そこから、肝心な内容や精神を抜き去って、うわべだけを取り繕うことを「骨抜き」というようになった。

たんのう

政治家たちは、法律や制度を骨抜きにし、そのうま味だけは堪能している（？）。

▼指切りげんまん

——じつは、こわい約束のことだった！

子どものころ、「指切りげんまん、ウソついたら、針一〇〇〇本飲ます」と歌いながら、約束をしたことがあるだろう。

子どもどうし、指切りしているのも無邪気な光景だが、もともと指切りをしたのは、江戸時代の遊女だった。惚れた男への真心の証として、ホントに小指の第二関節から先を切り落とし、それを桐の箱に入れて男へ渡したという。

いくら思い詰めた遊女たちでも、自分で自分の指は切れないので、他の人に切ってもらった。血止めの薬や包帯などを用意し、それから切ったというが、そのほとんどが気を失ったといわれる。

一方、「げんまん」は「拳万」と書き、約束を破ると拳固で万回も殴るという意味。指切りげんまんとは、もともとそういう重い約束を交わすときにつかう言葉だった。

▼あぐら

——もともと、どんな意味？

「あぐらをかく」「あぐらを組む」というときのあぐらは、江戸時代に生まれた言葉。

ただし、言葉はなくても、古代以来日本では、あぐらが正式な座り方だった。仏像もあぐらをかいているし、平安時代の貴族もあぐらをかいていた。むろん、武士の座り方もあぐらだった。膝をそろえる正座が正式の座り方となったのは、茶道の流行がきっかけである。もともと正座は、狭い茶室に多くの人が入るために考えだされた場所をとらない座り方。これが、茶道の隆りゆう盛せいとともに、座敷に座るときの作法になったのである。

江戸時代に生まれた「あぐら」という言葉は、あぐら「胡床」に由来する。胡床とは、もともと貴族が用いた腰かけのことだ。

床の上に長く座っていると、体が疲れてくる。そこで、貴族は体が楽なように、胡床に腰掛けた。また、江戸時代の庶民にとっても、あぐらは正座より楽な座り方。そこで、楽に座るという意味で、両足を組んだかっこうで座ることを「あぐら」と呼ぶようになった。

▼利口

——「口」とは、どんな関係？

「利口な子ども」といえば、学校の成績がよいだけの子どもとは、少しニュアンスがちがう。テストの点数がよいだけでは、「頭がよい」とはいえても、「利口」という形容はしっくりこな

い。

江戸時代の井原西鶴の作品には、賢い、利発という意味で、「利口」という言葉がつかわれている。いまでは、単に頭がいいだけではなく、聞き分けがいいとか、自分の立場や状況がよくわかっているときにもつかわれる。

りこん

「利口」の語源は、「利根」。利根とは、「賢い生まれつき」という意味で、この「りこん」が、変じて「りこう」になったと考えられている。もともと、「口」とは関係ないわけである。
くち

▼緊張してあがる

——何が「あがる」のか？

結婚披露宴のスピーチで、しどろもどろになる人がいる。

そういう人は、頭の中が真っ白になって、自分が何を話しているのか、わからなくなってしまふという。しばらくすれば、「あのときは、あがっちゃって」と笑い話になるが、そのときは背中に冷や汗がたらりと流れる。

じつは、そういうときは、まず頭に血が昇って、顔がほてるものだ。ところが、さらに緊張が

あが

嵩じると、逆に血の気は失せていく。

青白い顔になるわけで、こんな状態を、昔の人は気があがるとか、気がのぼせるといった。

たとえば、『源氏物語』の「賢木」には、さかき「御気けあがりて、なほ悩ましうせさせ給ふ（気がのぼせて苦しがつていらっしやる）」とある。

「気あがる」とは、「気持ちが高ぶる」「気持ちがのぼせる」という意味を表す。ここから、いまの意味の「あがる」という言葉が生まれた。

▼頭角

——どんな「角」のこと？

つの

頭の角といえ、深夜、ダンナの帰りを待つ奥さんを思いだす人も多いだろう。だが、「頭とう角かくを現す」というときの角は、奥方の頭に生える鬼のような角のことではない。

かんゆ りゆうしこうぼしめい

出典は、韓愈の『柳子厚墓誌銘』にある「見頭角」という言葉。「頭角を見す」という意味である。

あらわ

だが、この角が何を意味するかというと、単に「頭のとっぺん」を表すとか、角が立派な鹿が鹿の王になることを背景としているなど、さまざまな説があつて、はっきりしない。

ちなみに、頭角は「同期社員の中から頭角を現す」「若手投手陣の中で頭角を現す」など、人との比較で評価するときにつかう言葉。「一〇〇メートル競争で頭角を現す」といったつかい方は厳密には誤用である。

▼首っ丈

——どこから、どこまでの長さのこと？

異性にハンカチを贈ると、「さようなら」とか「もう別れましょう」という意味になることもある。そのハンカチで、別れの涙を拭くという意味が込められているからだ。

逆に、男性にネクタイ、女性にネックチーフをプレゼントすると、「愛している」の意味になる。こちらは「あなたに首っ丈」という意味だ。

すっかり惚れ込むことを「首っ丈」というが、首丈とは本来足から首までの丈という意味。ここから転じて、「首までどっぷりつかる」という意味になり、たいへん好きになった気持ちを表す言葉になった。

でも、この首っ丈という言葉、いまの若い人たちにはほとんどつかわれず、口語ではほとんど死語となりつつある。

▼黄色い声

——どんなところが黄色いのか？

女性の甲高い叫び声のことを「黄色い声」という。あの声を色にたとえると、「やっぱり、黄色だろうナ」と感じる人は、古代中国の高僧とうまが合うかもしれない。

黄色い声という言葉は、お経のメロディーに由来する。

お経が現在のような単調なものになったのは、平安末期からのこと。それまでは、お経にも豊かなメロディーがあって、音譜の代わりに文字の横に墨で印がつけられていた。なかには、さまざまな色を使って音の高低を示しているものもあったという。

そういう経典で、いちばん高い音を表していたのが、黄色だった。古代中国の高僧たちは、いちばん甲高い声を黄色とイメージしたのである。

ちなみに、もっとも低い音は「緋」^{あか}で、黄色と緋の間は細かく色分けされていた。

▼寝耳に水

——水をどうするのか？

日本の河川は、「世界標準」からすれば、一級河川クラスの川でも、相当な急流といえる。国土が狭く、山と海が迫っているため、場所によっては滝のような勢いで水が流れていく。そのぶ

ん、日本は昔から、水害の絶えることのない国であり、治山治水は人々の悲願だった。そういう地理的な背景をおさえておくと、この言葉の真意も理解しやすくなるだろう。

「寝耳に水」、この言葉の意味は、寝ているときに耳に水が流れこんでくることではない。昔は「寝耳に水が入る」といったが、入ってくるのは水そのものではなく、水の音である。出水、洪水、鉄砲水などの音が、耳に飛び込んでくることだ。

水害がいまとは比べものにならないくらい恐れられていた時代、寝ているときに出水の音を聞くことは、それは恐ろしいことだった。人々は、驚きおそれて、布団をはねのけたのである。

▼枕を高くする

——枕を高くして寝たのは、どんな人？

枕を高くして寝るとは、心配ごとがなく、安眠できる状態のこと。この言葉が初めて登場するのは、古代中国の歴史書『史記』（紀元前一世紀）である。強大な秦が、天下統一を果たす前、戦国時代の魏の人で縦横家の張儀が、魏王に秦との同盟を説いた場面にでてくる。

「秦にお仕えになれば、楚と韓に攻められる虞れはないでしょう。そうすれば、王は『枕を高くして臥し^ふ』、魏の国は何の心配ごとともなくなりましょう」

戦国時代は、いつ敵に襲われるかわからない時代。眠るときでも周囲に気を配り、いつでも戦う準備をしていなければならなかった。神経を研ぎすませようと思えば、高い枕を使って安眠することができない。

しかし、何の心配もなければ、枕を高くしてぐっすり眠ることができる。つまり、魏が秦と同盟を結べば、秦に攻められることもなく、魏王は「枕を高くして臥」すことができるというわけだ。

日本でも、南北朝の時代（十四世紀）の『太平記』に「枕を高し食を安ずる事を」という言い回しがでてくる。

▼頭隠して尻隠さず

——誰の頭、誰の尻？

英語には「act like an ostrich」という言葉がある。ダチョウ（ostrich）は、危険が迫ったとき、砂の中に首だけ突っ込んで危機を逃れたようなつもりになるという。そんな愚かなさまをいう言葉だ。

日本語にも、同じような意味で「頭隠して尻隠さず」という言葉がある。とかく悪事は露見しやすいもので、たとえ隠そうとしても、隠しおおせるのはほんの一部だけ、結局は隠しきれない

という意味だ。

この言葉の“主人公”は、やはり鳥の仲間。日本の国鳥のキジである。キジは、猟師や天敵が近づいてきたことに気づくと、草むらに頭をつっこんで隠れようとする。しかし、お尻は丸だしにしていることがあるという。たしかに、キジの尾は立派で長い。草むらに隠れても尾がみえるということはあるようだ。

キジは日本の国鳥だが、日本語の世界では、「キジも鳴かずば撃たれまい」を含めて、とにかくバカにされがちである。

【コラム】

「長丁場」 「正念場」 「土壇場」

——どんな「場所」のこと？

野球の試合時間は、高校野球で二時間、プロ野球で三時間が目安である。しかし、活発な打撃戦になったり、延長戦になれば、もっと長くなる。

そんなとき、「今日の試合は、長丁場になりそう」というが、もともと「丁場」とは、江戸時代、強制労働に駆りだされた人たちの受け持ち区域（持ち場）のことをいった。これが、宿場と宿場の間の距離を意味するようになり、その間の距離が長く、時間がかかることを「長丁場」というようになった。

また、野球の試合中にはピンチに立たされることがあるが、そういう場面を「正念場」という。この言葉、もとは歌舞伎や浄瑠璃で「性根場しょうねば」と呼ばれた。主人公のキャラクターの奥深いところまでじっくり表す見せ場のことで、この「性根場」が「正念場」に変化し、見せ場とか、ピンチの場面をいうようになった。

九回に同点に追いつき、逆転したりすると「土壇場の逆転」という。「土壇場」とは、ギリギリに追い詰められることだが、もとは土を盛った罪人の処刑地のことだった。

罪人は、そこへ横たわり、首を落とされた。そのときの追い詰められた状態から、「土壇場」という言葉が生まれた。昔の「土壇場」はまさしく絶体絶命のピンチのことだったのである。

第八章 食べ物言葉の謎を解く

▼タラバガニ

——「たらば」って何のこと？

カニの王様は「タラバガニ」といえば、山陰地方の人は「松葉ガニこそ王様」と反論するかもしれない。ただし、英語で「キングクラブ」と呼ばれるものは、両脚を伸ばしたときの長さがメートル以上にもなるタラバガニの仲間のことである。

では、このタラバガニ、なぜ「たらば」と名づけられたのか、ご存じだろうか。

「たらば」は、漢字では「鱈場」と書く。その理由は単純で、タラバガニは鱈の漁場で多く獲れるから、こう呼ばれるようになった。

現実に、タラバガニの漁場は、北海道以北の日本海と北太平洋で、鱈の漁場とほぼ重なっている。

▼たたみいなし

——「畳」との関係は？

世界広しといえども、日本にしかないのではないかと思われる食べ物が、いくつもある。その一つが、たたみいわしである。

日本酒を飲まない若い人には、「何？ それ」という人もいるだろうが、体長一センチぐらいの稚魚を集めて、海苔のように漉^すき、天日で干したもののことだ。

たたみいわしに使われているのは、カタクチイワシの稚魚。稚魚が縦横にくつついた様子が畳の目のようにも見えるので、こう呼ばれるようになった。江戸末期から登場する名前で、そのころから、広く食べられるようになったと考えられている。

このたたみいわし、火にあぶると黄色くなって、ますます畳に似てくる。日本酒の肴として
さかな
絶品である。

▼かやくご飯

——「かやく」って何のこと？

「お母ちゃん、今晚のご飯は、何？」

「かやくご飯よ」

「えっ、爆発したら、どないすんの？」

関西地方の平和な家庭なら、母子のあいだでこんな会話があるかもしれない。関西では炊き込みご飯のことを「かやくご飯」という。むろん、「火薬ご飯」と書くような物騒な料理ではなく、「加薬」と書く。加薬とは本来、漢方薬の効果を高めるため、補助的に加える薬のことをいう。

そこから、主役の米を引き立たせるために加えるゴボウやニンジン、コンニャク、うす揚げなどの具を加薬と呼ぶようになり、その料理のことを「加薬ご飯」と呼ぶようになった。ちなみに、料理の味を引き立たせる「薬味」も、加薬と同様、もとは漢方用語である。

▼牡蠣

——なぜ「牡」という字をつかう？

かき

「海のミルク」と呼ばれるほど栄養豊富な牡蠣だが、なぜか「牡」という字がつかわれている。もちろん、牡蠣にはメスもいるし、そもそも「蠣」という字だけでも「カキ」と読める。どういう事情で「牡」という字がついたのだろうか。

これは、昔の人が、牡蠣にはオスしかいないと勘違いしていたためである。精巢のことを白子と呼ぶように、昔は白い色にはオスというイメージがあった。そのため、身の白っぽい牡蠣は、

すべてオスと思われたのである。昔の人は、じっと岩にくっついていて牡蠣を見て、一生メスにめぐりあうことのない寂しい生き物だと思っていたという。

ただし、牡蠣しゅうの雌雄は、現代でも、顕微鏡で見ないとわからないほどわかりづらく、昔の人が誤解したのも無理はない。

▼もんじゃ焼き

——「もんじゃ」ってどういう意味？

東京・月島といえば、日本を代表する「もんじゃタウン」。数多くのもんじゃ焼きの店が軒を連ねている。

もんじゃ焼きは、いわば好み焼きの親戚で、水で溶いた小麦粉と具を、熱して油をひいた鉄板の上で焼いたもの。好み焼きほどは焼き固めず、水分の残っているうちに小さなヘラですくいとって食べる。

もんじ

「もんじゃ」という意味不明の言葉は、「文字」が変化したもの。昔の人は、水で溶いた小麦粉を鉄板で焼くとき、文字を書いて遊んだりした。そこから、「文字焼き」となり、それがなまってもんじゃ焼きとなった。

▼ かつお節

——「おかか」と呼ぶのは、なぜ？

おにぎりの具の定番に、「おかか」がある。ご存じのように、かつお節を甘辛く味つけしたものだ。ただし、おかかのおにぎりは好きでも、おかかという言葉の由来を知る人は少ないだろう。

おかかは、もともとはかつお節そのもののことで、江戸時代にはすでにそう呼ばれていた。その由来は、「おかきは」が変化したといわれる。

江戸時代、かつお節は、そのつど使う分だけ、料理をつくる女房たちが削ったものだった。削るときのコツは、一本のかつお節の端を引っ搔^かくようにすること。端を引っ搔くところから、「御搔き端」と呼ばれるようになり、それが変化して「おかか」と呼ばれるようになったと考えられている。

▼ おでん

——大阪では、なぜ「関東煮」と呼ばれる？

「関東煮」と書いて「かんとうだき」と読む。関西では、おでんのことをこうも呼んでいる。

江戸時代末期、おでんが江戸から伝わり、そう呼ぶようになったのだが、それには理由がある。

でんがく

もともと、おでんは田楽から発展した料理。田楽は、豆腐を横長の四角に切り、竹串に刺して焼いて味噌を塗ったものである。

この田楽は大坂にもあったが、江戸では田楽を発展させて、豆腐をだし汁で煮るようになり、やがて里芋やコンニャク、ハンペン、ガンモドキなどとも一緒に煮込むようになった。

この料理が、幕末に大坂にも伝わったわけだが、当時、大坂で田楽といえば、相変わらず豆腐を焼いて味噌をつける料理だった。そのためまったく新しい料理として「関東煮」と呼ぶようになったのである。

ちなみに、おでんという名前は、江戸で女性たちが田楽の「がく」を略し、「お」をつけてそう呼びはじめたことに由来している。だから、漢字で書くと、「お田」となる。

▼だしに使う

——「だし」とは、何のこと？

かわいい妹のいる友人宅へ、「お兄さん、いる？」といいながら、ひんぱんに訪ねる輩がい
やから
る。本当は、妹の顔を見るのが目的なのに、いかにも兄に会いにきたように装う。

こんなとき、兄を「だしに使う」というが、この場合の「だし」は、かつお出汁やコンブ出汁だしというときの「出汁」のことである。

インスタント出汁のなかった時代は、煮物をするにも味噌汁をつくるにも、きちんと出汁をとったものだ。出汁のうまみがでたところで、かつお節やコンブは、ご用ずみとなる。そこから、方便や口実に利用することを「出汁に使う」というようになった。

「親戚に不幸がありました」「子どもが病気をしまして」と、口実としてのだしには、身内が使われることが多いようである。

▼割り下

——どんなものの「下」？

いろいろな出身地の人たちが集まってすき焼きをすると、地方によっていぶんとつくり方が違うことに気づかされる。

たとえば、関西出身者は醤油や砂糖、酒などを順に加えていくが、関東出身者は醤油やみりんをつかった割り下をあらかじめ用意し、一気に味をつける。

関東で割り下が使われるようになったのは、一気に味つけしたほうが手早く食べられるからだろうだ。たしかに、割り下を使えば、手間がかからないし、調理しながら食べられる。割り下

は、せっかちな江戸っ子気質が生みだしたもののようである。

割り下は、もともと「割り下地」の略。これも、せっかちな江戸っ子が「割り下地なんて、舌がもつれそう」と、「割り下」と略したようだ。

▼ちり鍋

——「ちり」とは、どういう意味？

寒い夜には、ふぐちりやたらちりを囲んで、日本酒をキュツと一杯。そう考えるだけで、体のしん

芯からポツと温かくなってくる。だが、そんな楽しいひと時を過ごした後、ふと疑問に感じることはないだろうか。ふぐちり、たらちりと、なぜ魚の鍋には「ちり」がつくのか、と。

「ちり鍋」という言葉が生まれたのは、明治時代の文明開化のころ。日本に、多くの外国人がやってくるようになったときのことである。

いまでも、刺身を見て驚く外国人は少なくないが、当時、日本にやってきた外国人たちも、生の魚はまったく食べられなかった。そこで彼らは、刺身を熱湯にくぐらせ、ポン酢をつけて食べた。このとき、熱湯につけた魚の身がちりちりっと縮むのを見て、その料理を「ちり」と呼ぶようになったのである。

後に、魚の鍋料理のことを「ちり鍋」と総称するようになった。

▼おあいそ

——お勘定のことをいうわけは？

最近、外国人も居酒屋などで「オアイソ」とっている。それほど、「おあいそ」という言葉はポピュラーになっているが、この「おあいそ」、漢字で書くと「お愛想」である。

といって、この言葉、「代金を払うから、お愛想の一つも見せてくれ」というところから生まれたわけではない。もともとは、「愛想尽かし」の意味だったのだ。

昔は、なじみの店でツケをすべて清算するのは、店とのつきあいも清算することを意味した。つまり、おあいそとは「愛想が尽きた。もうこないよ」という意味を含んでいたのだ。

そのため、通の間では、支払いのとき、すべての代金を支払わず、一割ほどを残すのが粋とさ
いき
れていた。

▼漬け物

——なぜ「香の物」と呼ぶ？

漬け物には、独特のおいがある。若い人には、そのにおいが嫌いという人もいるが、その漬
こうもの
け物のことを、懷石料理などでは「香の物」と呼ぶ。

同じ漬け物でも、香の物と呼ばば上品な感じがするが、それもそのはずで、この言葉、もとは平安時代の貴族の遊びに由来する。

当時、貴族の間では、香を焚^たいて、その香りから香の名前をあてる遊びがはやっていた。その途中、疲れた鼻を休めるために使われたのが、漬け物だった。

当時の漬け物は、おいがさらに強烈で、食べると鼻に残った香のにおいの記憶を消し、嗅覚をリフレッシュすることができた。この香遊びで使われたため、「香の物」と呼ばれるようになったわけである。

▼煎餅

——どこからきた言葉？

せんべい

「煎餅」という言葉は、中国から伝わったとされている。

きつこう

一説によると、八〇四年、弘法大師が唐にわたって順宗帝に招かれたとき、亀甲形の煎餅が

かつこん

だされた。これがとてもおいしかったので、その製法を教えてもらい、帰国後、山城國小倉の里の和三郎に伝授したという。和三郎は、葛根と米粉に果実の糖液を混ぜて焼き、後に「亀の子煎餅」の名で売りだした。これが、日本での煎餅のルーツとされている。

江戸時代になると、小麦粉を砂糖などでこねてせいろで蒸し、平らに伸ばしてから丸く切って焼くという技術が生みだされ、現在の煎餅の形となった。日本に伝わってから、中身や製法はいぶん変わってきたというわけだ。

なお、「煎」という字には、焼いて水気をなくすという意味がある。「煎じ薬」の「煎じる」は、二義的な意味である。

▼土手鍋

——「土手」とはどんな関係？

鍋の縁に味噌を土手のように盛り上げて、牡蠣と豆腐を煮る「土手鍋」。だが、味噌を土手のように盛り上げるのは、後にその名前から考えられた手法。土手鍋という名前のほうが先にあったのである。

土手鍋の由来は、意外なところにある。広島で、牡蠣の養殖がはじまったのは、江戸時代の初めのことで、養殖業者は船で牡蠣を大坂まで運んで売った。そのとき、ただ売るだけでは能がないと、牡蠣を使った料理をつくって一緒に売った。そこで、いちばん人気となったのが牡蠣鍋だった。

この牡蠣鍋が川岸につないだ船で売られたので、大坂の人たちは「土手下の鍋」というようになった。これがやがて「土手鍋」と呼ばれるようになったのである。

当初、味噌は、鍋の縁ではなく、底に薄く塗られていた。

▼割れ鍋にとじぶた

——「とじぶた」って何のこと？

江戸いろはガルタに、「割れ鍋にとじぶた」がある。欠点があるところ、程度が低いところで釣りあっている仲、似た者どうしのことをいうのだが、そもそも「とじぶた」とは、どのようなふたのことかご存じだろうか。

とじぶたといっても、「閉じるふた」という意味ではない。第一、ふつうの閉じぶたでは、割れた鍋とは釣りあいがとれない。

とじぶたは、「綴じ蓋」と書く。綴じるには「つなぎあわせる」の他に、「繕う」「修繕する」という意味がある。つまり、とじぶたとは、壊れたところをつなぎあわせるなど、修理したふたのこと。そんなふただからこそ、割れ鍋と釣りあいがとれるわけだ。

▼あがり

——なぜ、お茶のことをこう呼ぶ？

寿司屋でお茶を頼むと、板前さんが「あがり、一丁！」と威勢よく叫ぶ。いまは寿司屋の言葉である「あがり」は、もともとは遊廓でつかわれていた廓言葉の一つだった。

遊廓では、客が部屋へ上がると、すぐにお茶をだした。上がった端からだすので、このお茶のことは「上がり花」と呼ばれた。お茶という言葉は「お茶をひく」こと、遊女に客がつかない意味に通じるため、敬遠されたのである。

この「上がり花」を略して、やがてお茶は「あがり」と呼ばれるようになった。これが、遊廓の囲いをでて、寿司屋をはじめ、飲食店でつかわれるようになったのである。

遊廓は、一五八九年（天正十七）、豊臣秀吉が京都・二条柳町に遊里を許可してから、一九五八年（昭和三十三年）、赤線が廃止されるまで三百七十年もつづいた。

おいらん

「あがり」の他にも、「おてもと（箸）」「やりて（客と花魁の間を取り持つ年輩女性）」「ひけ（花魁の終業時刻）」など、たくさんの廓言葉が日本語の中に受け継がれている。

▼飛龍頭

——「龍」とは似ても似つかない形だが？

中国では、外来語もすべて漢字で表記する。「コンピューター」は「電腦」、「コカコーラ」は「可口樂」と書く。漢字の国、中国では、外来語は「電腦」のように意味を漢字に直すか、「可口樂」のように発音に合わせて漢字をあてるわけだ。

それに対して、日本では基本的に外来語はカタカナで表記する。ところが、なかには発音に合わせて漢字をあてた言葉もある。豆腐料理の「飛龍頭」も、その一つだ。

ひりょうず

飛龍頭は、すった豆腐にゴボウ、きくらげ、麻の実などを入れて混ぜ、油で揚げたものことだ。

しかし、その形はどう見ても「飛ぶ龍の頭」には見えない。

江戸初期、ポルトガル語の「Fihos」の読みに、漢字をあててこう表記するようになった言葉だ。

いっしゅるいにちよう

ただし、一六八九年（元禄二）の『合類日用料理指南抄』によると、飛龍頭とは、麦または米の粉を湯で練り、油で揚げて砂糖液に浸したものとある。もともとは、お菓子の名前だったようである。

▼からすみ

——ぼらの卵をこう呼ぶのは？

「からすみ」は、ぼらの卵を陰干したもので、小判形をした乾燥食品。これを薄く切って酒の肴にすると、日本酒の味をさらに引き立ててくれる。

昔は、長崎県の五島列島地方の名産品だったが、いまでは台湾産やオーストラリア産が中心で、数も少なく、珍味中の珍味となっている。

この珍味が「からすみ」と呼ばれるようになったのは、その細長い小判形が「唐墨」の形に似ていたからである。唐墨は、清少納言も『枕草子』の中でほめているもので、古くから中国より輸入される高級品の墨のことだ。

▼風呂吹き大根

——「風呂」と「大根」の関係は？

大根をやわらかくゆで、練りみそをつけて食べる料理を「風呂吹き大根」という。冬に熱々を食べるとおいしいが、この料理、「風呂」とはどんな関係があるのだろうか。

うそなるべし

『嘘南留別志』（一八三四年）という書物には、漆器をつくる職人の家の風呂との関係がでている。

漆器職人が、冬になると漆器の乾きが悪くなって困っていたところ、ある僧から、大根のゆで汁を風呂（乾燥室）に吹き込むといいと教えられた。さっそく試してみると、大変な効き目があ

り、以来ゆで汁をとった後の大根を近所に配るようになった。

近所の人たちは、もらった大根にみそをつけて食べ、それが大変おいしかったので、以来、「風呂吹き大根」と呼ぶようになったという。

ただし、このエピソードを紹介する本の題名が、なにしろ『うそなるべし』なので、もう一つの説も紹介しておこう。昔の風呂は蒸し風呂が多く、垢を落とすため、体に息を吹きかけながらこすった。江戸時代には、息を吹きかけながら、垢を落とす役目の人も風呂場にいた。

この人たちの様子が、熱い大根をふうふう吹きながら食べるのに似ているため、「風呂吹き」と呼ぶようになったという説もある。

▼メロンパン

——どが「メロン」に似ている？

最近のメロンパンには、マスクメロンの果汁を使い、本物のメロンの香りと味を楽しめるものまで登場している。たとえば、東京・新宿の高野本店で売られる「クリーミーメロンパン」は、パン生地やカスタードクリームにも、マスクメロンの果汁が加えられていて大人気、一日三回の焼き上がり時間には行列ができる。

メロンパンは、大正時代には売りだされていたといい、いまも根強い人気を誇っているが、この名前の由来ははっきりしない。

パン業界では、生地的配合された「メレンゲ」が変化して、メロンになったという説もあれば、皮のひび割れがマスクメロンに似ていたからという説。さらに、マスクメロン人気にあやからうと、わざとひび割れにして、メロンパンを名乗ったのではないかという見方もある。

その昔、神戸では、このパンが「サンライズ」という名で呼ばれていたこともあり、当時神戸では、白あん入りのまったく別のパンが、メロンパンと呼ばれていた。全国的に、メロンパンという名に統一した功労者が誰なのかも、よくわからない。

▼フォアグラ

——もともと、どういう意味？

トリフ、キャビアと並ぶ世界三大珍味といわれるフォアグラ。しかし、最近では、小中学生でも「食べたけど、あまりおいしくなかった」といったりする。そんな子どもを見かけると、生意気に思う人も多いだろうが、フォアグラの本当の意味を知ると、子どもたちの感想のほう为正しいと、冷静になれるかもしれない。

フランス語で、フォアは「肝臓」のことで、グラは「太った」。つまり、「太った肝臓」という意味になる。

ろうと

フォアグラのつくり方は、ガチョウを狭く暗い部屋に閉じ込め、漏斗で無理やりトウモロコシを食べさせる。すると、運動不足と栄養過多が重なって、ガチョウの肝臓が肥大する。

人間にたとえれば、「脂肪肝」という病気におかされた肝臓が、フォアグラという高級食材なのである。こんな奇怪な食材をありがたがるほうがどうかしているのかもしれない。

▼パスタ

——スパゲティとの違いは？

パスタとスパゲティは、どう違うのか？

日本人には区別がつかない人も多いだろうが、基本的にパスタとは小麦粉を原料とした麺類の総称と覚えておけばいい。スパゲティだけでなく、マカロニ、ペンネなどもまとめて「パスタ」と呼ぶ。

現在のイタリアには、じつに数百種類のパスタがあり、たとえば、チョウチョウの形をした「ファルファツラ」、貝の形をした「コンキリエ」、車輪のような「ルオーテ」などもある。

ここからもわかるように、パスタとはもともとは単に「練った粉」という意味で、英語でいえば「ペイスト」にあたる。

なお、スパゲティの語源は、イタリア語でヒモを意味する「spago（スパゴ）」。「ヒモのように長いから「spagheto（スパゲット）」と呼ばれるようになり、それが複数化して「spaghetti（スパゲティ）」となった。

▼ウスターソース

——「ウスター」って何のこと？

大衆食堂で、ソースといえば「ウスターソース」のことだ。フライなどに、ウスターソースをかけて食べるのが好きという人は少なくない。

このウスターソースが日本で初めて発売されたのは、一八八五年（明治十八）のこと。ヤマサ醤油が「新しい形の醤油」として世にだした。

名前の由来は、イギリス中部のウスター州という地名にある。

はまぐちぎへえ

当時、ヤマサ醤油の社長だった浜口儀兵衛が、その地に立ち寄ったときに気に入って持ち帰った。ただし、ウスター州では、直接料理にかけることはせず、煮込み料理に加えるなど、スパイス感覚で使われている。

さらに、ルーツをさかのぼると、インドのベンガル州の総督だったサンディーズ卿が、ヒンズー料理のソースに魅せられて、その製法をイギリスに持ち帰った。そして、リーとペリンズとい

う二人の化学者に製造を依頼、のちに売りだしたところ、大評判になったものである。
リー&ペリンス社製のソースのラベルには、「ウスター州の貴族による製法」と記されている。

▼ケチャップ

——もともとは、どこの国の言葉？

ケチャップという言葉が英語だと思っている人は少なくないだろう。たしかに、日本に入ってきたのは、英語の「ケチャップ」なのだが、さらにさかのぼると、もともとは中国語だったといわれる。

この中国語説には、二通りの話がある。

一つは、中国で、塩漬けにした魚の汁を料理に使い、「コエチアプ」と呼んでいた。これが、マレー半島に伝わって「ケチャップ」と呼ばれるようになり、それがイギリスへ伝わったという説。

もう一つは、中国で「ケチャップ」と呼ばれていた香辛料入りのマッシュルーム・ソースを、十八世紀にオランダ人が中国から輸入した。これが、ヨーロッパに広まったという説である。
アメリカや日本では、ケチャップといえば、トマト・ケチャップを指すが、イギリスでは、いまもマッシュルーム・ケチャップが代表的である。

▼カレー

——もともとは、どういう意味？

カレーは、誰もが知っているようにインドの料理。インドでは、カレーライスだけでなく、種々の香辛料で味付けした食べ物全般を意味し、その語源はタミール語でソースを表す「カリ」である。

ところが、このカレーという言葉、インドから直接日本へ伝わってきたわけではない。

かつて、インドがイギリスの植民地だったころ、イギリス軍の兵隊がたくさん香辛料と、それらを使った料理法を本国へ持ち帰った。そこに、さまざまなアレンジが加わって、インド風の西洋料理がヨーロッパ全体へ広がっていった。

カレーが日本へ伝わったのは、明治初期、文明開化の時代のこと、イギリスから西洋料理として入ってきた。最初は、「カリ」と呼ばれていたが、やがて「カレー」に変化した。いまでも、こだわりのもつカレー店では、東京・新宿の中村屋の「カリライス」のように「カリ」と表記するところがある。

▼マヨネーズ

——語源は地名か、人名か？

マヨネーズという言葉が、ヨーロッパ生まれであることはたしかなようである。しかし、その語源となると、地名説、人名説など、諸説入り乱れてはつきりしない。

たとえば、スペイン領マヨルカ島の港マオンの女性名詞は、マヨネーズになり、これが語源という説がある。この島の特産品は鶏卵で、さらにオリーブ油も採れる。たしかに、マヨネーズの生産にはピッタリの土地であり、この地にフランス軍が進駐したとき、考案されたとも伝えられている。

ただし、他にも、マイネ公爵という人名に由来するという説もあれば、中世フランス語の卵黄を意味する「モワイエ」が変化したものという説、さらに、単にフランス語でかき混ぜるという意味の「マニエ」が語源という説もある。

▼佃煮

——「つくだ」って何のこと？

江戸・東京は、十七世紀以来、日本最大の都市であり、全国から多くの人が集まってきた結果、日本中の名産がミックスされて、いろいろな食べ物が生まれることになった。そのため、よく食べている食品の名前には、江戸の地名がかなりの影響を与えている。

たとえば、今川焼きは、神田の今川橋周辺でつくられはじめたからこの名前がある。小松菜は、現在の江戸川区小松川付近でよくつくられていたので、この名前になり、ご存じ浅草海苔は、江戸時代には隅田川河口の浅草周辺で養殖されていたため、この名前がついた。

「佃煮」も、その仲間のひとつである。隅田川の河口にある小さな島、佃島の名産だったため、この名前がついたのだ。三河から江戸に移ってきた徳川家康は、摂津国佃村の漁師たちを江戸に移住させ、いまでいう東京湾の漁業権を与えた。この佃村の住人が移り住んだため、その小島は佃島という名前になった。

佃島の人々が雑魚などを醤油やみりんで煮込んだ保存食が、「佃煮」という名前になったのである。

【コラム】

「土左衛門」「元の木阿弥」「助平」

——どんな人の名前？

どざえもん

「土左衛門があがったぞ」

江戸時代には、そう叫びながら、街中を走り回る者がいた。土左衛門とは水死体のことをいうが、この言葉、享保のころ（一七一六～三六年）に実在した成瀬川土左衛門という力士の名前に由来する。

水死体は、女性を上、男性は下を向いて浮き上がるといわれるが、いずれも水ぶくれする。それが、大変な肥満体だった力士の土左衛門に似ているということで、水死体のことをこう呼ぶようになった。

もくあみ

つついじゅんしょう

「元の木阿弥」の「木阿弥」も、実在の人物とされている。戦国時代、筒井順昭という武将がいて、彼が病死したとき、遺言によってその死を隠し、僧の木阿弥が「影武者」となった。

じゅんけい

木阿弥の声が、順昭にとっても似ていたからという。そして、順昭の子の順慶が成長すると、木阿弥はその任を解かれ、元の僧に戻ったという。これが、「元の木阿弥」の語源という。

だが、同じように人名に近い言葉でも、「助平」は実在の人物ではない。「助平」は、江戸時代の初期、色を好むヤツという意味で、すきべい「好兵衛」と呼ばれるようになり、やがて「助兵衛」になったといわれる。

関西で生まれた言葉で、関西で活躍した近松門左衛門の作品にも「助兵衛」が登場してくる。

第九章 「カタカナ言葉」のルーツを探る

▼ヤッホー

——どこからきた言葉？

「あなた」と呼べば、かならず「あなた」と答えてくるのが、山びこ。結婚して一年もたてば、奥さんをかまわなくなる夫と違って、山びこはいつも裏切ることがない。

しかし、いくらアツアツの新婚カップルでも、山頂で「あくなくたく」と叫ぶには、かなりの勇気がいるだろう。山頂では、やはり定番の「ヤッホー」にしておきたい。

この「ヤッホー」という言葉、もとはドイツ語である。「Johee」とつづり、発音は「ヨッホー」に近い。近代登山がはじまったころ、ヨーロッパ・アルプスに登った人たちがつかいはじめたといわれる。

しかし、日本人にとっては、「ヨ」よりも、大きく口を開けて「ヤ」と叫ぶほうが気持ちいい。そこで、日本では、しだいに「ヨ」が「ヤ」に変わり、「ヤッホー」となったようである。

▼アーメン

——意味はあるのか？

キリスト教では、祈りや賛美歌の終わりに「アーメン」と唱える。

もともとはヘブライ語で、「まことに」「たしかに」という意味。祈りの後、「まことにそのようでありますように」という意味でつかわれるようになった。

「主よ、この私の罪をお許してください」とお祈りした後で、「アーメン（まことにそうでありますように）」というわけである。

キリスト教が世界中に布教されたとき、このアーメンという言葉は、翻訳しないでそのままつかわれることになった。そういう事情もあって、とくに意味のない言葉と思っている日本人は少なくないようだ。

▼マフィア

——もともとは、どういう意味？

マフィアという言葉は、もともとは暗黒組織とまったく関係のない、戦う市民たちの合言葉だった。

一八八二年三月、イタリアのシシリー島で、フランス兵の暴行事件に対する抗議行動が起きた。そのときの合言葉が、「Morte alla Francia, Italia anelai」（フランス人を殺せ。これぞ、イ

タリアの叫びだ)だった。この言葉の各単語の頭文字を並べると、「Mafia」になる。

この略称が、後にシシリー島で生まれたギャング組織の名前としてつかわれるようになった。さらに、禁酒法時代の一九二〇年代以降、アメリカでイタリア系の組織が暗黒街を牛耳るようになり、この言葉は世界的に知られるようになったのである。

最初に、シシリー島でフランス兵に抗議した人々が、現在の「マフィア」の意味を知れば絶句するに違いない。

▼ボーナス

——どこからきた言葉？

ボーナスという言葉を聞くと、思わずニコツとする人もいるだろう。日本語では「賞与」を意味するが、英語では少し違って特別配当金、割戻金という意味でつかわれている。

イギリスでは、十八世紀ごろ、このボーナスという言葉がつかわれはじめた。もともとはラテン語の「bonus」に由来し、英語の「good」にあたる言葉だった。十八世紀の人にとっても、特別配当金はともうれしいことであり、こう呼ばれるようになったようだ。

ちなみに、日本の賞与の起源は、江戸時代の徒弟制度にあるといえるかもしれない。住み込みで修業しながら働く弟子たちは、お盆と暮れ、主人からお仕着せと小づかいをもらって、故郷へ帰った。

このときの小づかいが、日本版のボーナスのはじまりといえなくもない。

▼ラブホテル

——いつ、どこでつかわれはじめた？

「ラブホ」といえば、ラブホテルのこと。言葉を略するのが好きな若い人たちの間では、そう呼ばれている。

もともと、連れ込み旅館、アベック旅館、同伴旅館などと呼ばれていた宿泊施設が、ラブホテルと呼ばれるようになったのは、一九六〇年（昭和三十五）ごろのことである。

その二年前、売春防止法で赤線が廃止になり、転廃業を迫られた遊廓の経営者が、つぎつぎと連れ込み旅館の経営に乗りだした。ところが、「連れ込み」という言葉には、女性が男性に無理やり連れ込まれるというイメージがあり、女性たちから嫌われた。

やがて、その外観も室内の雰囲気も、旅館というよりホテル式のもが増え、女性誌によって「ラブホテル」という言葉が造語され、まず大阪でよくつかわれるようになって全国に広がっていった。

なお、ラブホテルがどんどん建てられたのは、経済的には豊かになってきたが、狭い家に不満がはじめた昭和四十年代のことである。

▼フリーマーケット

——「自由な市場」のことではない

日曜日の公園では、参加者が不要になったものなどをもち寄って、売買したりするフリーマーケットをあちこちで見かける。東京の都心でも、お台場、神宮球場の近くの公園、青山劇場の近くなど、いろいろなところで開かれている。

そんなフリーマーケット会場には、「Free Market」と書かれた看板がでていることがある。だが、「Free Market」は「自由市場」という意味の経済用語であり、日本でいうフリーマーケットのことにはならない。

参加者が品物を持ち寄って売る市場のことは、英語では「Flea Market」と書く。カタカナで書けば、ともに「フリーマーケット」だが、「Flea Market」を古い日本の言葉に直せば「ノミの市」。日曜日に公園で開かれるフリーマーケットは、こちらのほうである。

ちなみに、「Flea Market」は、米語では日本と同じフリーマーケットの意味、英語では古物を扱う「ノミの市」の意味でつかわれている。

▼ヤンキー

——なぜ、ツッパリのことをそう呼ぶようになった？

もともと、「ヤンキー」という言葉はアメリカ人を指す言葉で、アメリカ人に向かって「ヤンキー、ゴー、ホーム」というようにつかった。さらにさかのぼれば、南北戦争当時には、北軍の兵士、北部諸州人のことを意味した。

このヤンキーが不良っぽい若者の意味でつかわれたのは、大阪である。一九七〇年代から八〇年代にかけて、難波の「アメリカ村」と呼ばれる地域で買った派手なアロハや太いズボンをはいて、繁華街をウロウロする若者のことをそう呼ぶようになった。

やがて、ツッパリ少年全般のことを「ヤンキー」と呼ぶようになり、この言葉が西日本を中心に広がっていった。

ただし、アメリカ村で買い物をする若者を「ヤンキー」と呼ぶようになった理由は、彼らのファッションが外国人のようだったからではなく、関西弁の語尾につく「〜やんけ」を彼らが連発したため、「やんけ」から「ヤンキー」になったという説もある。

▼ナンパする

——外来語か、日本語か

「ナンパする」というときの「ナンパ」。カタカナで書かれることが多いため、最近の若者には外来語だと思っている人もいるかもしれない。当然そんな若者は、「硬派」という言葉も知らないだろう。

念のためだが、ナンパは漢字で「軟派」と書く。もともと、腕力が強くて、男らしい態度をとる硬派に対して、軟弱でポリシーのない態度の人を軟派といった。

そこから、軟派にありがちなことという意味で、軽薄な気持ちで異性を誘惑する行為を「ナンパする」というようになったのである。

▼バッテリーが上がる

——電圧が下がることをいうが？

長い間、クルマに乗らずに放っておくと、バッテリーが上がることがある。いざドライブに行こうとして、「バッテリーが上がってる！」とあわてた人もいるだろうが、この表現、考えてみれば少々奇妙である。

電圧が下がり、電圧計の針が上がらなくなる状態なのに、なぜ「バッテリーが上がる」というのだろうか。

じつは、「上がる」には、上へ行くという意味の他に、どんどん上がって最後まで行き着いてしまい、「ものごとが終わりになる」という意味がある。

たとえば、仕事を終わるときにも「上がる」という言葉をつかう。バッテリーが上がるという場合も、バッテリーが終わるという意味でつかわれている。

▼フロッピーディスク

——「フロッピー」ってどういう意味？

フロッピーディスクは、デジタルデータを記録しておくための道具。その意味を直訳すれば、「薄っぺらの円盤」となる。

フロッピーとは、パタパタ動く状態を指している言葉で、スカートが風にたなびくようなときにつかう。フロッピーディスクは合成樹脂におおわれているが、その中身は風にたなびくような薄っぺらな磁性体である。

一方、ディスクはラテン語の「discus」が語源で、薄くて平らな円形物のことをいう。ふだん目にするフロッピーディスクの外見は四角いが、中身の磁性体は丸い形をしている。

ちなみに、IBMでは、フロッピーディスクと呼ばず、小さなディスクという意味で「diskette」と呼んでいる。五インチのフロッピーディスクが登場したときに、その前のインチのものに比べるとずいぶん小さかったので、この名がつけられた。

▼ファクシミリ

——もとは、どういう意味？

ファクシミリを略して、ファックスと呼ぶ。しかし、この発音、外国では気をつけないと、なんだ恥をかく。「fax」の「a」は、日本人には発音しにくいアとエの中間音。「ア」を強く発音すると、日本でいうところの「下品な四文字言葉」となってしまう。

さて、このファクシミリの語源は、ラテン語の「fac simile」である。意味は「同じようにしろ」。受信者が送信者と同じものを手にするところから、こう呼ばれるようになった。

ちなみに、現在のファクシミリは、一九五五年、ニューヨーク・タイムズ社が実験に成功し、その四年後、朝日新聞社が東京―札幌間を結んで、世界で初めて実用化に成功した。

一時期、急速に家庭に普及したが、いまやEメールに取って代わられ、家庭やオフィスで「ストラ」の対象になりはじめている。

▼ゴルフ

——やっぱり、スコットランドの言葉なのか？

ゴルフは、もともとスコットランドではじまったスポーツ。一四〇〇年代半ばには、すでにゴルフという言葉がつかわれていたというが、その由来については二つの説がある。

一つは、スコットランドの言葉が元になっているという説。スコットランドでは、昔から杖で小石を打って飛ばす遊びがあった。牧場の羊飼いたちの時間つぶしだったのだが、この遊びをス

コットランドの古語で「gowf」と呼んだ。この遊びが現在のゴルフへと進化し、「golf」となったという説である。

もう一つは、オランダの言葉に由来するという説。オランダには、昔からいまのアイスホッケーに似たようなゲームがあつて、「kolf」と呼ばれていた。これが、スコットランドへ伝わつて、遊び方、名前が現在のゴルフに変わったという説である。

どちらの説が正しいかは、本家のスコットランドでもはっきりしていない。

▼ダフる

——「ダフ」って何のこと？

ゴルフでつかわれる言葉に「ダフる」がある。「ああ、ダフった！」というように、ボールの手前を叩き、ジャストミートしなかったときにつかう。

この「ダフる」は、英語の「ダッファー（duffer）」からきている。ただし、「ダッファー」とは本来下手クソな人という意味。もっと広い意味で「ヘタな人」全般を表す言葉なのだが、日本ではボールの手前を叩いたときにかぎって、この言葉がつかわれるようになった。

▼スキューバダイビング

——「スキューバ」とは、何のこと？

スキューバダイビングにハマる人が増えている。海中の美しさを知ってやみつきになり、何十万円もする自前の潜水具をそろえる人も少なくない。

ところが、それほどハマった人でも、「スキューバ」という意味を正確に知る人は少ないかもしれない。この言葉、小さな英語の辞書には掲載されていないこともあるくらいだ。

じつは、「スキューバ」は一つの単語ではなく、ある言葉の頭文字をとった略語。「Self-contained Underwater Breathing Apparatus」の略で、意味は「自給気式潜水具」である。

昔は、ダイバーに対して、船から長い管を通して空気を送りつづけていた。それが、酸素ボンベを背負って海中を自由に動き回れるようになったとき、この長い名称がつけられた。その頭文字をつないで、スキューバと呼ぶようになったのである。

▼バサロ泳法

——「バサロ」って何のこと？

「バサロ泳法」と聞いて、背泳ぎの鈴木大地選手を思いだす人は、すでにおじさん、お婆さんの仲間だろう。鈴木選手が、男子一〇〇メートル背泳ぎで金メダルを獲得したのは、一九八八年のソウル五輪のことだった。若い人に「バサロ泳法」といえば、むしろ九六年のアトランタ五輪に出場した青山綾里選手を思いだすだろう。

このバサロ泳法を考えたのは、アメリカの個人メドレーの選手。その選手の名前が「バサロ」だったところから、こう呼ばれるようになった。要するに、体操の技のように、選手の名前がついたわけである。

もともと、水泳では、両手で水をかいて進むというのが常識。ところが、バサロ泳法は、仰向けで潜水して両手を伸ばし、両足もピンとそろえたまま、体をクネクネさせて進む。この常識破りの泳ぎ方には、世界中のスイマーが度肝を抜かれた。

もっとも、この泳法を素人がマネしても、鼻に水が入って苦しいだけ。鈴木選手は、それを防ぐため、唇を突きだして鼻の穴を押さえていたという。これだけでも、素人には難しい泳法だ。

▼トトカルチョ

——もともと、どんな意味？

いよいよリーグでも、サッカーくじがスタートした。

日本では、ご存じのように「トト」と呼ばれるが、この名は本家イタリアのサッカーくじに由来している。

イタリアでは、第二次世界大戦終了直後の一九四六年、戦後復興とローマ五輪の財源確保を目的にサッカーくじが導入された。

そのときに名づけられた名称が、現在まで残る「トトカルチョ」である。

イタリア語で、「トト」はボールまたは賭け事、「カルチョ」は足を意味する。日本では、これが「トト」と略された。ちなみに、ギャンブルの本場イギリスでは、サッカーくじのことを「サッカープール」と呼んでいる。

▼フリーガン

——もともと、どの言葉？

韓国と日本で共同開催される二〇〇二年ワールドカップの観戦チケットの申し込み受け付けが、開幕の一年以上前からスタートした。各地域の代表国も決まっていなかった段階で、チケットを申し込まなければならない理由の一つに、フリーガン対策がある。

フリーガンとは、過激なサッカーファンのこと。スタジアムの内外で暴れ回り、物をこわすばかりか、殺人事件まで起こしたりもする。

W杯のチケットの申し込み、名前や住所、生年月日などの登録が必要なのは、まるで暴徒のような悪質なサッカーファンを締めだすためでもある。

このフリーガン、二〇〇二年には日本にやってくるだろうが、もともとフリーガンという呼び方は、イギリスで暴れていたサッカーファンに対するもの。その由来ははっきりしていない。

一説に、十九世紀に出没した不良少年グループの中に、フリーガンという姓の一家がいたからともいわれている。また、ロシア語で不良少年のことをフリーガンと呼び、これと関連があるの

ではないかという説もある。

▼K点

——スキー・ジャンプ競技のこの「K」の意味は？

「伸びていきます。伸びていきます。K点を大きく超えてきました」——スキーのジャンプ競技のテレビ中継では、アナウンサーがこんな実況をする。

着陸斜面には「これ以上は危険」という意味の赤線が引いてあり、このポイントを「K点」と呼ぶ。日本人には、「危険ライン」だから、その頭文字をとって「K点」と呼ぶ、と思っている人もいるだろう。

しかし、船木和喜選手や原田雅彦選手ら、世界のトップジャンパーがいるからといって、日本語がスキー種目の公式用語に採用されるはずもない。

K点とは、ドイツ語で極限点を意味する「Kritisch Punkt（クリーティッシュ・プンクト）」の略。英語では「Kポイント」と呼ばれている。

▼マイアミ

——この名前になった理由は？

アメリカの北部と南部では、気候がずいぶん違う。

以前、メジャーリーグのワールドシリーズが、インディアンズとマーリンズの間で争われたとき、インディアンズの本拠地であるオハイオ州クリーブランドでは雪がちらついていたのに、マーリンズの本拠地フロリダ州マイアミは、十一月になっても半袖で平気だった。

そんな温暖な気候のため、マイアミには冬の間、多くのアメリカ人が避寒にやってくる。

このマイアミという地名の由来には、こんなエピソードが残されている。その昔、マイアミ近くに、先住民の首長がいた。娘と二人で歩いていると、向こうから息を飲むほど美しい女性がやってきた。首長が思わず「なんと美しい人だ」と嘆息すると、「どれどれ」と娘もその女性を見た。そのとき、娘が発した言葉が、「Myi am I」。

これを日本語に訳すと、「まあ！ ホントに」だが、この「Myi am I」が変化して「マイアミ」という地名になったという。

この説の他にも、先住民の言葉である「maira（広大）mi（である）」に由来するという説もある。

▼マドンナ

——あこがれの女性をこう呼ぶのは？

「マドンナ」と聞けば、八〇年代に活躍したアメリカの女性ロック歌手を思い浮かべる人が多いだろう。だが、彼女もすでに四十代。かつてのように、世界の男性が憧れる存在ではなくなった。

「マドンナ」は、一般に憧れの女性という意味でつかわれる。夏目漱石の『坊っちゃん』にも、
べっぴん
「あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし」と、マドンナが登場する。

最近だと、美しい予備校の先生が浪人生のマドンナ。人気の美人ニュースキャスターが、政財界のマドンナ。そういえば、選挙に多くの女性が立候補したときには、「マドンナ作戦」と呼ばれたものだ。

もともと、マドンナとは、イタリア語で神の母を指す。つまり、キリストの母マリアのことである。

ふつうは、ラファエロの『システイナのマドンナ』のように、若いキリストを抱いた姿で絵や彫刻になったものが、マドンナと呼ばれている。

▼サランラップ

——ミセス・サラとアンの大発見！

台所用品として欠かせないものの一つに、サララップがある。食べ物をクルクルッと包んでおけば、それだけで鮮度が保たれる。

しかし、それだけ馴染みの台所用品でも、そのネーミングが、サラとアンという二人の奥さんの名前に由来するとは、多くの人は知らないだろう。

もともと、ラップフィルムを開発したのは、アメリカの二人の技術者。第二次世界大戦中、銃や弾薬を湿気から守るために使われていたが、戦争が終わって需要が激減し、二人の技術者は別の使い道を模索することになった。

ある日、二人の技術者は、お互いの奥さんを連れてピクニックにでかけた。そこで、お昼に持参したバスケットからレタスを取りだすと、そのレタスがラップフィルムに包まれている。そのレタスは見事なまでにみずみずしさを保ったままだった。

「これは、食品保存用に使える！」——そう確信して、新しい台所用品を開発した二人の技術者は、奥さんたちのアイデアに敬意を表して、商品名を「サララップ」と名づけた。

「サラとアンのラップ」という意味をこめてである。

▼サルモネラ菌

——「サルモネラ」って、どういう意味？

食中毒の原因として、よく知られるサルモネラ菌。この名前は、発見者にちなんでいる。

十九世紀、アメリカの獣医学者に、ダニエル・E・サモンという人がいた。彼は一八八二年、この菌を発見した。この菌に感染すると、下痢、嘔吐を起こし、急性腸炎になることをつきとめたのだ。
おうと

その功績に敬意をはらって、この菌は「サルモネラ菌」と呼ばれるようになったのである。ただし、サルモネラ菌は、みんなの嫌われモノ。後世に名を残すのは名誉なことだが、こんなケースでは本人の気持ちはどうなのだろうか。

▼マグニチュード

——もともとは、どこの言葉？

地震が起こると、震度とともに、マグニチュードが発表される。関東大震災のマグニチュードが七・九、阪神大震災が七・二だった。

震度がその地点での揺れの大きさを表すのに対して、マグニチュードは地震そのものの大きさを表す。

電球でたとえると、マグニチュードは電球そのものの明るさであり、震度は電球から離れたある地点の明るさということもできる。マグニチュードが大きく、震源が近いほど、震度は大きくなる。

マグニチュードは、英語で「大きさ、多量」といった意味をもつ言葉で、一九三〇年代、アメリカの地震学者であるチャールス・リヒターが用いはじめた。彼が、震央から一〇〇キロメートル地点に置かれた地震計に記録された数値で表すというルールをつくった。

だが、地震計が必ず震央から一〇〇キロの地点にあるとは限らないので、一九四五年、グーテンベルがその方式を修正。現在は、世界各地の地震計の記録を使って、世界のどの地域に起きた地震でもマグニチュードが計算できるという方式を考案した。

マグニチュードの数値が大きくなると、地震のエネルギー規模は約三二倍大きくなる。

▼キャディ

——もともとは、どんな意味？

十六世紀の中ごろ、スコットランドにメアリー・スチュアートという女王がいた。彼女は、いったんフランス皇太子妃となったが、夫の死で帰国し、女王の座についた人物だ。

むろん、スコットランドは当時からゴルフの本場であり、彼女は十六世紀のスコットランドを代表する女性ゴルファーでもあった。

そして、彼女はボール集めの少年のことを「キャデ」と呼んでいたという。キャデとは、彼女が嫁いだフランスでは「貴族の若者」という意味。ここから、ゴルフバッグを運んだり、ゴルフアーのアシスタントを意味するキャディという言葉が生まれた。

さんまい

後に、メアリーは、ゴルフ三昧がたたったわけでもないのだろうが、反乱にあつて弟に譲位し、イングラントに亡命した。だが、亡命先でも、エリザベス一世に十九年間も幽閉ゆうへいされたあげく、女王暗殺未遂事件に連座して処刑された。

名女性ゴルフアールとして、ボールの行方は読めても、自分の運命の行く先までは読めなかったようである。

【コラム】

「知らぬ顔の半兵衛」 「小言幸兵衛」 「名無しの権兵衛」

——どんな人の名前？ 

「く兵衛」というのは、古くから男性の名前によくつかわれてきた。そのため、この「く兵衛」のつく言葉は、いまでもたくさん残っている。

はんべえ

たとえば、とぼけることを「知らぬ顔の半兵衛」というが、この半兵衛は、戦国時代の軍師、竹中半兵衛のことである。

さいとうたつおき

尾張の織田信長と美濃の斎藤龍興との間に戦いがはじまろうとするとき、信長は斎藤方の優秀な軍略家だった半兵衛を味方に引き入れようと、前田犬千代を近づけた。犬千代は、半兵衛の娘と深い関係になって心を動かそうとしたが、半兵衛はその策略を見抜き、逆に犬千代から信長方の情報を探り、斎藤方を勝利に導いた。この話から、知らないそぶりをすることを「知らぬ顔の半兵衛」というようになった。

こごとこうべえ

また、「小言幸兵衛」は、もともとは落語に登場する口やかましい大家のこと。家を借りにきた人に、あれこれ理由をつけて断わり、小言ばかりをいうところから「小言幸兵衛」という言葉が生まれた。

こんべえ

「名なしの権兵衛」は、もともとは「名主の権兵衛」で、東京・赤坂の日枝神社にまつわる手まり歌の中に、そういうフレーズが登場する。このナヌシの権兵衛が、子どもたちが歌ううち「名なし」に変わった。たしかに、権兵衛は名無しではなく、権兵衛という立派な名前がある。

ひえ

「言葉のルーツ」おもしろ雑学

著 者：エンサイクロネット

© Encyclonet

この電子書籍はPHP文庫『「言葉のルーツ」おもしろ雑学』二〇〇一年七月一六日第一版第一刷発行を底本としています。

電子書籍版

発行者：江口克彦

発行所：PHP研究所

東京都千代田区三番町三十一

〒102-8331

webmaster@book-chase.com

製作日：二〇〇八年一月一六日

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。